ちにしても僕には興味がありません。それに人間は何時でも自分の內部に起つてることを全部話し得るものでせうか？」

「まあ、私には何故あなたが心にある全部を自由にお話なさることが出來ないのか解りませんわ。」

「いい、あなたには出來ますか？」とバザロフは訊いた。

「ええ。」

一すためらつてからアンナ・セルギエウナは答へた。

バザロフは俯向いた。「あなたは僕よりも幸福です。」

アンナ・セルギエウナは疑はしさうに彼を見た。

「何とでもお好きなやうに。でも一緒に暮して無駄ぢやありませんでしたわ。いいお友達になりましたもの。それで屹度――何と言つたらよろしいか、あなたの强情や無口はたうとう無くなりますでせうねえ。」

「ぢやあなたは……あなたの言葉に從ふと無口……それから强情にお氣づきでしたか。」

「ええ。」

バザロフは立つて窓側へ行つた。

「で、その無口の理由を知りたいんですか？　僕の心に何が起つてゐるかを知りたいんですか？」

「ええ。」オディンツォーフ夫人は自分にもその時は解らぬ或恐怖に似たものを持つて答へた。

「怒りはなさいますまいね？」

「ええ、怒りはいたしません。」

「ええですつて？」と、バザロフは彼女に背を向けて言つた。「それでは僕はあなたを馬鹿のやうに狂人のやうに愛してゐる、と言はせていただきませう、……それは、あなたが無理に僕に言はせたのです。」

オディンツォーフ夫人は兩手を前に伸ばした。然しバザロフは額を窓に當ててゐた。呼吸は苦しく全身は明らかに顫へてゐた。が、それは青年の臆病の顫へでもなく、又自分を囚へた思ひを最初に告白した甘い怯えでもなかつた。實にそれは彼の內部にある情熱の爭鬪、强い、苦しい――憎惡に稍々似た情熱の爭鬪であつた。……オディンツォーフ夫人は彼に對して恐れと悲しみとを感じた。

「イエフゲニイ・ワシリイッチ！」と彼女は呼び掛けた。それには我知らず優しい響が籠つてゐた。

バザロフは不意に振り返つた。そして探るやうな瞳を彼女に投げたかと思ふと、彼女の兩手を掴んで急に自分の胸に抱き寄せた。

彼女はその抱擁から直ぐには遁れようとしなかつたが、一瞬の後には、遙か離れて隅に立ち、其處からバザロフを瞶めてゐた。バザロフは突き進んだ……。

「あなたは私を誤解してゐらつしやる。」と彼女は驚いて口早に囁いた。若し彼がその上踏み出せば叫聲を立てるやうな風だつた。……バザロフは唇を嚙んで部屋を出て行つた。

三十分の後、女中がアンナ・セルギエウナの處へバザロフからの手紙を持つて來た。ただ一行の手紙、それには、「今日去りませうか、明日まで止まつてもよろしいですか？」とあつた。

「何故お去りになります？　私はあなたが解りません、——あなたは私が解りません。」とアンナ・セルギエウナは返事したが、彼女自身では「私にも私自身が解らない」と考へてゐた。

彼女は晝食の時まで姿を見せないで、自分の部屋を彼方此方と歩き廻つてゐた。そして時に窓側に立ち止つたり時に姿見鏡を見て、まだ燃えるやうな跡の殘つてゐるらしい頭の上をゆつくりと拭いたりした。彼女は心の中で、どうしバザロフにあんな言葉を吐くやうにさせたか、あんな告白をさせるやうにしたか、彼女にはやましい點は何にもなかつただらうか……などと自問した。「私が惡い、」と彼女は考へた。「然し私はこんなことを豫想はしなかつた。」

彼女は思ひに沈んだが、ふとバザロフの進み寄つた時の殆んど獸のやうな顏を思ひ出して顏を染め

た……。

「或は？」と彼女は突然高い聲を出して一寸立ち止り、そのちぢれ毛を掻き上げた。……彼女は鏡に映つた自分の姿を見た。頭が後に下り、半ば閉ぢた眼や唇に怪しい微笑が浮んでゐて、それが自分の混亂してゐる何物かの閃きのやうな氣がした……。

「いや、」と彼女は遂に決心した。「どうならうとも神樣は知つてゐらつしやる。神樣とたはむれることは出來ない。何にしても平和なのが世の中で一番いいことだ。」

彼女の心の平和は亂されてゐなかつた。然し憂鬱を感じて、直ぐに數滴の涙さへ零れた。その涙は彼女に加へられた侮辱のためではなかつたけれど、何故零れるのか解らなかつた。彼女は辱めを受けたとは感じなかつたが、それよりも罪のあることを感じた。さまざまの漠然とした感情や、過去の生活の思ひや、新奇を求める慾望やに動かされて、彼女は自分自身を或ところまで無理に持つて行き、そして背後を强ひて振り返つて見ると、背後には深淵よりも以上のもの、空虚が……憎惡が見えるのみだつた。

十九

オデインツォーフ夫人はあらゆる種類の偏見を持たないと同時に、自制力も强かつたが、晝食に食堂に這入つて來た時は、氣のひけるのを感じた。けれども食事は手際よく運んで行つた。ポルフイリイ・プラトニッチも姿を見せて、いろんな隱れた話をした。彼は丁度町から歸つて來たばかりで、その話の中には知事が秘書官たちを何處かに使ひに出す場合に、馬の速力を早めるために拍車をつけるやうにといふ特別の命令を下した、といふやうなこともあつた。アーカデイは低い聲でカテイアと話してゐたが、公爵夫人の要求にも拔目なく氣を配つてゐた。バザロフは顏を顰めて執拗に沈默を守つてゐた。オデインツォーフ夫人は二度ばかり彼の方を偸み見でなく眞正面から見た。バザロフの眼は伏して、顏は輕蔑するやうな決意の色を何處から何處までも現して、不機嫌で苦り切つてゐた。彼女は「いや……いや……いや……」と考へた。……食事が濟んで彼女は皆と一緒に庭に出た。そしてバザロフが話したいといふ風を見せるのに氣がついて、二歩三歩その方へ寄り立ち止つた。彼は近づいたけれど眼を擧げず、嗄れ聲で言つた。——

「僕はお詫びをしなければなりません、アンナ・セルギエヴナ。乾度御立腹していらつしやるでせうね。」

「いいえ、あなたに腹を立ててはをりませんよ、イエフゲニイ・ワシリイッチ。」とオデインツォーフ夫人は答へた。「然し私は悲しうございます。」

「それなら尙いけない。どつちにしても僕は罰を受けなければならないのです。充分お認めになることを思ひますが、僕の立場は全く愚かしいものです。『何故行くか？』と書いてお寄越しになりましたが、僕は止まつてゐることも出來ないし、又止まつてゐたくもありません。明日お別れいたします。」

「イエフゲニイ・ワシリイッチ、何故あなたは……。」

「何故行くかとおつしやるんですか？」

「いいえ、そのことぢやありませんの。」

「過去は思ひ出さないことですよ、アンナ・セルギエヴナ。……而も晩かれ早かれかうなることに極つてゐたんです。從つて僕は去らなければなりません。僕が此處に止まることが出來たのは、唯一つの條件を思つてですが、その條件は決してないでせう。無躾な申しやうですが、あなたは僕を愛してゐらつしやらない、又今後とても愛しては下さらないと思ひますが？」

バザロフの眼はその時黑い眉の下に輝いた。

アンナ・セルギエヴナは答へなかつた。「私はこの人が恐い。」といふ考が彼女の腦裏を閃いて過ぎた。

「ではさよなら。」とバザロフは彼女の考を察したやうに言つて家に引き返して行つた。

アンナ・セルギエウナはゆつくり彼の後を追つて行き、カテイアを傍に呼んで、その腕を執つた。彼女は全く暮れてしまふまで妹を離さなかつたけれど、骨牌もしないで、始終その蒼ざめた悩ましさうな顔とは全で調和しない高笑をしてゐた。アーカディは困つて、若い男がよくするやうな眼つきをして彼女を眺めてゐた。――それは「どうしたわけなんだらう?」と始終訊いてゐるやうな眼つきだつた。バザロフは部屋に籠つてゐたが、茶の席には出て來た。アンナ・セルギエヴナは何か親しい言葉を掛けようと思つたが、どう言ひ出していいか解らなかつた。……。

意外なことから彼女の當惑は救はれた。執事がシトニコフの來たことを知らしたのだつた。

この若い進歩主義の先生が部屋に飛び込んだ時の奇妙な恰好は、言葉には現せない位であつた。彼は彼一流の厚顔を以て碌々知りもしない、又招かれもしない婦人を訪問しに田舍まで來やうと決心したのだつた。然し、それも才子で親しい友だちが滯在してゐると聞き知つたから來たのであつたが、その癖、彼女に會ふとぶるぶる顫へ出して、前以て暗誦して來た辯解や挨拶の代りに、エフドシア・ククシンがアンナ・セルギエヴナ及びアーカディ・ニコラエウイッチの機嫌を伺ふために自分を寄越しただの、何時もククシンがほめちぎつた噂をしてゐるだの、といふ馬鹿馬鹿しいことを吐き出した。……ところが、其處まで話して來ると、彼はよろよろとして全く氣を轉倒してしまひ、自分の帽子の上

に腰を卸してしまつたのだつた。然し、誰も彼を追ひ出さうとはせず、それにアンナ・セルギエヴナは彼を伯母や妹に紹介までして呉れたので、彼は直ぐに正氣に返つてべらべらとお喋りを始めた。下らないものが時々人生にあつては有益なものである。それは緊張し過ぎた神經を弛め、餘りに過ぎた自負や自己犧牲の感情をも、それが矢張り下らないことであると考へさせて調和する。シトニコフが現はれたために、萬事が稍々ゆつたりとして單純になつた。皆が平生よりも氣持よく食事をして半時間も早く寢床に就いた程だつた。

「君が何時か僕に言つたことを繰り返してもいいが、」アーカディは寢臺に横たはつてから、着物を着代へてゐるバザロフに言つた。「何故君はそんなに憂鬱になつてるんだ? 何か神聖な義務でも果したやうに思へるよ。」

二人の間には先頃から自由な氣輕な冗談を話し合ふ調子があつたけれど、その中には、何時もひそやかな不快が、口に出さぬ疑惑かが必ず含まれてゐた。

「僕は明日親父のところへ行かうと思つてゐるよ。」とバザロフは言つた。

アーカディは身體を起して肱で支へた。彼は驚きと同時に、他の或理由から喜びを感じた。「ああ、それで沈んでるのかい?」

バザロフは欠伸をした。「君も餘り物を知り過ぎると年をとるよ。」

「それでアンナ・セルギエヴナは？」アーカディは追求して訊いた。

「アンナ・セルギエヴナがどうしたつていふのさ。」

「彼女が君を手離すだらうかといふ意味だよ。」

「僕は彼女の雇人ぢやないからね。」

アーカディが考へ込んでゐる間に、バザロフは横になつて、顔を壁の方に向けた。

暫くの時が沈默の内に過ぎた。

「イエフゲニイ？」と突然アーカディが叫んだ。

「うん？」

「僕も明日一緒に立たう。」

バザロフは返事をしなかつた。

「ずつと家に歸らう。」とアーカディは續けて言つた。「ホーロフスキイまでは君と一緒に行けるし、君はフエドツトの家で馬を手に入れることが出來るよ。僕は君の家の人たちと近づきになりたいんだが、皆さんに厄介をかけては濟まないからね。無論、君は又僕のところへ來て呉れるだらう？」

「荷物を皆君のところへ置いて來たから。」とバザロフは振り向きもしないで言つた。

「何故歸るんだ、而も同じく急に、とバザロフは訊きさうなもんだが、何故默つてるんだらうな？」とアーカディは考へた。「實際どうして俺は歸るんだらう、又どうして彼は歸るんだらう？」と彼は考を追求した。自問に對して滿足な答を得ることが出來なかつた。そして心は或苦しい感情に充たされた。こんなにまで慣れた生活と別れるのは辛いことだけれど、一人だけで殘るのは尚更變な氣持だつた。

「あの二人の間には何かがあつたのだ。」彼は理論を推して行つた。「彼が去つてから殘つてゐたところで、どんないいことがあるだらう？　彼女は全く俺を苦にしてゐる。俺は俺に殘された最後のものをも失ひつつあるのだ。」

彼はアンナ・セルギエウナを空想し出したが、次第に他の姿が現れてこの若い未亡人の愛らしい像を消して行つた。

「カテイアをも失ふといふことは悲しいことだ。」アーカディは、もう涙に濡れてゐる自分の枕に囁いたが、……急に髮を掻き上げて聲高に言つた。――

「どうしたつてシトニコフのやうな馬鹿が此處に來たんだらう？」

バザロフは初めて、床の中で身體を動かして、冗談のやうに、「君だつて馬鹿だらうよ、ね。シトゥコフは吾々にとつて缺くべからざるものだ。僕は――解つたかね、僕は彼のやうな馬鹿が必要なんだよ。實際煉瓦を燒くのは神の仕事ぢやないからね！……」

「おお！」とアーカディは心の中で思つた。そしてその瞬間に、バザロフの底知れぬ自負心が明らかになつた。

「ぢや君と僕とが神かね？　少くとも君は神だか、僕は馬鹿かね？」

「うむ、」とバザロフは言つた。「君は矢張り馬鹿だね。」

アーカディが翌る日バザロフと一緒に立つつもりだといふことをオディンツォーフ夫人に話した時夫人は別に驚きもしなかつた。彼女は疲れて何かに心を奪はれてゐるらしかつた。カティアは默つて眞面目に彼を見てゐた。公爵夫人は肩掛の下で十字を切るやうなことまでしたので、彼もそれに氣がつかないではゐられなかつた。一方でシトニコフは全く呆氣にとられてゐた。彼はロシアの仕立てでは見られない程の新しい流行服を着て、朝食に來たところだつた。昨夜彼は自分の持つて來た服裝の量で召使の男を驚かしたが、今不意に二人の友は彼を見棄てて行くのだつた！　彼は二三歩小刻みに

進み出したが、灌木の端に追ひ詰められた兎のやうに又後退りした。そして急に、泣き出すばかりの容子で、自分も行かうと言ひ出した。オディンツォーフ夫人は別に引留めようともしなかつた。

「僕は非常に氣持のいい馬車を持つて來たんだ、」と、この運の惡い青年はアーカディを返り見て言つた。「君はそれで僕と行かう。そしてイエフゲニイ・ワシリイッチは君の馬車に乘ればいい。その方が便利だよ。」

「だが實際、君の道とは違ふよ、それに僕の處までは隨分の道程だ。」

「そんなことは何でもない、何でもない。僕は暇な身體なんだから。それに、あちらの方に用事があるんだから。」

「酒賣りかね？」とアーカディは少し馬鹿にしたやうに訊いた。

然しシトニコフはすつかりしよげて、例の笑聲さへも立てなかつた。

「全く僕の馬車は氣持がいいんだがなア、」と彼は呟いた。「それに皆の乘れる席があるんだ。」

「シトニコフさんの折角の申出なんですからその通りなすつてはいかがです。」とアンナ・セルギエウナが口を挿んだ。

アーカディは彼女の方をちらと見やつて、意味あり氣に頭を下げた。

客は朝食が濟んでから出發した。オディンツォーフ夫人はバザロフにさよならを言つて手を差し出した。「又お眼にかかれますでせうか？」

「お指圖の通りに。」とバザロフは答へた。

「その時はお眼にかかりませう。」

アーカディが眞先に階段を降りた。そしてシトニコフの馬車に乘つた。執事は恭々しく彼を助けたが、彼はその執事を氣持よく殺しでもするか、それとも泣き出したいやうに思つた。バザロフもその馬車に腰を卸した。

ホーロフスキイに着いた時、アーカディは驛の主人のフェドットが馬の用意をするのを待つてゐたが、バザロフの馬車の方に行つて懷しさうな微笑を浮べながら言つた。

「イエフゲニイ、君の方へ入れて呉れ。君の方へ來たくなつた。」

「お這入り。」とバザロフは口の内で言つた。

シトニコフは口笛を吹きながら馬車の車輪の周圍を彼方此方と歩いてゐたが、この言葉を聞いて、口を呆然開いたきりだつた。その間にアーカディは自分の荷物を以前の馬車から卸してバザロフの傍に席を占め、今までの道づれたるシトニコフに丁寧にお辭儀をしながら、「出して呉れ！」と言つた。

馬車は轆り出してやがて見えなくなつた。……全く狼狽してしまつたシトニコフは自分の馭者を見たが、馭者は馬の尻のあたりに鞭を當ててゐるきりだつた。シトニコフも馬車に飛び乘つて、通りかかつた二人の百姓に「馬鹿！ 帽子を冠れ」と呶鳴りながら町の方へ走らした。そして其處で翌日彼はククシン夫人の處に出掛けて、この二人の「胸の惡い生意氣野郎」を手きびしくやつつけた。

アーカディはバザロフの傍に腰を卸して、その手を熱く握つたが、かなり長い間何も言はないでゐた。バザロフはその握手と沈默との意味を知つてゐるらしかつた。彼は前夜一睡もせず、煙草も吸はず、そしてこの數日間食物も碌にしてゐなかつた。少し痩せた横顔が眼深に冠つた帽子の下に暗く鋭く見えてゐた。

「おい君、」とやつと彼は口を利いた。「煙草をくれないか。然し見てくれ、舌が黄色くなつてるかい？」

「うん、なつてるよ。」アーカディは答へた。

「ふん……煙草も詰らない。身體は滅茶苦茶だ。」

「たしかに近頃變つて見えるよ。」とアーカディも注意した。

「でもないよ！ 直ぐによくなるんだ。が、唯一つ氣になることがある。といふのは、僕の母が氣が優し過ぎてね、酒樽のやうに圓つこくなつて一日に十遍も食べないと、もう母は心配するんだからね。

親父の方はいい。いろんな事情を知つてるからね。いや、煙草も吸へないや、」彼はかう附け足して煙草を道傍に投げ棄てた。

「二十哩位あるかね？」とアーカディは訊いた。

「うむ、だがこの聖人に訊いて御覽。」

バザロフは馭者臺に座つてゐるフェドットの雇人を指した。

然しその聖人は「ここらあたりの測つて見ない道程が誰に解るもんかね。」と答へたきりで、頭を下に動かしてゐる馬を小聲で叱りつけた。

「さうだ、さうだ、」バザロフは始めた。「あれは君には教訓だよ、いい手本だよ。人間は凡て綱に吊るされてゐる。何時足許に深淵が開けるか知れやしない。而も人間は進んで自らのためにあらゆる勞苦を作り出し、その畢句には一生を臺なしにしてしまはなきやならんのだ。」

「何を諷してるんだい？」アーカディは訊いた。

「何をも諷してるんぢやない。打ちまけて言へば君も僕も馬鹿な眞似をしたといふことさ。こんなことを言つて何になるんだ！ 而も僕は醫學上の經驗を得。自らの病氣に憤慨する者は、——たしかにそれに打ち勝つよ。」

「僕にはよく解らない。君は不平を零すやうなことを持つてゐない筈だが。」

「僕のいふことがよく解らないんなら、話さう、——僕の心にとつて、女に小指の先でも支配されるよりは道の石でも割つた方がましだといふのさ。それは凡て……」

バザロフは、氣に入つたロマンチシズムといふ言葉を、其處へ出さうと思つたが、それを止めて、

「……凡て下らないことだ。今君は僕を信じないけれど僕は言ふよ、君も僕も女の社會に這入つて非常に愉快だつた。然しそんな社會を棄てることは正に暑い日に冷たい水を掛けるやうたものだ。そんな些事に費してる時間を人間は持つてゐない。人間は馴らさるべからずと、有名なスペインの諺にもあるぢやないか。おい君、聖人、」と彼は馭者臺の方を向いて言つた。「——お前は女房があるかね？」

百姓はどんよりした爛れ眼の顏を二人の方に見せた。

「女房？ さうさ、誰だつて女房はあらあね。」

「打つたことがあるかい？」

「わしの女房をかね？ 時にやあるが、よつぽどの譯がなきやしねえな。」

「それはいい。成程、それで女房はお前を打つかい？」

百姓を手綱を引いた。「妙なことをおつしやる。御冗談がお好きなこつた。」……彼は明らかに感情を

害した。

「聞いたか、アーカデイ・ニコラエウイツチ！　ところが吾々は打たれたんだ……教育のある人間だもんだからな。」

アーカデイは無理に笑つたが、バザロフは横を向き、それきり最後まで口を利かなかつた。

二十哩はアーカデイにたつぷり四十哩あるやうに思はれた。然し遂に、少し登り道にかかると、バザロフの兩親が住んでゐる小さな村が現れた。それに赤楊の若樹の矮林の中に藁葺の小さな家を見ることが出來た。最切の小舍では二人の百姓が手に帽子を持つて罵り合つてゐた。「貴樣は大豚だ、小豚よりもいけねえぞ、」と一人が言へば、「貴樣の女房のさまを見ろ、」と一人は應じてゐた。

「彼奴等の亂暴な振舞と爭ひのふざけた調子から見ても、親父が百姓を餘り壓迫してゐないことが解るだらう。」とバザロフはアーカデイに話した。「おや、家の戸口へ親父の奴一人で出て來てるぜ。ベルが聞えたに相違ない。たしかに親父だ——顏が解る。ああ！　何て白髮になつたんだらう、可哀さうに！」

二十

バロザフは馬車から身體を出した。アーカデイは友の肩越しに顏を出して、小さな家の石段に立つてゐる、背の高い、痩せた、髮の亂れた人の姿を見た。細い鷲鼻で、古い軍服を釦も掛けないで着て、足を大股に開き、長いパイプをくはへ、太陽が眩しいので、眼を細くしてゐた。

馬は止まつた。

「たうとう着いた、」

バザロフの父はかう言つて、パイプが指の間で踊つてゐるのも構はずに喫ひつづけながら、「おい、出ろよ出ろよ、抱かしてくれ。」

彼は息子を抱き始めた。……「エニユーシヤ、エニユーシヤ」と呼ぶ女の顫へ聲が聞えて來た。と、戸がばたんと開いて、白い帽子と短い縞の短衣をつけた、肥えて背の低い小柄な老婦人が現れた。彼女は泣いてよろめきながら出て來たが、若しバザロフが支へなかつたら、たしかに倒んでしまふところだつた。彼女は肥えた小さな手を直ぐに息子の頭のまはりにかけて、顏をその胸に押し當てた。しんとして、聞えるのは彼女の途切れがちの泣聲だつた。

老バザロフは重く呼吸をして眼を更に細くした。

「さあ、それで澤山、澤山、アリシヤ、お止し。」と彼は言つて、馬車の上にぢつとしてゐるアーカデ

イと眼を見合した。その間に馭者臺の百姓はこちらを振り向いて、「一向しないでもよろしいことぢや、お止しなされ。」と言つた。

「ああ、ワシリイ・イワニツチ、」と老婦人は訥つた。「長い間、あなた、この可愛い、エニユーシヤを……。」そして手を離さないで、涙に濡れた、情愛の籠つた、皺だらけの顏を少しばかりバザロフから離して、喜ばしい、をかしな眼つきで、ぢつと彼の顏を瞶めてゐたが、又頸に倒れかかつてしまつた。

「よろしい、よろしい。それも尤ものことだ、」とワシリイ・イワニツチは口を入れた。「だが、家の中へ這入つた方がいいぢやないか。イエブゲニイのお客樣が此處においでなんだよ、御免なすつて下さい。」と附け足して彼はアーカデイの方に向き直つた。そして足をこすりながら、

「御存知の通り、女は涙弱いものでして。それに母親の心は……」

彼の唇と眉毛とは餘りに引き釣つて、髯は顫へてゐた……。然し彼は彼自身を制して殆んど平氣な風を裝つてゐた。

「這入りませう、お母さん、本當に。」とバザロフは言つた。そして弱々しい母親を家の中に入れ、氣持のいい腕椅子に倚らせて、も一度慌しく父親に抱きついてからアーカデイを紹介した。

「お近づきになつて心から嬉しいです。」とワシリイ・イワノウイッチは言つて。「然し御意に副ふやう

なことは何一つ出來ません、私の家では何も彼もが明け放しで、軍隊式にやつてをります。アリナ、どうか靜かにしてお呉れでないか。何て氣が弱いのだ! お客樣はお前にお困りなさるよ。」

「あなた樣、お名前を伺ひたうございますが……」と老婦人は涙聲で言つた。

「アーカデイ・ニコラエウイッチ。」ワシリイ・イワノウイッチは低い聲ではあつたが嚴粛に言つた。

「こんな馬鹿な年寄りでございますから御免下さりませ。」

老婦人は鼻をかんで、左右に頭を傾けながら、念入りに兩眼を次々にと拭いた。「御免下さりませ、御存知の通り、この……子を見ずに死ぬのではないか、生きてゐられないのではないかと思つてをりましたのでございます。」

「うん、それがかうして生きてこの子に會へたのだ。」とワシリイ・イワノウイッチは口を入れた。そして「タニユーシヤ」と、戸口で臆病らしく覗いてゐた、派手な赤い木綿服を着て、素足でゐる十三ばかりの少女を振り向いた。「お前、水を一杯持つてお出でな、――盆に載せてだよ、酔つたね?――それでは皆さん、老ひぼれ武者の書齋に御案内いたしますか。」と何だが昔風の冗談口調で言つた。

「も一度抱かしてお呉れよ、エニユーシヤ、」とアリナ・ウラシエウナは泣いた。バザロフは彼女の方に膝を屈めた。

「まあ、何て立派な男になつたことでせう！」

「うん、立派かどうか知らんが、」とワシリイ・イワノヴイッチは、「所謂オムフエイだよ。ところで、アリナ・ウラシエヴナ、お前の母親らしい氣持が濟んだら、今度はお客樣の胃袋を滿足させるやうな思案をして欲しいものだな。何故つて、お前も知つての通り、鶯だつてお伽噺きりでは生きてをれないからな。」

老夫人は椅子から立ち上つた。「ワシリイ・イワノウイッチ、もう御膳は出來てるでせう。私臺所へ驅け出してサモワルを持つて來るやうに言ひつけて參りませうよ。何も彼も。だつて、この子にも會はないで、この三年の間、食物も飲物も御馳走しなかつたんですもの。」

「よし、氣をつけてね、お母さん。急いでお願ひだ。それでと、皆さん、どうかこちらへ入らして下さい。や、テイモフエイッチがお前の御機嫌伺ひに來たよ、イエフゲニイ、この男も喜んでるんだよ、え、お前喜んでゐないかい？　どうか、こちらへいらして下さい。」

そしてワシリイ・イワノヴイッチは先に立つて、踵の磨り減つたスリッパをばたばたさせながら歩いて行つた。

彼の家は全體で小さいながら六間あつた。その一間は――彼等の通された部屋は、書齋と呼ばれて

ゐた。燻つたやうに靑の塵が積つて黒くなつた紙を貼つた、太い脚の卓子が二つの窓の間を一杯に占めてゐた。壁には、トルコ人の銃、鞭、軍刀、二枚の地圖、幾枚かの解剖圖、ホッフランドの肖像、黒枠に入れてある毛織の組合文字、ガラスの下の勳記などが吊るされてゐた。ところ〴〵破れて穴の明いてる革の寢椅子が、赤縁造りの大きな戶棚の間に置かれてあつた。戶棚の上には、本だの箱だの剝鳥だの甕だの硝子瓶だのが、ごちやごちやに並べてあつた。一方の部屋の隅には、壞れたガルヴァニ電池が置かれてゐた。

「アーカディ・ニコラエウイッチ、豫め申し上げて置かなきやなりませんが、」とワシリイ・イワノウイッチは言ひ出した。「吾々は言はば、露營の住ひです……」

「一寸、およしなさい。何を辯解なすつてるんです。」バザロフは父を遮つた。「キルサノフは僕の家が金持でないことも、料理人のゐないこともよく知つてゐますよ。だが、この人の部屋は？　その方が問題ですよ。」

「尤もだ。イエフゲニイ。離れの方に立派な部屋があるよ。非常に居心地がいいに相違ないんだ。」

「ぢや離れがあるんですか？」

「なに、例の湯殿のある家でございますよ。」とテイモフエイッチが口を入れた。

「湯殿の隣りなんだよ。」とワシリイ・イワノウイッチは慌しく附け足した。「今は夏だからな……。直に行つて仕度しよう。それでお前は、テイモフエイッチ、荷物を持つて來て呉れ。イエフゲニイ、お前には無論私の書齋を明け渡さうよ、どれ。」

「あの通りさ、解つたゞらう。剽輕な爺さんで、非常に人がいいのさ。」

ワシリイ・イワノウイッチが出て行くと直ぐにバザロフが言つた。「君のお父さんとよく似た奇妙な代物だが、ただ、行き方が違ふきりさ。お喋りだよ。」

「お母さんも恐ろしくいい人らしいね。」とアーカデイは言つた。

「ああ惡氣はないね。まあどんな御馳走を出すか見てゐ給へ。」

「皆さんが今日入らつしやらうとは思つてゐませんものでしたからね。牛肉も取り寄せてないんでございますよ。」とテイモフエイッチはバザロフの箱を運びながら言つた。

「牛肉なんかなくつても頗る結構だよ。月に吠えたつて仕樣がないからね。諺にも言つてある、清貧は惡にあらずとね。」

「お父さんの百姓は幾人ゐるの？」とアーカデイは突然訊いた。

「土地は親父のぢやないんだ。十五人もゐたかと覺えてるね。」

「皆で二十二人でございます。」不快さうにテイモフエイッチが附け加へた。

スリッパの音が聞えて、ワシリイ・イワノウイッチが現れた。

「もう直ぐにお部屋が調ひますよ。」と得意さうに叫んでから、「アーカデイ・ニコライッチでしたね、たしかさうだと覺えてをりますが……。これがあなたのお附きです。」

彼は一緒に連れて來た散切頭の子供を指しながら言つた。それは肱の破れた青い縁取りの服を着た借物の靴を穿いた少年であつた。

「名前はフエドカと言ひます。伜が言ふなと申しますのに、又繰り返して申しますが、大したおもてなしが出來ませんので。けれど、この子はパイプを詰めることを知つてをります。無論煙草を召上るんでせう？」

「私は大抵卷煙草を喫つてゐます。」とアーカデイは答へた。

「それは氣が利いてゐらつしやる。私も卷煙草黨の方ですが、こんな田舍では手に入れるのが厄介でしてな。」

「もう愚痴は澤山ですよ。」又バザロフは遮つた。「その長椅子にお掛けになつて、顔を見せて下さる方がよくはありませんか。」

ワシリイ・イワノウヰッチは笑つて腰を卸した。彼は顔が非常に息子と似てゐた。けれども顔は低くて狹く、口は稍々大きかつた。彼は始終身體を動かして、服が腋下で締めつけるもののやうに肩を揺つたり、眼を瞬いたり、咽喉を鳴らしたり、手眞似をしたりした。反對にバザロフの冷淡な落ちつきさが眼立つて見えた。

「愚痴だつて！」ワシリイ・イワノウヰッチは繰り返した。「イエフゲニイ、こんな田舍の暮しを打ち明けてお客樣に同情して頂かうといふつもりだと思つては困るよ。反對さ、思索する人にとつては田舍なんてないといふことを言つてるんだ。私は少くとも田舍者になるまいと努めてゐる、言はば時代おくれになりたくないんだ。」

ワシリイ・イワノウヰッチはアーカディの部屋へ行く途中で引出して來た新しい黄色い絹ハンカチを、ポケットから出して、空に振り廻しながら喋り續けた。「私は今、例へば、私にとつてのかなりな犧牲を拂つて百姓を貸附制度にし、利益半分といふ條件で土地を委してしまつた、といふやうなことを話すつもりではありません。そんなことは自分の義務だと思つてゐますよ。他の地主たちは夢にも思はないことだけれど、常識がさうさせるんでしてな。私は科學や健康のことを話したいのです。」

「成程、此處に千八百五十五年の『健康の友』があつたやうでしたね。」とバザロフは言つた。

「あれは昔の友だちが親切心から送つてくれたものだ。」ワシリイ・イワノウヰッチは口早に答へてから「吾々は、例へば骨相學にさへ或意見を持つてゐます、」と、それは主としてアーカディに話し掛けて幾つかに分れてゐる、戸棚の上の小さな塑像の頭を指しながら「シエンラインやラアデマッヘルのことでも知らないではありませんよ。」と附け足した。

「何故この地方の連中はラアデマッヘルをまだ信じてるんでせう？」とバザロフは訊いた。

ワシリイ・イワノウヰッチは咳拂ひをして、「この地方では……無論皆さんは最上のことを知つてゐる。どうして吾々が皆さんと歩調を合して行けますものか。吾々の時代にはホフマンの病源体液學派だの、ブラウンの活力論だのといふものがあつた。――それ等は吾々にも滑稽なものと思はれるが、言ふまでもなく一時は大人物だつた。誰かが新しく出て來てお前たちと一緒にラアデマッヘルの位置を奪つてしまつた。お前はその人に頭を下げてゐるんだ。然し又二十年經てば、矢張り笑はれる順番が來るんだよ。」

「お慰みまでに申しませうが、今、吾々は醫學全部を笑つてゐます。だから誰にも頭を下げたりいたしません。」とバザロフは注意した。

「え？　だつてお前は醫者にならうといふのぢやないか、え」

「えゝ、だけどこれはそれとは別問題です。」

ワシリイ・イワノウイッチは、まだ燻つてゐるパイプに中指を突つ込み、「うん、多分、――私は議論する氣はないんだ。私は何か？　退職軍醫に過ぎない。今運命は私を百姓にしてしまつた。――私はあなたのお祖父さんの旅團に勤務してゐました。」と彼は又アーカディに話し掛けた。「さうでした。當時私は色んなことを見聞しました。社會のあらゆる階級と交り、あらゆる種類の人と接しましたよ。御覽の通りのこの私がウイッゲンスタイン公やツーコウスキイの脈を見たんです。その人たちは十四日（譯者註。千八百二十五年十二月黨の變を意味す）に南軍に屬してゐましたが、お解りですか、（此處で彼は意味あり氣に口を閉ぢた）よろしい、然し私の仕事はそれきりでした。他のことには一切關係なしでした。あなたのお祖父さんは非常に名譽ある方で、眞の軍人でしたね。」

「打ちまけて言へば間拔けの方さね。」と物憂げにバザロフは言つた。

「ああ、イエフゲニイ、何といふことを言ふのだ！　考へて御覽……無論キルサノフ將軍はその……」

「さあ、それは止しませうよ」バザロフは口を入れた。「途中でお父さんの山毛欅の林を見て喜びましたが、莫迦に延びましたね。」

ワシリイ・イワノウイッチの顏は輝いた。「それなら今出來てる小さな庭を見て吳れなきや。樹は皆

私が植ゑたんだよ。果物もある、木苺もある、藥草の種類も悉く揃つてゐる。若い連中がどんなに賢からうと、草中に石あり言葉ありと言つた老パラセルサスは眞理を語つてゐる。……私は無論、知つての通り醫者の療治は止めてゐるが、一週に二三度は昔の商賣をしなきやならんのでな。どうしたらいいかと相談を持ち込まれると――追ひ歸すことは出來んからな。時々は貧乏人に賴まれることもある。そして實際この地方には一人も醫者がないんだ。近所に退役少佐が一人ゐて、これもをかしいぢやないか、百姓を診察するのさ。『醫學をやつたのかね？』と私が訊いたら、『いいえ、慈善心の方でやるんです』と皆の返事だ。……はつはつは、慈善心の方でだつて！　どう思ふね。お前は？　はつはつは……。」

「フエドカ、煙草を詰めてくれ！」とバザロフは無雜作に言つた。

ワシリイ・イワノウイッチは自棄氣味の調子で言ひ續けた。「それから今一人醫者がゐる。これが或家を見舞ふと、患者は死んだ後なのでその家の下男が醫者に物を言はせないで、もうあなたに御用はありませんと言つたんだ。醫者は以外だつたので、どぎまぎして訊いた『おやおや、主人は死ぬる前に逆吃をしたらうな？』『ええ』『澤山逆吃をしたらうなえ？』『えゝ』『ああ成程、それでいいよ』かう言つて先生行つてしまつたんだ。はつは……。」

　老人は一人で笑つてゐた。アーカデイは無理に笑顏を作つたが、バザロフは背伸びをしたのみだつた。談話はこんな風で一時間餘りも續いた。アーカデイは部屋に行つた。湯殿に接した控室であつたが、きちんとして綺麗になつてゐた。漸くタニユーシヤが來て、食事の仕度が出來たと告げた。

　ワシリイ・イワノウイッチが最初に立ち上つて「さあ皆さん。私の行き屆きませんところはどうか御勘辨なすつて下さい。たしかに家内の方は御滿足をお與へするだらうと思ひます。」

「急拵へではあつたけれど、食事は非常に上等で且つ豐富におつた。ただ酒が餘りいいと言へなかつた。テイモフエイッチが町の有名な酒屋から買つて來た黑シエリイ酒のやうな酒で、少し銅臭があり樹脂の臭氣がした。それに蠅が非常にうるさかつた。平生は下男の小供が大きな綠の枝で逐ひ拂ふのだつたが、今日はワシリイ・イワノウイッチが若い人々の批評を恐れて、その子を他處にやつたのだつた。アリナ・ウラシエウナはやがて着物を改めて出で來た。彼女は絹のリボンが附いた高い帽子を冠り、青い花模樣のある肩掛を掛けてゐた。彼女はエニユーシヤを見ると直ぐに又泣き出したが、それを夫は別に止める必要はなかつた、何故といつて彼女はその肩掛の汚れるのを恐れて自分で淚を拭いてしまつたから。何かを食べてゐるのは二人の青年きりで、主人夫婦はもう食事を濟ましてゐた。

　フエドカは初めて長靴を穿いたので明らかにそれを氣にしながら給仕をしてゐた。顏の輪廓が男性的な片眼のアンフイスシユカといふ女がフエドカの手助けをしてゐた。これは、家政婦や鳥の世話人、洗濯女を一人で兼ねてゐた。ワシリイ・イワノウイッチは食事の間中、部屋を歩き廻つて、全く嬉しさうな、明るい顏をして、ナポレオンの政略やイタリイ問題の紛擾に就いて自分の感じた大心配を話した。アリナ・ウラシエウナはアーカデイに少しも注意しなかつた。彼女は食事をすすめないで、櫻色の唇をした、頰や眉の上に小さな黑子のある、善良さうな表情の圓顏を、小さな拳の上に支へながら、息子から眼を離さず、始終溜息をついてゐた。彼女は息子がどの位滯在してゐるつもりか、聞いて見たくつて溜らないのだつたが、それを訊くのが心配だつた。

「若し二日間と言つたらどうだらう、」と彼女は考へて心が暗くなつた。燒肉の後で、ワシリイ・イワノウイッチは一寸姿を消して、シヤンペン酒の口を開けた半ば殘つてゐる瓶を持つて來た。

「さあ、」と彼は叫んだ。「こんな田舍に住んでゐますけれど、目出度い時を祝ふ物は持つてをりますよ!」

　彼は三つのシヤンペン盃と一つの葡萄酒盃とにそれを注いで、珍客の健康を祝するといふので直ちに軍隊式に盃を擧げた。そしてアリナ・ウラシユウナにも一滴も殘さず飮み干させた。食後の砂糖漬の果子が出たが、甘い物の食べられないアーカデイも、新しく拵へた、四品位は食べなければと思

つた。するとバザロフは無遠慮にそれ等を斷つて直ぐに煙草を吹かし始めた。やがてクリームやバタやビスケットなどと一緒に茶が出された。それからワシリイ・イワノウイッチは皆を庭に案内して、夕暮の美を讃めようとした。庭腰掛のところを過ぎながら彼はアーカデイに囁いた。

「此處で瞑想するのが私は好きでしてな、夕日を眺めながらですよ。私のやうに世棄人には恰好なとです。それから此處の少し先には、ホレースの好きだつた樹を幾本か植ゑました。」

「何の樹です？」バザロフが横から聞いて訊いた。

「あゝ……アカシスさ。」

バザロフは欠伸をし出した。

「もう旅人が夢の神の腕に抱かれてゐる頃だらうな。」とワシリイ・イワノウイッチは言つた。

「さう、寢る時間ですね。」とバザロフが言つた。「その通り、たしかにその時です。」

彼は母親にさよならと言つて額に接吻した。彼女は彼を抱いた、そして背後から三度ばかりそつとお祈りをした。ワシリイ・イワノウイッチはアーカデイを部屋に案内して、「氣持よくお眠み下さい。私もあなた位の時はよく寢たもんです。」と言つた。そしてアーカデイは實際、この湯殿の家でよく眠つた。部屋には新しい木の香がして、煖爐のうしろでは二匹の蟋蟀が眠さうに鳴き合つてゐた。ワシリイ・イワノウイッチはアーカデイの部屋から自分の書齋に歸つて、長椅子の、息子の寢てゐる足許のところに腰を卸した。彼は話がしたいらしく息子の方に眼をやつたが、バザロフは眠いからといふので直ぐに父親を追ひ返してしまつた。けれども夜が明けるまで眠らなかつた。彼は瞳を見開いてぢつと闇の中を瞶めてゐた。子供の頃の記憶は彼を支配する力を持つてゐず、それに最近の苦い情緒の印象から脱する隙も持つてゐなかつた。

アリナ・ウラシエヴナは第一に心ゆくまでお祈りをしてから長い長い間、アンフイスシュカと話してゐた。アンフイスシュカは女主人の前にぢつと立つて寂しさうな片眼を注ぎながら、イエフゲニイ・ワシリウイッチに就いての觀察や推測の全部を奇妙な囁聲で傳へてゐた。老夫人の頭は、幸福や酒や煙草の煙やでぐらぐらしてゐた。彼女の夫は何か言はうとしたが、失望したので手を振つてそれを止めてしまつた。

アリナ・ウラシエヴナは純然たるロシア舊時代の婦人で、本來ならば二世紀も以前モスクウ時代に住むべきだつた。彼女は非常に獻身的で感情的で、占や呪文や夢やあらゆる類の吉凶を信じた。狂氣じみた人々の豫言をも、家の精をも、樹の精をも、不吉な邂逅をも、毒のある眼をも、素人療治をも信じて、昇天祭には特に用意した鹽を食べた。そして此世の終りが近づいてゐることを信じたり、復

活祭の前の晩、祭壇の灯が消えなければ蕎麥の收穫がよくなることや、茸は人間の眼に見られると大きくならないことやを信じたり、惡魔は水のある土地にゐるのを喜ぶことや、ユダヤ人は皆胸に血潮のついた布を持つてゐることやを信じたりした。彼女は、蛇、蛙、雀、蛭、雷、冷水、小牛の腸、馬、山羊、赤毛の人、黑猫を恐がつたり、蟋蟀と犬とを汚れた動物だと思つたりした。彼女は小牛の肉と鳩と蟹と乾酪とアスパラガスと朝鮮薊と兎と西瓜とを食べなかつた。切つた西瓜はバプテイストのヨハネの首を思はせるからだつた。そして牡蠣は話をするだけでも身顫ひをした。一體に食べることは好きだつたが――きちんと斷食はした。二十四時間の內、十時間は寢てゐたが、若しワシリイ・イワノウッチが頭痛がするといふ程のことがあれば、決して寢床に入らなかつた。本は「アレキシス即ち森の家」といふのを除けば一冊も讀んだものはなく、手紙は一年に一度、精々二度位のものだつた。然し家政のことや砂糖漬やジャムを作ることは熱心だつたけれど、それも自分では何一つせず、概して自分のゐる所から動くのが嫌ひだつた。

アリナ・ウラシエヴナは非常に親切で、彼女自身のやり方では決して馬鹿ではなかつた。世の中には命令する義務を持つてゐる主人と主人に仕へる義務を持つてゐる單純な人々とがあるといふ事を知つてゐた。――それで彼女は阿諛や地に頭をつけるか辭儀などを厭とは感じなかつた。然し彼女は眼

下の者には親切に優しくして、決して一人の乞食でも空手で歸さなかつた。そしてお喋りは好きだつたけれど人の惡口は言はなかつた。若い頃は美しく翼琴を彈きフランス語も少しは繰つたが、心にもない結婚をした夫と長年の間、方々を彷徨してゐる內に、その音樂もフランス語も忘れてしまつた。息子は愛してもゐたが溜らなく恐れてもゐた。財產の管理は一切ワシリイ・イワノウイッチに委してしまつて、今では何事にも干渉しなかつた。そして年老ひた夫が差し迫つた政治上の改革や自己の意見やを議論し出すと、彼女は直ぐに呻いたりハンカチを振つたり、恐さうに眉を上へ上へと上げるのだつた。彼女は取越苦勞をして、何時も大災難が湧いて來るやうに思ひ、何か悲しいことを思ひ出すと直ちに泣き始めた……。かうした婦人は今は餘り見られない。それを吾々は喜んでいいかどうか神のみが知つてゐる。

二十一

アーカディは起き上つて窓を開けると、先づ眼に這入つたのはワシリイ・イワノウイッチだつた。東洋風の寛衣を着て、腰にハンカチを捲き、彼は一生懸命に庭を掘り起してゐた。若い客に氣がつくと鋤に凭れながら話しかけた。

「御機嫌よろしう！　よくお眠みになりましたか？」

「ぐつすり眠らせていただきました。」とアーカディは答へた。

「御覧の通り、シンシネタス見たいに、遲い蕪の苗床を作つてゐます。皆が自分の手でめいめいの生きて行くだけのことをしなければならぬ時が參りましたな、有難いことで！　他人に頼らないで、自分から働かなきやなりません。ジャン・ジヤックルツソウは正しいといふことが解りますね。ところで、もう三十分も早いと、これとは全つきり違つた仕事を私がしてるところをお目に掛けるんでしたのに。或る女姓が腹下りだといつて參りましたのでね、――あの連中に言はせれば、腹下りですけれど、吾々の方で言へば、つまり赤痢です。それで私は……どう言つたら一番よろしいかな、阿片劑をやりましたよ。そして今一人の者には齒を拔いてやりまして、痲醉劑をやらうと言ふんですが、……その女は承知しないんですな。私のやるのは一切無報酬でしてね、好事家ともいふものですよ、けれども私は慣れてゐます、御承知の通り私は平民で成上り者で、――と言つて老いぼれでもなく、家内のやうな人間でもありませんが……こちらへ、この木蔭へ入らつしやいませんか。お茶の前に新鮮な朝の空氣をお吸ひになつては？」

アーカディは彼の方へ出て行つた。

「さあどうか。」

ワシリイ・イワノウイッチは頭に冠つた油じみた帽子に軍隊式に手を擧げながら、「あなたは贅澤にも娯樂に慣れてゐらつしやるでせうが、世の中のどんな豪い人でも、少しはこんな掘立小屋でお暮しになつていいものですよ。」

「おや、」とアーカディは口を入れた。「まるで私がその豪い人か何かのやうに聞えますね。それに私は贅澤に慣れてはをりませんよ。」

「これは失禮失禮、ワシリイ・イワノウイッチは丁寧な調子で、「私は今ではこんな殼の中に這入つてゐますが、世界中を飛び廻りました。――何しろ飛びかたで鳥を見分けることが出來ますからね。それに私は私一流の心理學者ですし、且つ人相學者です。何も强ひて言ふんぢやありませんが、さうした天分を持つてゐなかつたら、とつくにめそめそ泣いてゐなきやならなかつたでせうな。こんな哀れな人間はどうにもならなかつたでせうよ。お世辭拔きで申し上げますけれど、私はあなたと伜との仲を拜見して本當に嬉しいんです。先刻あれとも會ひましたが、あれは朝早く起きる習慣がありまして――無論あなたも御存知でせうが――近處へぶらつきに出掛けました。失禮ですが、伜とは何時からのお知り合ひですか？」

「去年の冬からです。」

「成程ね。もう少し伺はせて下さい。然し腰を卸す方がよくはありませんか。父親として無遠慮にお伺ひいたしますが、イエフゲニィに就いてのあなたの御意見はいかがですか？」

「御子息は私が今まで會つた內で最も優れた人の一人ですよ。」アーカディは力を籠めて言つた。

ワシリイ・イワノウイツチの瞳は急に圓くなつて、頬は幽かに緋味を帶びた。鋤が手から落ちた。

「それではあなたは……」彼は何か言ひ掛けた。

「私は信じますよ、」とアーカディは言つた。

「御子息は偉大な前途を持つてゐられます。御家名を擧げるでせう。私は最初に會つた時からその事を信じてゐました。」

「どうして……どうしてさうなんです？」とワシリイ・イワノウイツチはやつとのことで言つた。擴いた口は得意らしい微笑で弛んだ。その微笑は何時までも消えなかつた。

「どうして私が御子息を知つたか、それをお話いたしませうか？」

「ええ、どうか……一緒に……。」

アーカディは話を始めた。オディンツオーフ夫人とマツルカを踊つた夜に話したそれよりも更に熱

を籠めてバザロフのことを話し續けた。

ワシリイ・イワノウイツチは聽き又聽きながら、眼をしばたたいたり、ハンカチを兩手で丸めたり咳拂ひをしたり、髮を掻き上げたりしてゐたが、遂には溜らなくなつてアーカディの方に身を屈め、その肩に接吻した。

「お蔭で大變嬉しうございます。」彼は矢張り笑顏をしたまま續けた。「申し上げなければなりませんが、私の倅を……崇拜してをります。あれの母のことは申し上げたくありません。——世間の母親といふものはああしたものなのです。然し私は倅の前で自分の感情を現すことをしないでゐます。あれはそれが嫌ひですからね。一切感情を現すことを厭がるんです。ところが、そのしつかりした性格が誤解されることもありまして、傲慢だの冷酷だのと思はれますが、あれのやうな人間は常規で判斷すべきではないと思ひますね。どうでせうか？ 此處に一例がありますが、あれのやうな立場にゐる世間の若者は、絕えず兩親に世話を掛けてゐるけれど、あれは、本當になさらないかも知れませんが、生れてからこの方止むを得ないこと以外に一文の金も取つたことがありませんよ。實際ですとも！」

「彼は公平な誠實な人間です。」とアーカディは應じた。

「正にさうです。公平ですね。そして私はあれを崇拜してゐるばかりでなく、アーカディ・ニコラエ

ウイッチ、あれを誇りにしてるんですよ。何時か彼の傳記中に、こんな文句が記入されたならばといふのが私の何よりも望むところなんです。『一軍醫の子なり。されど父は彼の優れしことを知りて、彼の教育のために何物をも惜まざりき……』」老人の聲が途切れた。

アーカディイは彼の手を握つた。

「どうお考へになります、」と、暫くしてからワシリイ・イワノウイッチは訊いた。「彼に就いてあなたのお認め下すつたやうな名譽を、醫學の方面で得ますでせうか？」

「無論醫學の方面ではないでせう。尤もその方面でも、最も先覺者となるに違ひないでせうけれど。」

「ぢや、どの方面でですか、アーカディイ・ニコラエウイッチ？」

「今申し上げるのは困難ですが、兎に角有名にはなりますよ。」

「あれが有名になる！」と老人は繰り返して空想の中に沈んでしまつた。

「アリナ・ウラシエヴナがお茶にお出で下さいましとおつしやいました。」

熟した苺の大きな皿を持ちながら、アンフイスシュカがやつて來た。

ワシリイ・イワノウイッチは立つた。「苺に掛ける冷たいクリームがあるかい？」

「はい、ございます。」

「冷たいのだよ、いいかね！　御遠慮なく、アーカディイ・ニコラエウイッチ。も少しお召し下さい。イエフゲニイはどうしたんだらう？」

「此處にゐますよ。」

アーカディイの部屋からバザロフの聲が聞えた。

ワシリイ・イワノウイッチは直ぐに振り返つて、「ははあ。お友だちを訪ねやうとしたんだね。だが、お前は遲すぎたよ。私たちは長い間話したんだ。これから茶に行かなきやならん、お母さんが呼びに寄越したんでね。序でだが、お前に少し話したいことがある。」

「どんなことです？」

「百姓がゐてね、それが疸血症を煩つて……」

「黄疸のことですか？」

ーさうだ、慢性で、疸血症の惡性の奴だよ。私はセントリイとヨハネ草とを處方し、人蔘を食ふやうに命じ、ソーダもやつたんだが、これは皆姑息療法でね、もつと確實な療法を講じてやらなきやならん。お前は藥のことを笑ふが、何かいい智慧を授けて呉れないかな。だがまあこれは後廻しにして、お茶を先にしよう。」ワシリイ・イワノウキッチは庭の腰掛から勢よく立ち上つて「惡魔ロベルト」の中

の文句を口の內で唄つた。――

「樂しく生き生くるため、
　掟は吾輩の作りしものよ。」

「珍しい元氣だ！」バザロフは窓を離れながら言つた。

　それは白晝だつた、太陽は連つた白い雲の薄いエイルのうしろから燃えるやうに照つてゐた。一切がしんと靜かで、村の彼方此方で苛立たし氣に鳴く鷄の聲の外には何の物音もしなかつた。その鷄の聲は聞く人に、眠いやうな退屈なやうな、奇妙な感じを起させるのだつた。何處か高い樹の上で、若い鷹の絕えず訴へるやうな鳴聲が聞えてゐた。アーカディとバザロフとは乾草の小さな鳩の蔭に寢ころんで、干からびてかさかさする、だがまだ綠を失はない匂のある草を二握り程身體の下に敷いてゐた。

　バザロフは言ひ出した。

「あの白楊は、僕に子供の頃のことを思ひ出させるよ。あれは煉瓦を掘つた粘土の穴の端に生えてるんだがね、當時、僕はその粘土の穴と白楊とが特別の魔力でも持つてるやうに思へてね、あの傍にゐると決して退屈しなかつたもんだよ。尤も子供のことだから退屈しなかつたといふことは當時解らな

かつたがね。ところが、かう大きくなつて見ると、魔力もなくなつてしまつた。」

「君はどの位此處にゐた？」のアーカディが訊いた。

「結局二年だね。それから僕たちは旅をした。彼方の町から此方の町へと、大抵は流浪の生活を續けたんだよ。」

「で、この家は古くから建つてゐたのかい？」

「さうだ。祖父、つまり母の親父が建てたんだよ。」

「どうした人だ？　そのお祖父さんは。」

「何だかね、何でも少佐とかいふことだよ。サヴォロフの部下だつたとかいふので。何時もアルプス越の話をしたといふが、――作り話だらうよ。」

「客間にサヴォロフの肖像が懸つてるね。僕はこんな可愛い小ちんまりした家が好きだ。實に暖かで古風で、常に特別の匂ひがしてゐるよ。」

「ランプの油と馬ごやしの匂ひだらう。」と欠伸をしながらバザロフが言つた。「それにこの可愛い小ちんまりした家に蠅がゐてね……ふん！」

　アーカディは一寸默つてゐたが言ひ出した。

「どうだね、君が子供の時分、皆は嚴しかつたかね？」

「僕の兩親がどんな人間か解るだらう。嚴しいやうな連中ぢやないよ。」

「君は兩親が好きかい、イエフゲニイ？」

「好きだよ、アーカディ。

「何てあの人たちは君を可愛がしてるだらう！」

バザロフは暫く口を噤んでゐた。

「今僕が何を考へとるか君には解つてるかい？」と彼は手を頭のうしろで組みながら漸く言つた。

「いや、どんなことだい？」

「僕の兩親にとつて人生は幸福なものだと考へてゐるんだよ。僕の親父は六十になつて騷ぎ廻り、姑息療法を説いたり、皆を診斷したり結構な旦那振りを發揮して百姓たちと一緒にやつてゐる、──實際樂しく暮してゐるのさ。母も矢張り幸福だ、毎日いろんな仕事の義務を引受けて、自分自身のことを考へる暇さへないと言つて溜息を洩らしたり愚痴を言つたりさ、それに僕は……」

「それに君は？」

「僕は考へるよ、──此處に、僕はこの鳰の蔭に寢てゐる。....僕が占めてゐるこの狹い空間は、僕

がゐない、僕に何等の關係のない他の空間に比して、實に何とも言へない位に微小なのだ。又、僕が運命として生きてゐる時間は、僕が過去未來共に生存しない永刧の時間に比して實に何とも言へない位に微小なのだ。……そしてこの原子の中に、この數學上の一點に、血が廻り、頭が働き何物かを求めてゐる……何といふ退屈なことだらう？　哀れなことぢやないかね？」

「口を入れさせて呉れるならば、君の言つてるのは、一般の人間のことぢやないかね？」

「それや正しい、」とバザロフは言つた。「僕の言ひたいことは、彼等、つまり僕の兩親のことだね、──彼等がうつかりしてゐて、自分たちの無價値なのを考へ煩はないことだ。それは彼等を苦しめない：…然るに僕は……僕は退屈と怒憤との外は何にも感じはない。」

「憤怒？　何故憤怒するの？」

「何故？　どうして何故なんて君は訊くんだらう？　君は忘れたのかい？」

「何でも覺えてる。然し依然として君が怒憤する何等かの權利をも持つてゐることを承認しないね。君は不幸な人間だ、それは認めるが、然し……」

「ふん！　ぢや君はね、アーカデイ・ニコラエウヰッチ。君は現代のあらゆる若い連中と同じく戀愛を認めてるんだね。コ、コ、コと言つて君は雌鷄を呼ぶ、而も雌鷄が近寄つて來れば君は逃げてしま

ふ。僕はさうぢやないよ。然しそんなことはどうでも好い。どうにもなし得ないこと、それを言ふのは恥づべきことさ。」

かう言つてバザロフは横を向いた。

「見給へ。勇敢な蟻が半死の蝿を引き摺つて行くよ、持つて行け、兄弟、持つて行け！　抵抗するのを氣に掛けるなよ。お前は動物だから憫れむことは要らない。それがお前の特權なんだよ。出來るだけやれ、――吾々のやうに自意識のある、自己破壞的な動物の眞似なんかするなよ！」

「そんなことを言ひ給ふな、イエフゲニイ、何時君は自分を破壞したんだい？」

バザロフは顏を擧げて言つた。「それが僕の誇つてゐる唯一事さ。僕は、女が僕を破壞し得ないと同樣、自分で自分を破壞し得ないさ。アーメン！　それでおしまひだ。この事に就いては、これ以上僕から聞き給ふな。」

二人は暫くの間默つて横になつてゐた。

「さうだ、」とバザロフが言ひ出した、「人間は奇妙な動物だな。遠く離れて吾々の父親の死んだやうな生活を見ると、人は何て幸福なんだらうと思ふよ。飮んで食ふ、そして合理的な最も正しい態度をしてゐると思つてゐる、若しさうでないと、退屈に苦しめられてしまふんだ。而も人間は彼等を罵るだ

けのためでも彼等と一緒にしなければならぬ。」

「人間は自分の生活のあらゆる瞬間を意義あらしめるためにさうしなければならない。」とアーカディは考へながら言つた。

「敢て言ふね！　意義のある事は、たとひ間違つてゐようとも氣持のいいものさ。人間は無意義な事にも心を向けることが出來る。然し小さなこと、小さなことは溜らないよ。」

「小さいなんてことは、それを認めない人間には存在しないことぢやないか。」

「ふむ……君の言つてるのは平凡の逆だね。」

「え？　どういふことだ？」

「話さう。例へば敎育は有益だといふのは平凡なんだ。が、敎育は有害だといふと、平凡な事を逆に言つてるのさ。いろんな言ひかたはあるが、實際に於ては皆同じことさね。」

「ぢや眞理は――眞理はどちらにあるんだ？」

「どちらに？　谺のやうに僕もどちらに？　と答へるよ。」

「イエフゲニイ、君は今日憂鬱になつてるね？」

「本當かね？　何しろ太陽が頭をぐにやぐにやにしたに相違ないよ。それに考へて見るとあんなに莓

を食つちや溜らないね。」

「そんな時には、晝寢といふ奴も惡くはないさね。」とアーカディは言つた。

「全くね。唯僕の顏は覗かないで呉れ給へ。誰の顏だつて眠つてる時は間が拔けてるからね。」

「だが、人がどう思はうと、君にとつてはどうだつていいぢやないか。」

「どう言つていいか解らない。眞の人間は氣に掛けない筈だ。眞の人間に對して、他人はどう考へたつて仕樣がなく、要するに唯服從するか又は憎惡するか、それだけのことなんだ。」

「それや可笑しいよ。僕は誰をも憎みはしない。」

アーカディは一寸考へてから言つた。

「ところが僕は實に多くの人間を憎む。君はおとなしい、へなへな男だから、どうして他人を誰だつて憎めるもんか……君は臆病なんだよ。そして自分自身に對する信頼がないんだ。」

「すると君は、」アーカディは遮つた。「君自身を大いに信頼してるのかい？　君自身を高く評價してるのかい？」

バザロフは一寸默つてゐたが、やがて一語一語をゆつくりと、「僕が若し僕の前で自己を守つて毅然としてゐる人間に出會つたなら、その時、僕は自分自身に對する評價を變へるだらう。然り、憎惡だ！

例へば今日執事のフイリップの家の傍を通つた時に、――あいつは實に氣持の好い小綺麗な住居だつたつけな、――君は、ロシアは最も貧しい農民たちがこの程度の家に住むやうになるまで完成しなければならん、そして吾々はさうなるやうに努力しなければならん、と言つた……ところが僕は、その最も貧しい農民に對して憎惡を感じたのだ。そのフイリップ或はシドールとかいふ連中に對してさ。何故といふに、彼等のために僕は身を粉にして働かなければならない、而も彼等は有難うと言はうともしない……又どうして有難うといふ筈があらう？　だつて考へて見給へ、彼奴等が綺麗な家に住むやうになれば、僕は蕁麻だらけになるんだ。……さうさ。さうなることに依つて僕は何を得るのだらう？」

「止め給へ、イエフゲニイ……。今日の君のいふことを默つて聽いてると、主義のないといふことで吾々を攻撃する連中に厭でも同意したくなるよ。」

「君の言草は君の伯父さんだね。普遍的の主義なんてありはしない、――君もそんなものは、まだ作りはしないだらう。其處には感情がある。あらゆる物は感情に係つてゐる。」

「どうして？」

「例へば、僕の感覺に依つて否定的態度を執るとする。僕は否定することが好きだ。――僕の頭腦が

さういふ風に組み上つてる、それだけのことさ。何故僕は化學が好きか、何故君は林檎が好きか、――それは僕の感覺に依つてだ、同じことさ。それ以上の深刻な點には人間は達し難いのだ。誰もこんなことは君に言はうとしないだらう、そして又僕も二度とかうは言はないだらう。」

「何？　すると、正直も感覺の問題かな？」

「寧ろさう考へたいね。」

「イエフゲニイ！」とアーカデイは氣の拔けた聲で言ひ出した……。

「うん？　何だね？　それは君の趣味でないといふのかい？」とバザロフは叫んだ。「いや君、若し一切を破壞しようと決心した以上、自分の足を惜しむ勿れさ。然し吾々は充分に形而上學を悟り終つたよ。『自然は眠りの沈默に呼吸す』とプウシユキンが言つてゐる。」

「そんなことは言ひはしないよ。」アーカデイは異議を唱へた。

「成程、たとひ言はなかつたにしろ、詩人なんてものは言つたかも知れないし、又言ふ筈だよ。ついで乍らプウシユキンは軍人だつたに違ひないね。」

「プウシユキンは決して軍人ぢやなかつたよ。」

「だつて彼の各員に、武裝せよ！　武裝せよ！　ロシアの榮譽のために。」と書いておるよ！」

「おや！　何ていふことを言ひ出すんだ！　それや全くの誹謗だね。」

「誹謗？　それや大事だ！　僕を嚇かすために何といふ言葉を見付けたもんだらう！　君がどんなに僕を攻擊しやうとも、彼はたしかに、實際に於て二十倍も惡いに相違なからうよ。」

「寝た方がよかつたな。」困つたらしくアーカデイは言つた。

「大いに結構だ。」とバザロフは答へた。然し二人共眠れなかつた。殆んど敵意とも言ふべき感情が若者二人を襲つた。そして、五分間もすると二人は眼をぱつちり明いて、默つて顔を見合した。

「見給へ、」と、突然アーカデイは言ひ出した。

「楓の枯葉が枝を離れて地上に散いてゐる。その舞ふ狀は丁度蝶のやうだ。妙ぢやないか？　憂欝と頹廢と、――それが光明と生命とに似てるなんて。」

「ああ君、アーカデイ・ニコライッチ！　これだけはお願ひだ、美文をやつてくれるな。」とバザロフは叫んだ。

「僕は出來るだけよく言ふのだ、……そして、宣言するがね、それは僕の全くの專制主義だよ。或考が腦裏に閃めく。それを僕は何故口にしてはいけないのだ？」

「然うだ。ぢや何故僕も僕の考を口にしてはいけないのだ？　僕は美文的の文句は下劣だと考へる

ね。」

「ぢや何が上品なんだ？　罵言かね？」

「ははは！　君は實際僕に言はせると、伯父さんの跡を追ふつもりでゐるんだね。君の言つてる事を聞いたら、あの有難い間抜けはどんなに相恰を崩して喜ぶだらうな。」

「パヴエル・ペトロウイッチのことをさう言つてるのかい？」

「至極當然だね、あの人を間抜けと呼ぶのは。」

「それや溜らないよ。」アーカデイは叫んだ。

「ああね！　肉親はそんなものさね。」バザロフは冷やかに言つた。「人間がどんなにその肉親の情愛にしつこく囚はれてゐるか、僕は知つてる。凡てを放棄し、凡ての偏見を打破しようと覺悟してる者も、例へば、手巾を盗んだ自分の弟を泥棒であると頷くことは堪へられないのだ。そしてそれを考へる時、自分の兄弟、自分のもの――天才でない……といふ考は呑み込めないよ。」

「僕は單に正義の觀念から言つてるので、少しも肉親の情愛を以て言ふのぢやない。」とアーカデイは熱心に反抗した。「だけれど、君はさうした感覺が解らないし、又さうした純覺を持つてもゐないのだから、これを判斷することは出來ないよ。」

「言葉を換へて言へば、アーカデイ・キルサノフは僕が理解するには偉大過ぎるんだね。僕は彼の前に頭を下げて、これ以上口を利くまいよ。」

「どうか止めてくれ、お願ひだ、イエフゲニイ。おしまひには實際喧嘩になりさうだから。」

「ああ、アーカデイ！　僕はお願ひするよ、一度眞劍に喧嘩をして見やうぢやないか……。」

「然し、ぢや吾々は結局……」

「組打ちか？」とバザロフは遮つた。「うん。此處で、枯草の上で、世間からも人眼からも離れた、この牧歌的な風景の中でやつて構ひはしない。然し君は僕には敵はないよ。僕は瞬く間に咽喉を締めてしまふ。」

バザロフは長い、氣味の悪い指を擴げた。……アーカデイはくるりと廻つて、冗談のやうに反抗の準備をした。……然し彼はバザロフの顏に非常を敵意のあるのを見てぞつとした。――それは、脣を歪めた微笑や、ぎらぎらした瞳やに、彼が本能的に恐ろしさを感じた程だつた。

「おや！　此處に來てゐたのかい！」

その時、ワシリイ・イワノウィッチの聲がして、二人の前には、手製のリンネルの短衣を着た、これも同じく手製の麥藁帽子を冠つた老軍醫が現れた。

「方々を探し廻つたのぢや。……うん、いい處を見付けたものだな。そして旨いことをやつてるよ、『天を仰ぎながら地上に臥す』といふところでな。これには特別の意味があるといふことを皆さん知つておゐでかな？」

「嘘でもしたい時でなきや僕は天を仰ぎませんよ。」と、バザロフは唸るやうに言つて、アーカディを振り返り小聲で附け足した。「邪魔されていやだな。」

「まあ、默つて！」アーカディは囁き返してそつと友の手を握つた。然しかうした激動には、如何なる友情も堪へられなかつた。

ワシリイ・イワノウイッチは、その頭にトルコ人の姿を自分で彫つた、面白く曲つた杖に、組合した兩手を凭せて、首を振りながら、「あなた方を見ると、讃美せざるを得ませんな。實に力がある、青春がある、血潮がある、才能と手腕とがある！　たしかにカストルとボラックスぢやよ。」

「たうとう、神話にお這入りですね。」とバザロフは言つた。「この人が若い頃は大ラテン學者だつたつてことが、君、解るだらう！　たしか記憶してるが、お父さんはラテン文で賞牌を得たことがお有りでしたね、――さうぢやありませんか？」

「ディオスキュリさ。ディオスキュリさ！」ワシリイ・イワノウイッチは二度繰り返して言つた。

「まあ、お止しなさい、威張るのは。」

「一度位は言つたつていいさ。」と老人は呟いた。「だが、こんな事を言ふために方々君たちを探してゐたんぢやない。實は第一に、直ぐに食事になるからと知らせるため、第二に、お前、イエフゲニイに一寸注意して置きたいと思つてな……。お前は敏感な人間で、世間を知り、女といふものがどんなものか解つてゐるから、隨つて承知して呉れるだらうと思ふが、その……お母さんが、お前が歸つて來たので讃美歌を唄はうといふのでな、尤もそれにお前を出席させようと言ふのぢやない。――實は今濟んだんだ。だが、神父アキセイが……」

「村の牧師さんですか？」

「ああさうだ。牧師だよ。その人が……食事を……吾々と一緒に、するんだ。私はそのつもりではなかつたし、賛成もしなかつたのだが……そんなことになつてしまつて……あの人は此方の氣持が解らなかつたのだね……そして、うん……アリナ・ウラシエウナが……それに、あの人は立派な物の解つた人でな。」

「その人は僕の分を食べようといふんぢやありますまい？」とバザロフは訊いた。

「何を言ふんだ！」と、ワシリイ・イワノウイッチは笑つた。

「よろしい。それだけ聞いとけば澤山です。僕は誰とだつて食事はしますよ。」

ワシリイ・イワノウイツチは帽子を眞直に冠り直した。「お前が偏見なんか超越してゐることは、これを話さない先からはつきり解つてゐたよ、この私も、六十二になる老人だが、そんなものは持つてゐない。(ワシリイ・イワノウイツチは彼自分も感謝の祈禱をしたいと望んだことを言はなかつた。彼も妻に劣らぬ信心家だつたのだ)それに神父アレキセイは非常にお前と近附きになりたがつてゐる。お前はあの人が好きになるだらう。あの人は骨牌だつて厭とは言はないし、時には、――尤もこれは吾々仲間だけのことだが……實際煙草も吸ふんだ。」

「結構。食事が濟んだら骨牌をやりませう。僕がやつつけてやります。」

「は、は、は、見物しよう！　正に見ものだね！」

「あなたも仲々御上手だといふぢやありませんか。」

バザロフはこの言葉を特に力を籠めて言つた。

ワシリイ・イワノウイツチの赤銅色の頬には不安さうな閃めきが走つた。

「お恥ぢなさい、イエフゲニイ……過去は過去ぢやよ。成程、私も若い頃にはこの道が好きだつたことを、この方の前で白狀する。そしてそのために充分報ひもしたさ！　だが、何といふ暑さだらう！

私も御一緒に坐らせて貰ひませう。御邪魔ぢやありませんかしら？」

「いいえ、少しも。」アーカディは答へた。

ワシリイ・イワノウイツチは溜息をつきながら枯草の上に坐つた。

「かうしてゐると、軍隊にゐた頃の露營や、野戰病院の生活が思ひ出されますよ。どこかこんな風の塲の蔭でしたがな。それにしても有難いことで。」と彼は言ひ出して溜息をついた。「私は澤山の、澤山の經驗をして來ました。一例として、若しお許し下さるなら、ベスサラビアに於ける疫病の奇妙なお話をしませう。」

「あなたがウラジミール十字勳章を貰つた話ですか？」と、バザロフが口を入れた。「知つてゐますよ、知つてゐますよ……だが何故あの勳章をお附けにならないのです？」

「だつて、私は少しも偏見を持たないとお前に話したぢやないか。」とワシリイ・イワノウイツチは呟いて(彼が上着からその勳章の赤いリボンを外したのは、つい前の夜のことだつた)惡疫の話を語り出した。

「おや、眠りましたな、」と彼はイエフゲニイを指し、人の好ささうに眼くばせして、アーカディに囁いた。「イエフゲニイ！　起きないか。」と彼は聲高に言つた。「食事に行かう。」

神父アレキセイは恰好のいい肥つた男で、濃い髪を綺麗に分け、薄紫の絹の寛衣に刺繍した帶を締め、厭に利口な調子のいい人間らしく見えた。彼はバザロフとアーカディとが彼の祝福を望んでゐないことを豫知してゐるかのやうに、先づ二人に慌しく手を差出した。そして概して構はない振舞をした。彼は彼自身の威嚴を下げることもせず、と言つて皆の感情を害することもしなかつた。彼はラテン語の教師には一寸微笑を向けて、僧正のためには味方をした。小盃に二杯葡萄酒を飲んだが三杯目は辭退した。アーカディから卷煙草を貰つたけれども、家に持つて歸りますと言ひながら强ひて喫はなかつた。唯一つ餘り同意し兼ねることは、彼が顏の蠅を捕へようとして絕えず手を擧げ、時々巧みにそれを叩き潰すことだつた。

彼は骨牌臺に座つて、さうすることに適當な滿足を示しながら、遂に、バザロフから二留半の紙幣を勝つた。アリナ・ウラシエヴナの家では誰も銀貨で勘定することはしなかつた。……彼女は前と同じやうに息子の傍に座つて（彼女は骨牌はしなかつた）相變らず頰を小さな拳に支へたまま、新しい御馳走の皿を持つて來るやうに命じる時に立ち上るきりだつた。彼女はバザロフを抱擁するのを恐れてゐた。バザロフは彼女に力を與へず又抱擁させるやうに誘ひもしなかつた。それにワシリイ・イワノウイッチは、彼女に、餘り彼を煩はさせないやうにと注意した。「若い者はそんなことを餘り好かないから」と言ふのだつた。（その日の食事がどんな風のものだつたか述べる必要はない。テイモフエイッチは一人で朝早く牛肉を買ひに馳け廻つた。執事は鰈やグレミンやクレイフイッシユなどを買ひに他の方面に行き、唯菌だけが銅化四十三枚だけ百姓女の手から買はれたのだつた。）アリナ・ウラシエヴナの瞳はぢつとバザロフに注がれてゐて、愛と優しさとばかりでなく、その表情には、恐れと珍しさとの交つた悲しみの色さへがあつた。其處には謙遜な自己を咎めるやうな色も見えてゐた。

然しバザロフは母親の瞳の鮮やかな表情を解剖しようといふ氣分はなく、時たまに彼女の方を振り返つて簡單な質問をする位のものだつた。一度彼は彼女の手相を占つて上げると言つた。彼女はその柔い小さな手を、息子の粗野な廣い掌に載せた。

「うん、何かいいことがあるかい？」と彼女は一寸待つてから訊いた。

「以前よりも惡くなりましたね。」彼は無遠慮に笑ひながら答へた。

「少しきびし過ぎますな。」

神父アレキセイは同情するやうに言つて、髯をしごいた。

「ナポレオン式ですよ、ナポレオン式ですよ。」とワシリイ・イワノウイッチはポイントの札を出しながら口を入れた。

「けれどもセントヘレナへ送られましたな。」と伯父アレキセイがボイントを切りながら言つた。

「カランツ茶は欲しくないかい、イエフゲニイ?」アリナ・ウラシエヴナは訊いた。

バザロフは肩を揺すぶるきりだつた。

翌日バザロフはアーカデイに言つた。

「いや! 僕は明日此處を去つちまはうと思ふんだ。うるさいよ。仕事がしたいんだが、此處ぢや出來ない。又君の處へ行かう。機械なんか皆置いて來たんだからね。君の家だと、兎に角一人きりで閉ぢ籠つてをられるが、此處では、親父が始終『俺の書齋はお前の勝手に使ふがいい――誰もお前に干渉しやしない』と言ひながら、その癖自分が一歩も傍を離れないんだからな。それに、僕一人で閉ぢ籠るのは、一寸氣がひける。母親だつて同じことさ。壁の向うで溜息ばかり、傍に行つたつて話すことがありやしない。」

「お母さんは酷く悲しむだらうよ。お父さんだつてさうだ。」アーカデイは注意した。

「又歸つて來るよ。」

「何時?」

「ペテルスブルグに行く時にさ。」

「特に僕はお母さんをお氣の毒に思ふよ。」

「何故さ? 母のやつ苺で君を買收してしまつたな、それとも何か理由があるのかい?」

アーカデイは眼を伏せた。「君はお母さんの心が解らないんだよ、イエフゲニイ。彼女は非常に善良な婦人であるのみならず、實際聰明な人だ。僕は今朝半時間ばかり話したが實に敏感で、興味も深かつたよ。」

「僕のことばかりだらう?」

「君のことばかり話しもしないがね。」

「さうかも知れない。第三者の眼が最もたしかだ。一體女が半時間も話をつづけることが出來れば、それは常に吉兆なんだ。然し、兎に角僕は行かう。」

「あの人たちに言ひ出すのは一寸容易ぢやないぜ。二週間をどうもてなさうかといふ計畫ばかり始終立ててゐる。」

「さうだ、容易ぢやないかも知れない。實は今日變な氣持になつて親父を苛めたんだ。この間親父が小作人の一人を毆つたことがある、それも尤もなんだ、――さうだ、君がそんなに喫驚したやうに僕を見る必要はないよ。毆るのが正しかつたのだ。何故つて、その男は恐ろしい泥棒で而も醉ひどれな

んだからね。ただ、親父はその事を僕が知つてると思つてゐなかつたのさ。それでひどくまごついてゐたが、今度はそれ以上に喫驚するだらうな……。構はない、何とかするだらうよ！」

バザロフは「構はない」と言つたけれども、それをワシリイ・イワノウイツチに話さうと決心するまでには全一日かかつた。然したうとう、書齋でおやすみを言ふ時に、欠伸まぢりに話し出した。

「あ……すつかり言ふのを忘れてゐましたが……明日フエドットの處へ、馬を連れに使をやつて下さい。」

ワシリイ・イワノウィッチは呆氣にとられた。

「ぢや何かね、キルサノフさんがお立ちになるのかい？」

「さうです。僕も一緒に行くんです。」

ワシリイ・イワノウイッチは全くよろめいた。

「お前も行くんだつて？」

「ええ、……行かなきやなりません。馬の用意をなすつて下さい、どうか。」

「よし……」老人は吃りながら、「フエドットの處だな……よし……ただ……ただ……一體どうしたんだ？」

「僕は少しの間、あの男と一緒にゐなきやならんのです。後程又參りますよ。」

「ああ！ 少しの間だね……よし。」

ワシリイ・イワノヴィッチは手巾を取り出して鼻を拭きながら、他に屆く位に身體を屈めた。

「よし……一切して置くがね。私は……も少し一緒にゐて呉れると思つてゐた。三日……三年も待つて三日間、餘り少なすぎるぢやないか、イエフゲニイ！」

「だが、直ぐに歸つて來ると申し上げてるぢやありませんか。僕は行かなきやならないんですから。」

「行かなきやならない……うむ！ 義務は何より第一だからな。ぢや馬を用意させよう。よろしい、無論アリナも私もこんなことにならうとは思はなかつた。彼女は今近所から花を貰つて來たばかりのところだ、お前がたの部屋を飾らうと思つてな。（ワシリイ・イワノウイッチは、毎朝まだ夜の明けない頃に、素足にスリッパを引つかけて、顫へる手先で犬の頭の附いた留紙幣を一枚引出しながら、テイモフェイッチと相談して、若い者のひどく好きさうな食物だの赤葡萄酒だのを買ひにやらせるといふことを決しておくびにも出さなかつた）自由が……一番のことだ。それが私の主義だ。私はお前がたの邪魔をしたくはない……ない。」

彼は急に口を噤んで戸口の方へ歩き出した。

「直きに又會へますよ、お父さん、本當に。」

然しワシリイ・イワノウイツチは振り返りもせずに、ただ手を振つて出て行つた。彼は寢室に這入つた時、妻が床にゐたので、それを起きないやうに小聲で祈禱を始めた。けれども彼女は眼を覺ました。

「あなたですか、ワシリイ・イワノウイッチ？」

「うん、私だよ。」

「エニユーシヤの處に入らしたんですか。ねえ、私はあの子の長椅子が寢心地よくなくはないかと心配なんですよ。アンフイスシユカに、あなたの旅行用の蒲團と新しい枕とをあの子に持つて行つてやるやうにと言ひつけました。私たちの羽根蒲團をやればいいんですけれど、あの子は柔か過ぎる物を嫌ひのやうに覺えてゐますので……」

「いいよ、お前、心配しないがいい。あれは大丈夫だ。神樣、罪なる私をお惠み下さい。」と彼は小聲で祈禱をつづけた。ワシリイ・イワノウイツチは、この年老ひた妻が氣の毒になつた。夜通しどんな悲しみが彼女を待ち受けてゐるか、それを話す氣にはなれなかつた。

バザロフと、アーカデイとは、翌日出發した。早朝から家中の者は沈み切つてゐた。アンフイスシユカは盆を手から落したし、フエドカでさへうろうろして長靴を脱いだりした。ワシリイ・イワノウ

イツチは何時もより燥いで、明らかに元氣さうに見せやうと努めながら、大聲で話したり足を踏ん張つたりしたが、顏はやつれて眼は絶えず息子を避けてゐた。アリナ・ウラシエヴナは靜かに泣いてゐた。彼女の氣持は全く打ち碎かれて、若し夫が朝からたつぷり二時間もかかつて說き諭さなかつたなら、殆んど自分を制馭することは出來ない位だつた。バザロフは一月の內に屹度歸つて來るといふ約束を繰り返してから、引き留められる抱擁から漸く逃れて馬車に腰を卸した。馬が駈け出し、鈴が鳴り、車輪が廻轉を續けて、もう見送つても詰らなくなり、塵埃もをさまつてしまふ、そしてテイモフエイツチは腰を屈めてよちよちと自分の小さな部屋に引き返した。かうして老人夫婦のみが急に沈み切つた老ひ朽ちた小さな家に取り殘された時、ワシリイ・イワノウイツチは階段に立つて暫くの間一心に手巾を振つてゐたけれど、やがて椅子に身體を沈め頭をうなだれて呟いた。

「彼は私達を打つちやつた、見棄てた、見棄てたんだ。私達とゐては退屈になつたんだ。獨りだ、獨りぼつちだ！」と彼は幾度も繰り返して呟いた。

アリナ・ウラシエヴナは彼の傍に來て、彼の白髮に自分の白髮を凭せながら、「仕方がありません！ワーシア。息子といふものは分離したものです。彼は鷹の子のやうに、家に歸ると又自分勝手に飛び出しました。それにあなたと私とは、木の洞に生えた菌のやうに、並んで坐つたまま、自分たちの巢

から動かないのです。ただ永久に私はあなたを離れません、あなたが私をお離れにならないやうに。」

ワシリイ・イワノウイッチは自分の顏から手を離して、嘗て若い時代にも經驗しなかつた暖い氣持で、この妻、この友の手を執つた。彼女は彼の悲しみを慰めたのだつた。

二十二

二人の友はフエドットの處に行くまで、極く稀に二三の何でもない言葉を交したきりで、默り切つてゐた。バザロフは自分自身が不快になり、アーカデイはバザロフが厭になつてゐた。彼はまた、その靑年たちのみの知る理由なき憂鬱を感じてゐた。馭者は馬を變へて馭者臺に乘り、「右へですか、左へですか？」と訊いた。

アーカデイははつとした。右への道は町へ通じ、更に其處から彼の家へ通じてをり、左への道はオデインツオーフ夫人の處へ通じてゐた。

彼はバザロフを見た。

「イエフゲニイ、左へ行かうか？」と彼は訊いた。

バザロフは顏をそむけた。「何て馬鹿々々しい？」彼は呟いた。

「馬鹿々々しいことは知つてるよ。」とアーカデイは答へた。「……だが、何でもないぢやないか。馬鹿々々しいのは初めてぢやないからな。」

バザロフは帽子を眉まで引き卸して、

「思ふやうにし給へ。」と漸く言つた。

「左へ。」アーカデイは叫んだ。

馬車はニコルスコエの方へ軌つて行つた。二人の友は前にも增して執拗に默りこくつてゐた。そして實際不機嫌であるらしく見えた。

執事がオデインツオーフ夫人邸宅の石段で彼等を迎へた時、二人は直ちに、自分たちが餘りに不意に氣分の衝動に身を委したことの、無分別に氣づかないではゐられなかつた。二人は明らかに豫期されてはゐなかつたのだつた。彼等は應接間に稍長い間、それも間の拔けた風で坐つてゐた。遂にオデインツオーフ夫人が出て來て、例に依つての丁寧な挨拶をしたが、彼等のそんなにも慌しく引き返して來たのに驚いてゐた。そして彼女の身振りや言葉の思慮深いところから察し得る限りでは、彼女はこの訪問を喜んでゐなかつた。二人は急いで、つい途中で寄つたのだといふこと、更に町の方まで四時間内に行かなければならないのだといふことを話した。彼女は輕い驚きを示したきりで、アーカデ

イに、父に宜しく傳へて呉れるやうにと賴んでから、伯母を呼びにやつた。公爵夫人は非常に眠さうな風で現れたが、それが、彼女の皺くちやのしなびた顔に、更に意地惡い表情をさへ與へた。カテイアは工合が惡くて自分の部屋から出て來なかつた。アーカディは不意に、彼が少くともアンナ・セルギエウナに會ひたいと同時にカテイアとも會ひたくて溜らなかつたのだといふことを、咄嗟に感じた。あれこれと無意味な話のうちに四時間は經つた。アンナ・セルギエウナは微笑もせずに聽いたり話したりしてゐて、以前のやうな親しみが、言はば復活したらしく思へたのはほんの別れる間際になつてからだつた。

「丁度今氣分が惡いもんですから、」と彼女は言つた。「けれども氣にしないで下さいましね。そして又入らして下さい。――お二人ともに、お近いうちにね。」

バザロフとアーカディとは默つてお辭儀をして馬車に乘つた。そしてもう何處にも寄らず、眞直に翌日の夕方、無事にマリーノの家へ着いた。この旅行中、二人はオディンツォーフ夫人の名前を口にすることさへしなかつた。殊に、バザロフと來たら、殆んど口も利かず、大袈裟な緊張振りを示しながら、往還の外方ばかり眺めてゐた。

マリーノでは二人を迎へて皆が非常に喜んだ。息子の留守が長引いて、ニコライ・ペトロウイッチ

は不安になり掛けてゐたところだつた。フェニチカが眼を輝かしながら驅けて來て、「若い旦那方」が歸つたと知らせた時、彼は喜びの聲を擧げて長椅子の上で跳ね上り、足をばたばたさせた。パヴェル・ペトロウイッチさへ或程度の快い興奮を感じて、この歸つて來た放浪者たちと、お世辭笑ひをしながら握手を交した。談話、質問が續いた。アーカディが一番よく喋つた。殊に晩餐の時さうだつた。で、その晩餐は夜半まで長引いた。ニコライ・ペトロウイッチはモスクワから取り寄せたばかりのポッタア酒を幾壜か命じて、頰が眞赤になるまで、この幸福の相手をした。さうして半ば子供じみた、半ば神經的な、忍び笑ひを常に湛へてゐた。召使たちさへ、家中の饗宴に支配されて、ダニヤシヤは憑かれたやうに驅け廻り絕えず戶をばたばた音立ててゐたし、ピヨートルは、夜半の三時といふに、まだギタアでコサック舞踏曲を彈かうとしてゐた。絃は甘い悲しい響を、靜かな夜氣に漂はしたが、ほんの小曲しか、この敎養ある召使の努力からは生れて來なかつた。自然は他の凡ての才能以上に音樂の才能を、彼に與へることをしなかつた。

然しマリーノでは事が旨く運んでゐるのではなくて、哀れなニコライ・ペトロウイッチは弱つてゐるのだつた。農場の厄介事は――無意味な始末に了へない厄介事は毎日湧き上つた。日傭人との紛騷も、どうにもならなくなつてゐた。或者はその賃金を極めることを、或者は賃金を增すことを求めて

ゐた。又或者は、その前借をしてから逃亡した。馬は病氣になるし、馬具は燒けでもしたやうに滅茶になるし、仕事はいい加減にされるし、モスクワから買つた麥打機は重過ぎて役に立たないことが解るし、今一つのそれは使ふか使はないかに壞れてしまふし、家畜小舍の半は盲目の老婆が風の強い日に牝牛を燻さうとして木の燃えさしを持つて畑へ出たために燒け落ちるし。……而も實際この老婆はこんな災害は凡て主人が新工風の乾酪や牛酪を拵へる計畫をするから生じたのだと言つた。監視人は急に怠け者になつて、一般にロシア人が好位置を占めると肥るやうに、彼も肥り出した。彼はニコライ・ペトロウイッチの姿を遠方に見ると、自分の熱心を示すために、わざわざ通りかかりの豚を棒で擲つたり、半裸體の小僧を嚇したりしたが、それ以外の時は大抵眠つてゐた。貸付にしてある百姓たちは極めた期限に金を持つて來ないばかりか、森の樹を盜んだ。毎夜のやうに、農場の牧場で、番人は百姓の馬を捕へたり、時には無理にも追ひ拂つたりした。ニコライ・ペトロウのツチは損害賠償金を定めたが、何時も馬は持主のところへ歸るまでの一日か二日間を、彼の秣を食ひ倒すといふやうな結果になつた。

その上尚惡いことに、百姓たちは、めいめいに喧嘩をし、兄弟は財産の割前を求め、女房は一つ家に納つてゐなかつた。合圖を與へられたかのやうに、突然騷動が持ち上り、村中の者が事務所の階段

に驅けつけて、屢々醉つて打擲されたのを見せながら主人に吩驚つたり、正當な裁判をして吳れと要求したりするのだつた。と、喚き聲、呻き聲や、鋭い女達の訴へる聲が男の罵聲の中に交つて聞えた。結局正當な裁きをし得る筈もないことを知りながら、双方の主張を調べてから、嗄れ聲で叫ばなければならないのだ……。秋の收穫期になると手が足りないので、近所の小地主たちは一エークル二留位の賃料で苅手の世話をしようといふ結構な約束をする。さうして彼を最も恥づべき方法で欺くのだつた。百姓達は思ひ切つた賃金を要求するし、その間に小麥は惡くなるし、草苅りは順調に行かないし、一方官廳からは、規定の利子を全部至急納付すべしと嚇かして寄越したりした……。

「私はどうにも出來ない！」ニコライ・ペトロウイッチは絶望して一度ならず叫んだ。「私は彼奴等を打つことは出來ないし、警察の手を借りることは私の主義と相容れない。而も罰で嚇かさなきや彼等をどうすることも出來やしない！」

「落ち着いて、落ち着いて。」

パヴェル・ペトロウイッチはこれに對してかう言つた。然し彼もふむと言つて、額に皺を寄せ、髯をひねるだけだつた。

バザロフはかうした事柄には無頓着だつた。そして又實際客として他人の仕事に干渉するのは柄で

なかつた。マリーノへ着いた翌日から彼は、例の蛙や浸液虫類や、化學實驗やらに從事して絶えず忙しかつた。これと反對にアーカデイは、父を手助けしないまでも、少くとも彼を助ける用意を示すことを自分の義務であると考へた。即ち彼は根氣よく父の話を聽き、全然採用して貰ひたいといふ考なしに　唯自分の熱心を見せるために、幾度かの助言を與へたりした。農業上のごたごたしたことは、彼に何等嫌惡の感情を起させないで、寧ろ彼は田舍の勞働を快感を以て夢想さへしてゐたが、今は、腦裏全體が、それ以外の考を以て充たされてしまつてゐた。つまり、アーカデイは自分でも驚いてゐたが、絶えずニコルスコエのことばかり考へてゐるのだつた。昔ならば、若し誰かがバザロフと同じ家にゐて――而もこの場合は彼の父親の家だつたが――退屈を感じるとでも言はうものなら、彼は誰彼を脅やかして輕蔑したことであらう。然し彼は實際退屈になつて逃げ出したくなるのだつた。彼は疲れ切るまで戸外を歩き廻らうとしたが、それも何にもならなかつた。或日の事、彼は父親と話してゐる間に、オデインツォーフ夫人の母が父の妻に送つたといふ稍々興味ある手紙を彼が持つてゐることを發見した。そしてアーカデイは父がその手紙を出して呉れるまで、少しの休息をも與へなかつた。而もそれを探し出すのに、ニコライ・ペトロウィッチは二十箇の抽出しや箱を掻き廻さなければならなかつた。この半ば破れた手紙を手に入れてから、アーカデイは、言はば、今や進むべき目的地を暫

見したかのやうに、救はれたやうに感じるのだつた。

「お二人でね。」と彼は絶えず獨り言を言つてゐた。――これは彼女が言ひ添へた言葉だつた。

「行かう、行かう。どうとでもなれ！」

然し、最後の訪問、冷淡な待遇、以前の困惑を彼は思ひ浮べて、全く臆病に囚はれてしまつた。が、青年の「突き進む」感情、如何なる人の保護をも受けないで自らの運を試し、秘かに自らの力を證しようとする秘密の願望が、遂に勝利を得た。マリーノに歸つてから十日も經たない内、彼は日曜學校の仕事を研究するといふ口實に依つて、再び馬車を町に走らせ、其處から更にニコルスコエに行つた。

彼は絶間なく馭者を急き立てながら、戰場へ乘り出す若い士官のやうに飛んで行つた。彼は脅されるやうに、又氣輕のやうに感じた。そして溜らなくなつて呼吸切れがしてゐた。

「大切なことは――考へてはいけないといふことだ。」と彼は自分自身に繰り返してゐた。馭者といふ男は生憎と元氣のいい若者で、居酒屋の前を通る度毎に馬を止めた。――「一杯おやりですか？　いかがですか？」と言ひながら。けれどもその埋め合せをするために酒を呑んでしまふと、決して馬を惜しまなかつた。

漸く馴染の家の高い屋根が見えて來た。……「どうしたらいいか？」といふ考がアーカデイの頭に

閃いた。「うん、今は引き返すのも無駄だ！」

三頭の馬は一齊に駈け出した。馭者は馬に合圖をしたり口笛を吹いたりした。そしてもう蹄と車輪の響とで橋は鳴り、やがて刈り込まれた松の並木は彼等を迎ひに走つて來るやうに見えた。……濃い綠の中に女の淡紅色の着物がちらと見えて、若々しい顔が日傘の輕やかな縁の下から覗いた。……彼はカテイアを認めたのだつた。彼女もアーカデイを認めた。アーカデイは駈けつつある馬を止めさせ馬車から躍り出して彼女の傍に寄つた。

「まあ、あなたでしたの！」と彼女は叫んで次第に顔を眞赤に染めた。「姉の處へ參りませうよ。庭にをりますから。お目にかかると喜びますわ。」

カテイアはアーカデイを庭へ案内した。彼女との會合は彼には特に吉凶のやうに思はれた。彼は恰も彼女が肉親の者であるかのやうに會つたのが嬉しかつた。たまたま萬事が思ひきり好都合に運んで誰もゐず鹿爪らしい取次もゐなかつた。

小路の曲り角で彼はアンナ・セルギエヴナを見つけた。彼女は丁度背を向けて立つてゐたが、足音を耳にして、そつと振り返つた。

アーカデイは又狼狽するやうに感じた。けれども彼女の發した最初の言葉が直ちに彼の心を落ちつ

けて呉れた。

「よく歸つてらつしやいましたわね、」と彼女は、なだらかな、愛撫するやうな聲を掛けて微笑しながら、眼に日光と風との當るのを顔を顰めて避けながら、出迎へに近寄つて來た。

「何處でこの方を拾つて來たの、カテイア？」

「僕はあなたに持つて來たものがあるんですよ、アンナ・セルギエヴナ、」アーカデイは言ひ出した。「それはたしかにあなたの思ひも染めないものなんです。」

「あなたが、御自身の身體を持つてゐらしつたこと、それが何よりも結構ですわ。」

二十三

皮肉な同情を持つてアーカデイを見送りながら、彼の旅行の本當の目的に就いては少しも誤魔化されてはゐないといふことを彼に知らせてから、バザロフは全く孤獨の裡に閉ぢ籠つた。研究熱に囚はれたのだつた。今度はパヴエル・ペトロウイツチと口論もしなかつた。殊に後者は彼の眼前で極端に貴族的態度を取つて、自己の意見を言葉といふよりも不明瞭な呟きを以て發表するのだから、尚更さうであつた。唯或時、パヴエル・ペトロウイツチはバルチック州の貴族の權利に對して當時多く論議

せられてゐた問題に就いて、この虚無主義者と喧嘩をした。然し突然自ら進んで口を噤み、冷やかな丁寧さを以て言つた。「けれども、吾々はお互ひに理解し合ふことが出來ないんですね、少くとも私はあなたを理解する榮譽を持ち合してゐない。」

「僕はさう考へたくない！」とバザロフは叫んだ。「人間は如何なる物をも理解し得る能力を持つてゐます。——如何にエーテルが波動するか、太陽の中に何が起りつつあるかといふことも。——然し何人が自分と異つた風に鼻をかむことが出来るかといふことは、理解し得ないことです。」

「え、それは警句ですかね？」

パヴエル・ペトロウイッチは探るやうにかう言ひながら、歩き去つた。

然しながら彼は時々許可を求めてバザロフの實驗に立ち會つた。そして一度は頗る上等の石鹸で洗つた、いい匂ひのする顔を顯微鏡に近づけて、透明な浸液蟲が綠色の微分子を呑んで忙しく咽喉にある二本の極めて敏捷な纖毛でそれを嚙んでゐる狀を見たこともあつた。

ニコライ・ペトロウイッチは兄よりも屢々バザロフに質問した。若し農場の紛擾に注意を奪はれてゐなかつたならば、彼は、彼の所謂「研究」に毎日やつて來ただらう。彼は常にこの青年の科學的探求を妨害しないで、何處か部屋の隅に坐り、仔細に眺めて、時々思慮に富んだ質問をするのだつた。

晝食や夜食の時に、彼は會話を物理學や地質學や北學の問題に轉じようと試みた。と言ふのは、それ以外の話題は、たとひ政治のことでなくとも、農業のことでさへ、衝突を引き起さないでも相互に不快の感情を釀すだらうと思つたからだつた。

ニコライ・ペトロウイッチは兄が少からずバザロフを嫌つてゐることを推察してゐた。多くの事の中で或詰らない出來事が殊にこの推察を確めた。——コレラが附近の或處で流行し出して、マリーノでも二人の者が斃された。その夜たまたまパヴエル・ペトロウイッチが稍々烈しい徴候を現して、朝まで苦しんだけれど、彼はバザロフの手腕に頼らなかつた。そして次の日バザロフに會つた時、「何故僕をお呼びにならなかつたのです？」といふバザロフの質問に對して、彼は、まだ顔は眞青だつたが、丁寧に髪を梳り髯を剃つてゐてから答へた。「だつて、あなた御自身が醫學を信じないとおつしやつたやうに覺えてゐますのでね。」

かうして日々が過ぎて行つた。バザロフは辛抱強く懸命に研究を續けた……。そして一方、このニコライ・ペトロフウッチの家には、彼が内心を打ち明けないまでも、少くとも喜んで話したいと思ふ者が一人あつた。……これはフェニチカであつた。

彼は大抵朝早く庭か畑かで彼女に會ふのが例だつた。彼は彼女の部屋に會ひに行くことはしなかつ

た。そして彼女も唯一度彼の部屋の戸口まで――ミチャをお湯に入れていいかどうかと訊きに行つたきりだつた。彼女は彼を信頼してゐるばかりでなく、恐れてゐないばかりでなく、――實際のところバザロフと一緒にゐると、ニコライ・ペトロウイチ自身と一緒にゐるよりも、もつと自由にもつと氣輕に振舞ふのだつた。それはどうしてだか說明しにくいが、恐らく彼女は、バザロフの裡に上品ぶるところや、惹きつけると同時に威壓する例の優越性やがないのを、無意識的に感じてゐたのだらう。彼女の瞳に映じた彼は立派な醫者であり又單純な人間であつた。彼女は彼の面前でも構はないで赤ん坊の世話をした。又或時彼女は不意に眩暈と頭痛とに襲はれた時に、彼の手から一匙の藥を飲ませて貰つた。ニコライ・ペトロウイッチの前では彼女は、言はばバザロフから或距離を保つてゐた。彼女がかう振舞ふのは僞善からではなく、或種の禮義からだつた。パヴエル・ペトロウイッチを彼女は以前よりも恐れたが、それは彼が近頃になつて彼女を監視し始めて、不意に、彼女の背後の地面から飛び出しでもしたやうに、英國風の服裝で、ぢつと見据ゑた物を見拔くやうな風をし、手をポケットに突つ込んで、姿を現すやうなことがあるからだつた。

「人にバケツの冷水を浴せるやうだわ。」とフエニチカはダニャシアに零した。ダニャシアは答の代りに溜息をして、もう一人の「心なき」人のことを考へた。つまりバザロフは自分では少しも心づかず

に、彼女の心の殘酷な暴君となつて來たのだつた。

フエニチカはバザロフを好いた。然し彼の方でも彼女を好いた。彼が彼女と話してゐる時、彼の心は明らかに變つてゐた。はればれとした、殆んど思ひやりの表情を浮べて、日頃の無頓着は、冗談のやうな注意と代つた。フエニチカは毎日だんだん美しくなつてゐた。若い女性の生活には、恰も夏の薔薇のやうに、不意に蕾が破れて花が咲き始めるといふ時期のあるものである。――さうした時期がフエニチカに來た。しなやかな白服を着て、自分でも、身體がほつそりと白くなつたやうに思はれた。彼女は太陽には燒けなかつたけれど、その暑さには負けて、頰と眼のあたりがぽつと赤らみ、全身が柔かな懶さに包まれ、美しい瞳には夢見るやうな疲れが映り、働く元氣も殆んどなくて、兩手は自然に膝に落ちさうであつた。彼女は歩くのもやつとのことで、絕えず、をかしな力なさを以て歎息したり零したりしてゐた。

「餘計に水を浴なきやいけないよ。」とニコライ・ペトロウイッチは言つた。彼はまだ全くは無くならないでゐる池の一つに、日除けで覆ひをした、大きな浴場を作つた。

「おお、ニコライ・ペトロウイッチ！　でも池まで行くのに、まるで死ぬる思ひですわ。それに歸りが又死ぬる思ひですもの。御覧の通り庭には蔭がないんですから。」

「本當に、蔭がないね。」ニコライ・ペトロウイッチは額を拭きながら答へた。

或日、朝の七時に、散歩から歸つて來てバザロフは、ライラックの阿亭でフエニチカに會つた。この阿亭は以前に花が咲いてゐたが、今も濃く青々と茂つてゐた。彼女は何時ものやうに白い手巾を頭にかけてゐた。傍にはまだ露に濕れてゐる紅白の薔薇が積んであつた。彼はお早うと會釋した。

「おや、イエフゲニイ・ワシリイッチ！」と彼女は言ひながら手巾の端を少し上げて、一寸彼を見た。さうすると彼女の腕は肘のあたりまで露はになつた。

「此處で何をしてゐらつしやいます？」バザロフは傍に腰を卸しながら、「花束を作つてるんですか？」

「ええ、晝の食卓を飾らうと思ひまして。ニコライ・ペトロウイッチがこれを好きますの。」

「だがお晝までには大分時間がありますよ。何て澤山の花だらう！」

「今集めましたの。やがて熱くなつて外に出られなくなりますから。今なら呼吸もつけますわ。私は全く暑さ負けするんです。本當に病氣になるんぢやないかと心配になりますわ。」

「何を考へるんです！　脈を拜見！」

バザロフは彼女の手を取つて、脈に觸れたが、その數を數へようともしなかつた。「あなたは百年もお生きでせうよ！」と彼は手を離して言つた。

「まあ、厭ですわ！」彼女は叫んだ。

「何故？　長く生きたくはないんですか？」

「いいえ、でも百年では！　この近處に八十五にたるお婆さんがありましてね、――それは何てみじめでしたらう！　汚くて聾で腰は曲り始終咳ばかりしてゐました。重荷の外に何一つないんですもの。それや恐ろしい生活ですわ！」

「それで若い方がいいんですね？」

「ええ、さうぢやございませんかしら？」

「然し何故いいんですか。聞かせて下さい。」

「どうして何故とお訊きになれるんでせう？　だつて、此處に今私はゐて、若い間は、何でもすることが出來ます。――行つたり來たり運んだり、そして何をするにも他人に賴まなくてもいいのです。……これ位いいことがあるでせうか？」

「僕にとつては、僕が若くても年寄りでも同じことですよ。」

「どうして――同じことですつて？　そんな害はありませんわ。」

「よろしい、あなたが考へて見て下さい、フエドウシヤ・ニコラエヴナ、僕の若いことが僕に何かい

いことですか。僕は獨りで、哀れな、寂しい人間で……」

「それは何時でもあなた次第ですわ。」

「少しも僕次第のことぢやありません！　少くとも誰かが僕にあはれみをかけて呉れなきや。」

　フェニチカは横眼でバザロフを見たが、何にも言はなかつた。

「その御本は何ですか？」一寸默つてゐてから彼女は訊いた。

「これですか？　科學の、非常にむつかしい本ですよ。」

「ではまだ學問をしてゐらつしやいますの？　退屈ぢやございませんか？　あなたはもう何でも知つてらつしやると申し上げてもいいのに。」

「何でもとは思へません。少し讀んで御覽なさい。」

「此處は何も解りませんわ。ロシア語ですか？」フェニチカは兩手に重い本を持つて言つた。

「何て厚いんでせう！」

「ええ、ロシア語です。」

「同じことですわ、私には何にも解りません。」

「結構です。僕は解つて貰ふつもりで差出したのぢやありません。讀んでゐらつしやる時のあなたを

眺めたかつたのです。あなたが讀んでゐらつしやると、その小さな鼻の先が綺麗に動きますね。」

　たまたま繰つた「クレオソオト」の項を小聲でどうかかうか辿り掛けてゐたフェニチカは、笑つて本を投げ出した。……それは腰掛から地上に落ちた。

「お笑ひになる時も好きです。」バザロフは言つた。

「御冗談を！」

「お話しになる時も好きです。小川のせせらぎのやうですよ。」

　フェニチカ顏をそむけた。

「何てことをおつしやるんでせう！」と彼女は彼を指先で引つ張りながら言つた。「どうしてあなたが私の言ふことなどに耳を傾けて下さるでせう！　賢い貴婦人がたと話してゐらしたんですもの。」

「おや、フエドウシヤ・ニコラエヴナ！　本當ですよ、世界中の賢い貴婦人を皆集めても、あなたの小さな片肱位の値打ちもありません。」

「まあ、又あんな噓を！」フェニチカは兩手を組み合した。

　バザロフは本を拾ひ上げて、「これは藥の本です。何故お投げになつたんです？」

「お藥の？」とフェニチカは呟いて又彼の方を向いた。「何時でしたか、水藥をいただいてから、――

覺えてゐらつしやいますか？ ミチャは大變よく眠りました。どんなにお禮を申し上げていいか解りませんわ、本當に。あなたはいい方でゐらつしやいますわね。」

「だが醫者には支拂をなさらなきや、」とバザロフは笑ひながら、「御承知の通り、醫者といふものは握り屋ですからね。」

フエニチカは、その顏の上半面の白い反射のために、まだ暗く見える眼を上げてバザロフを見た。彼が冗談を言つてるのか、どうか彼女には解らなかつた。

「さうでございましたから、私は嬉しうございますわ……。ニコライ・ペトロウイツチに申しまして……」

「おや、僕が金を欲しがつてると思つてらつしやるんですか？」とバザロフは言つた。「いや、僕はあなたからお金を貰はうとは思つちやゐませんよ。」

「ぢや何ですの？」フエニチカは訊いた。

「何ですか、當ててお覽なさい。」

「私のやうな者に當てられるでせうか。」

「ぢやお話しませう。僕が欲しいのは……その薔薇の中の一枝ですよ。」

フエニチカは又笑つた。そしてバザロフの要求が非常に面白くて手を拍つたりしだ。彼女は笑ふと同時に媚びを感じた。バザロフは鋭く彼女を瞶めてゐた。

「どちらをお取りになります、赤ですか白ですか？」

彼女は遂に言つた。腰掛に屈んで薔薇を拾ひながら。

「赤いので、餘り大きくないのを。」

彼女は又立ち上つた。

「さあ、お取り下さい。」と言つたが、彼女は延ばした手を引つ込めて、唇を嚙み、阿亭の入口の方を見て、耳を澄ました。

「どうしたんです？」バザロフは訊いた。

「ニコライ・ペトロウイツチですか？」

「いいえ……キルサノフさんは畑に行つてゐますし……それに、私あの人は恐くはありません……けれど、パヴエル・ペトロライツチが……と思ひましたの。」

「え？」

「あの人が此處に來たんだと思ひましたの。いいえ、誰もゐやしなかつたんですけれど。これをお取

り下さい。」

フェニチカはバザロフに薔薇を與へた。

「何か理由があつてパヴエル・ペトロウイッチを恐れるんですか？」

「あの方は何時も私を脅かすんです。あなたもお好きになりませんわね。始終議論なすつてるぢやありませんか。私には何のことで議論なすつてるのか解りませんけれど、あなたが、こんな風に、あんな風にあの男を懲らしてゐらつしやるのが解りますわ。」

フェニチカは手振りを以て、彼女の言ふバザロフがパヴエル・ペトロウイッチを懲らしてゐる狀をして見せた。

バザロフは微笑した。

「然し若しあの男が僕を打擲したら、」と彼は訊いた。「あなたは僕の味方をして吳れますか？」

「どうして私にあなたの味方が出來ませう？　けれども、いいえ、誰もあなたに勝てる者はありませんわ。」

「さう思ひますか？　然し思ふままに僕に勝てる手を僕は知つてゐます。」

「どんな手ですか？」

「おや、解りませんか。本當に？　嗅いで御覧なさい。あなたにいただいたこの薔薇は何て氣持のいい匂ひでせう。」

フェニチカはその細い首を前に延ばして花の近くに顏を寄せた。……頭巾が頭から肩に辷り落ちて、色の濃い、柔いつやつやした髮が見えた。

「一寸お待ちなさい。僕も一緒に嗅ぎたいんです。」とバザロフは言つた。彼は腰を曲げて、彼女の開いた唇に強く接吻した。

彼女は喫驚して兩手を彼の胸に當てて彼を押しやつた。然しその力が弱かつたので、彼はその接吻をし直して長引かせることが出來た。

乾いた咳がライラックの茂みの背後から聞えた。フェニチカは直ぐに腰掛の一方の端に飛び退つた。パヴエル・ペトロウイッチが現れて輕い會釋をしながら、意地惡い、悼ましい聲で言つた。

「此處にゐたのかい。」

そして去つてしまつた。フェニチカは直ちに薔薇を皆集めて阿亭を出て行つた。

「あなたが悪かつたわ。イエフゲニイ・ワシリイッチ。」

出て行く時に、かう彼女は囁いた。その囁きには純眞な非難の調子があつた。

バザロフは今一つ最近の光景を思ひ出した。そして二つ共に恥しさと侮辱されたやうな悩ましさとを感じた。が、直ぐに頭を振つて、

「華やかなロザリオの役の最後の裝ひ」を皮肉に祝しながら自分の部屋に歸つた。

パヴエル・ペトロウイッチは庭から出て、勿體振つた足を灌木の方に進めて行つた。彼はかなり長い間其處に止まつてゐた。そして食事に引き返した時、ニコライ・ペトロウイッチは心配さうに、病氣ではないかと訊いた。——彼の顏はそれ程に陰欝に見えたのだつた。

「時に僕は肝臟が苦しいんでね。」パヴエルペトロウイッチは靜かに答へた。

二十四

二時間の後、彼はバザロフの部屋の戸を敲いた。

「科學の御研究中をお邪魔して濟みませんが、」と、彼は窓のところの椅子を占めて、兩手を象牙の頭の附いた美しい散歩用の杖に凭せながら（但し平生彼は散歩するに杖を用ゐなかつた）言ひ出した。

「止むを得ず五分間ばかり時間を割いていただきたいので……それ以上のお手間は取らせません。」

「幾時間でも宜しいやうに。」バザロフは答へた。その顏の色は、パヴエル・ペトロウイチが閾を越す

と同時にさつと變つた。

「五分間で澤山です。一寸お訊きしたいことがあつてお伺ひしたのです。」

「お訊きしたいこと？　どんなことです？」

「どうか御聞き下さい。お話しますから。この弟の家にあなたが御滯在なすつた當初、私があなたとお話する喜びを諦めてしまはなかつた頃は、幸なことに多くの問題に就いてあなたの御意見を承ることが出來ました。然し私の記憶してるところでは、吾々の間では、私の面前では、決鬪とか、果し合ひとかいふ問題を論じなかつたやうです。それで、この問題に就いてあなたの御意見を伺はせていただきたいものです。」

パヴエル・ペトロウイッチを迎へるために立ち上つたバザロフは、卓子の端に腰を卸して腕を組んだ。

「僕の意見は、理論的見地から言へば、決鬪は馬鹿々々しいことです。然し實際的見地からすれば、——さう、又違つた問題になりますね。」

「私の解決が間違つてゐないとすれば、つまり、決鬪に關する理論的見解はどうであらうとも、實際に於て、侮辱されてその名譽回復を求めないわけに行かないと、いふ意見なんですね。」

「その通りです。」

「よろしい。さうおつしやるのは私にとつて非常に愉快です。あなたの言葉は私を不決斷の狀態から救ひ出して呉れます。」

「不決斷、とおつしやるんですか。」

「同じことです。解るやうにお話しませうよ。私は……神學校の鼠ではない。あなたのお言葉は寧ろ悲しむべき境地から私を救つて呉れる。私はあなたと決鬪しようと決心しました。」

バザロフは眼を見開いた。

「僕と？」

「勿論。」

「然し何の理由でですか？」

「理由を説明することは出來るが、」とパヴエル・ペトロウイツチは言つた。「然しこれに就いては默つてゐたい。私の考では、あなたの此處にゐることが厄介です。私はあなたに我慢が出來ない。私はあなたを輕蔑する。而もそれでまだ充分でないなら……」

パヴエル・ペトロウイツチの瞳は光つた。……バザロフの瞳も血走つた。

「結構です。」と彼は同意した。「これ以上の説明は不要です。あなたはあなたの騎士的精神を僕に試みて見たいといふんですね。そのお樂しみは拒絶することも出來るが――然しやるのもいいでせう！」

「私はあなたに對する禮義を知つてゐる。」パヴエル・ペトロウイツチは言つた。「それで私を亂暴な手段に强ひないで。この挑戰に應じて下さることを當てにしてゐますよ。」

「率直に言へば、その杖を用ゐてといふことですか？」バザロフは冷やかに言つた。「正にさうだ。僕を侮辱なさる必要は全然ありませんよ。又實際、それは至極安全な方法でもありますまい。紳士として行動なすつたらいい……僕も紳士らしく、その挑戰に應じますよ。」

「結構だ。」とパヴエル・ペトロウイツチは杖を部屋の隅に押しやりながら言つた。「直ちにこの決鬪の條件に就いて少し相談しませう。然しあなたの御意見を伺ひたいが、私の挑戰の口實として、何か詰らない口論の形式を必要とはしないでせうか？」

「いや、形式なんかない方がいいでせうよ。」

「私もさう思ひますよ。同時に私は吾々の相違する眞の理由に入ることは不必要だと考へたい。吾々はお互ひに辛抱が出來ない。これ以上に何が必要でせうか。」

「これ以上に何が、實際？」バザロフは皮肉にパヴエル・ペトロウイツチの言葉を繰り返した。

「決鬪そのものに就いて極めて置きますが、吾々は介添人がないのだが、——何處かで見付けることは出來ないか知ら？」

「全くですね、何處で見付けることが出來るだらう？」

「では次の提案を出しますよ。決鬪は明朝六時に行ふ。矮林のうしろで、ピストル、距離は十步……」

「十步？　よろしい。十步の距離で憎み合ふわけですね。」

「何なら八步でも結構。」パヴェル・ペトロウイッチは言つた。

「よろしい。」

「二度發射のこと。そして、如何なる結果をも覺悟して、めいめいに手紙をポケットに納め、それに、自分の最後は自分に責ありと記して置くとする。」

「さあ、それは贊成しませんね、」とバザロフは口を入れた。「それにはフランス小說の一寸した臭味がある。頗る結構な口實とは言へない代物ですね。」

「かも知れない。けれども御同感でせうが殺人の嫌疑を蒙るのは不愉快ですからね。」

「それや同感です。が、その非難は避ける方法がありますよ。介添人はないかも知れないが證據人を連れることとは出來る。」

「誰です、承らせて下さい。」

「なに、ピオートルですよ。」

「ピオートルとは？」

「あなたの弟さんの召使です。彼奴は現代の教養を受けた男で、かうした場合に必要なコムイルフオー（爲すべきこと）を凡て果して吳れます。」

「御冗談でせう。」

「少しも。僕の提案を考へて下すつたら、これが充分常識的で且つ簡單なことをお信じになるでせう、蠟燭を嚢の下に隱すことは出來ません。だが僕はピオートルを適宜に仕度させて戰場へつれて參りませう。」

「相變らず冗談ですね。」とパヴェル・ペトロウイッチは立ち上つてきつぱりと、「然し丁寧な御用意をお示しになつたのだから、それを何とか言ふ權利はありません……。さうすると、これで全部相談が纏つたと……。ついでに伺ひますが、あなたはピストルをお持ちでないでせうね。」

「ピストルなんか持つてる筈がありませんよ、パヴェル・ペトロウイッチ。僕は軍隊に入つてるんぢやありませんからね。」

「それなら僕のを貸しませう。それを使つてから今日で五年ですから御安心なさい。」

「そいつは有りがたいことです。」

パヴエル・ペトロウイッチは杖を取り上げた。……「もう御禮を申し上げて、御研究をお續けなさいといふことしか、用はありませんでしたね。お別れいたします。」

「又嬉しくお目にかかりませう。」バザロフは客を戸口まで送つて言つた。

パヴエル・ペトロウイッチは出て行つたが、バザロフは戸口に暫く立ち止つてゐて、突然叫んだ。

「ふん、何だ、喫驚させやがる！何て結構な、何て馬鹿なことだ！面白い茶番ぢやないか！後足で踊つてる芝居の犬のやうにさ。然し拒絶するのは問題外だ。それだつて、彼奴は俺を毆ろうとしたんだ、そしたら……」（から思つた刹那、バザロフは顔色を變へた。彼の誇りの凡てが直ちに腕に集まつた）——

「猫のやうに彼奴を絞めるやうな破目になつたかも知れなかつたな。」

彼は顯微鏡の傍に歸つた。然し心臓は音高く鳴つて、觀察に必要な落ちつきが失はれてゐた。

「彼奴は今日俺たちを見たのだ。」と彼は思つた。「だが實際弟のために、こんなことをやるんだらうか？それにあれが大したことだらうか——接吻したことが？　これには他に何か理由があるな。ふん！多分彼奴は自分でフェニチカに戀してるんぢやないか？　屹度だ、惚れてるんだ、白日の如く明らかだ。何といふ厄介な、何といふうるさいことだらう！」と彼はたうとう極めてしまつた。「どつちにしたつて厭な仕事だ。第一、人間の頭を彈丸で貫く冒險をしなければならぬし、それから、どの道立ち去らねばならないし、次にはアーカディ……それからあの罪のない猫のやうなニコライ・ペトロウイッチ。厭な仕事だ。」

その日は一種特別の靜寂と倦怠との裡に過ぎた。フェニチカは存在してゐるといふ氣勢さへしなかつた。彼女は鼠穴の鼠のやうに自分の小さな部屋に坐り込んだきりだつた。ニコライ・ペトロウイッチは疲れ果てた樣子をしてゐた。彼は今、自分が特に希望を繋いでゐた小麥に害蟲が現れたことを聞いたのだつた。パヴエル・ペトロウイッチはその氷のやうな上品振りで皆を、プロコフイッチまでを壓迫してゐた。バザロフは父に宛てて手紙を書き出したが、破つて卓子の下に投げ込んでしまつた。

「死んだところで、」と彼は考へた。「皆は見付けて呉れるだらう。然し俺は死ぬつもりはない。いや、この世界で今少しの間は生きて行けるだらう。」

彼はピオートルに翌朝、夜が明けると直ぐに、重大な用事があるので起しに來るやうにと命じた。ピオートルは彼がペテルスブルグに伴をさせるのだらうと思つた。

バザロフは夜更けて寢床に這入つた。夜もすがら彼はとりとめのない惡夢に襲はれた、……。オデインツオーフ夫人が現れ續けたかと思ふと、それが彼の母になつた。そして黑鬚の仔猫をつれてゐた。その仔猫はフエニチカのやうに見える。と、パヴエル・ペトロウイツチが大木の形となつて、彼はそれとまだ戰はねばならない……。

ピオートルは午前四時に彼を起した。彼は直ちに服を着代へて、一緒に出掛けた。

それは氣持のいい、爽やかな朝だつた。小さな、ぽつぽつとした雲が、青くくつきり晴れた空に、泡の小さな環のやうに漂つてゐた。綺麗な露が玉となつて木葉や草の上に置き、蜘蛛の巣の上では銀のやうに光つてゐた。濕つぽい暗い大地は、薔薇色の曉の光を留めて靜まり、あまねく空からは雲雀の唄が夕立のやうに濺いだ。バザロフは矮林のところまで行つて、その端手の蔭に腰を卸し、其處でやつとピオートルに頼みたいことと思つてゐる役目を打ち明けた。この洗練された召使は全く愕然とした。然しバザロフは、何もしないで遠くから眺めてゐればいい、それに何の係り合ひもないのだから と保證して安心させた。「ただ、君の演じなければならぬ役割が如何に重大であるかは考へてほしいよ！」と彼は附け加へて言つた。ピオートルは双手を上に擧げて俯向いた。そして恐れのために青くなつて、白樺の幹に凭れかかつた。

マリーノからの道は、この矮林の端を廻つてゐた。その上には昨日から車にも人間の足にも觸れない輕い塵埃がつもつてゐた。バザロフは我にもなくこの道を眼で辿りながら、「何といふ馬鹿々々しいことだ！」と繰り返して獨語を言つては草の葉を摘んで噛んでゐた。早朝の冷たさは彼を二度も身顫ひさせた……。ピオートルは彼をがつかりしたやうに眺めた。けれどもバザロフは微笑したきりだつた。彼は恐れてはゐなかつた。

馬蹄の音が道路に沿うて聞えた。……一人の百姓が樹々の背後から現れて、二頭の馬を追ひ立てて來たが、バザロフの面前を過ぎる時、別に帽子に手を掛けるでもなく訝かしさうに彼を眺め廻した。これは不吉の前兆としてピオートルを明らかに惱ましたらしかつた。「こんなに早く起きる者もあるんだな、」バザロフは思つた。「然しこの男は少くとも仕事のために起きたのだ。それに吾々は……」

「おや、旦那が見えたやうです。」不意にピオートルは吃つて言つた。

バザロフは顏を擧げてパヴエル・ペトロウイツチを見た。輕い格子縞の胴着を着て、雪白のズボンを穿き、彼は慌しさうに歩いて來た。腕の下に、綠色の布で包んだ箱を持つてゐた。

「失禮いたしました。お待ちでしたらうね。」

彼は先づバザロフにかう會釋して、今度はピオートルにも、この場合介添人の性質を帶びたものとして丁寧に、「私は自分の召使の眼を覺まさせたくなかつたもんですから。」

「どういたしまして。つい今し方着いたばかりです。」とバザロフは答へた。

「ああ！　それなら尙結構でした！」パヴエル・ペトロウイッチは周圍を見廻して、「誰も見えません、邪魔をする者もゐない。始めていいでせうか？」

「始めませう。」

「何も改まつた說明は不要でせうね？」

「ええ、不要です。」

「彈丸をあなたお壤めですか？」

パヴエル・ペトロウイッチは箱の中からピストルを取出してから訊いた。

「いや、あなた壤めて下さい、僕は距離を測りませう。僕の足の方が長いから。」とバザロフは笑ひながら附け足した。「一つ、二つ、三つ。」

「イエフゲニイ・ワシリイッチ、」とピオートルは漸くの思ひで吃りながら（彼は熱病のやうに全身を顫はしてゐた）「私は向うに行きたいのですが、いかがでせうか。」

「四つ……五つ……よし。行つてもいいよ、向うへ。樹のうしろへ隱れて耳を塞いでおいで。だが眼だけは開けてゐないといけないよ。どちらでも倒れたら、驅けて來て起すんだ。六つ……七つ……八つ……。」バザロフは其處で立ち留つてパヴエル・ペトロウイッチを返り見た。「これで澤山ですか。それとも、もう二歩加へませうか？」、

「御隨意に。」と答へてパヴエルは第二彈を壤めた。

「ぢやもう二歩加へませう。」

バザロフは長靴の爪先で地面に線を引いた。

「それではこれが境界線です。ついでに、吾々は幾步境界線から下つていいんですか？　これも重要な問題だけれど、昨日相談しませんでしたね。」

「十步ですね。」

パヴエル・ペトロウイッチはピストルを二つ共バザロフに手渡して答へた。「どちらでもお取り下さい。」

「さうですか。然しパヴエル・ペトロウイッチ、僕等の決鬪は實に馬鹿げ切つたものであることを承認なさらなきやなりませんよ。まあこの介添人の顏色を御覽なさい。」

「あなたは何をでも笑はうとするんですね。」とパヴエル・ペトロウイッチは答へた。「私もこの決闘の變なことは認めてゐます。然し眞面目に戰ふつもりだといふことを、あなたに警告して置く義務があると思ひますね。ア、ボン、アンタンデユール、サリウ。(聰明なる人は幸であるの意)」

「僕もお互に殺し合ふ決心をしたことを疑つてるんぢやない。然し何故笑つてはいけないのです？　あなたがフランス語でユテイル、デユルシ（必要と快樂との意）を結びつけてはいけないのです？　入らつしやるなら僕はラテン語で參りませう。」

「私は眞面目にやる氣ですよ、」とパヴエル・ペトロウイッチは繰り返して自分の場所へ歩いて行つた。バザロフの方でも境界線から十歩測つて其處に佇立した。

「用意はよろしいか？」パヴエル・ペトロウイッチは訊いた。

「よろしい。」

「互ひに進みませう。」

バザロフは徐々に進んだ。パヴエル・ペトロウイッチは左の手をポケットに突つ込んで、だんだんにピストルの筒先を擡げながら近寄つて來た。……「彼奴め、俺の鼻を狙つてるな、」とバザロフは考へた。「而も用心深く眼を逸さないでゐやがる、曲者め！　だが、いい氣持ちやないな、俺は時計の鎖を狙つてやらう。」

何物かが耳の傍で鋭くぴゆうと鳴つた。と同時に彈丸の音がした。「聞えた。これでいいのだ。」とバザロフの腦裏に閃めくだけの間があつた。彼は今一歩踏み出して狙ひも定めず彈機を引いた。

パヴエル・ペトロウイッチは一寸飛び上つて股を抑へた。一脈の血潮が白いズボンを流れ始めた。

バザロフはピストルを放り出して敵の側に行つた。

「負傷しましたか？」彼は言つた。

「あなたは私を境界線まで招く權利がある。」とパヴエル・ペトロウイッチは言つた。「だが、それはどうでもいい。吾々の約束に依ると、お互ひに今一發射つ權利がありますよ。」

「よろしい。然し失禮ながら、それは他日やるとしませう。」バザロフは靑ざめて來るパヴエル・ペトロウイッチを捕へて、「今僕は決鬪家ぢやない、醫者だ。で、何より第一にあなたの傷を見なきやならん。ピオートル！　お出で、ピオートル！　何處へ行つたんだ？」

「下らないことだ……誰の助けもいらない。」パヴエル・ペトロウイッチは痙攣しながら言つた。「それに……吾々は今一度……やらなきや……」

彼は口髭を引つ張らうとしたが、手は利かず、眼は見えなくなり、そして彼は意識を失つた。

「困つたな！　氣絶した！　おやおや！」バザロフはパヴェル・ペトロウイッチを草の上に寢かした時、我知らず叫んだ。「傷の具合を見て見やう。」

彼はハンカチを出して血を拭ひ、傷の周圍を撫で始めた。

「骨には觸れてゐないな。」と彼は口の内で呟いて、「彈丸は深く這入つてはゐない。筋が一つ、ヴアスタス・エクステルヌスが擦り傷を受けたんだ。三週間もすればダンスも出來るだらうよ！……それに氣絶か！　ああ、こんな神經的な連中が俺は溜らない！　何て弱い皮膚をしてるんだらう！」

「死にましたか？」

背後からピオートルの顫聲がそつと訊いた。バザロフはあたりを見た。

「出來るだけ早く水を少し持つて來てくれ、この人はお互ひよりも長生きをするだらうよ。」

然しこの近代的の召使は彼の言葉を理解しないらしく、身動きもしなかつた。パヴェル・ペトロウイッチは徐ろに眼を開いた。

「死ぬるんでせうな！」とピオートルは囁いて十字を切り出した。

「尤もだ……何て間抜けな顏だらう！」と負傷した紳士は無理に微笑しながら言つた。

「うん、水を持つて來い、馬鹿が！」と、バザロフは呶鳴つた。

「入りませんよ……一時の眩暈でした。……助けて起して下さい……其處へ。それでよろしい。……ただこの傷口を繃帶するものが何か欲しい。さうすれば家へは歩いて歸れますが、何なら三頭馬車を寄越していただいてもいい。決闘は御都合で改めてやらんでもよろしいでせう。あなたは立派な態度だつた……今日は、今日は――でしたね。」

「過去を思ひ出す必要はありません。」バザロフは應じた。「未來のことに就いて、あなたは少しも御心配になることはありませんよ、何故つて僕は早速此處を立ち去るつもりでをりますから。さあ足の繃帶をしませう。傷は大したことはないが、血は止めとく方が何時でもよろしいでせう。だが第一に僕はこの死人を正氣づかせなきやならん。」

バザロフはピオートルの襟を搖すぶつた。そして三頭馬車を呼んで來るやうに命じた。

「弟を嚇かしてはいけないよ、夢にも知らせるなよ。」とパヴェル・ペトロウイッチは言つた。

ピオートルは飛んで行つた。そして彼が三頭馬車を呼びに走つてゐる間に、二人の敵同志は地面に坐つて默つてゐた。パヴェル・ペトロウイッチはバザロフを見ようとしなかつた。彼は如何なる場合にもバザロフと妥協したくないのだつた。彼は自分自身の傲慢と失敗とを耻ぢ、自分が惹起した全體

の事情をも恥ぢてゐたが、そのことを感じてゐる時でさへ、結局より好意ある振舞をすることが出來なかつた。

「兎に角、醜聞の擴がることもなからう。」と彼は考へて自分を慰めた。「その點はありがたいな。」

二人の沈默は長引いた。氣苦しい氣拙い沈默だつた。二人共氣輕ではゐられなかつた。互ひに相手が自分の氣持を知つてゐることを意識してゐた。このことは友達同志では愉快であるが、友達でない者同志の間では、殊に事を說明することも別れることも出來ない時に、常に極めて不愉快なことである。

「繃帶が固すぎはしませんでしたか？」漸くバザロフが訊いた。

「いや決して。結構ですよ。」とパヴエル・ペトロウイツチは答へた。そして一寸默つてゐたが、やがて、「弟を欺すわけには行かない。吾々は政治上の問題で爭つたのだと彼には言つてもいいでせう。」と附け加へた。

「至極宜しいでせうな、」バザロフは同意した。

「僕が英國狂を全部侮辱したのだとおつしやつてもいいでせう。」

「それは結構ですね。今、あの男は吾々を何と思つてるでせう？」

パヴエル・ペトロウイツチは通りかかる百姓を指さして言つた。それは決鬪の少し前に、二頭の馬を追つてバザロフの前を横切つたあの百姓で、今道を歸つて來ながら「旦那」が眼に入つたので帽子を取つたのだつた。

「解りませんね、誰にも！」バザロフは答へた。「何も考へてはゐないやうですよ。ラドクリッフ夫人があんなに言つてる通り、ロシアの農民は神秘なる未知なんですからね。誰が解るもんですか。彼奴は自分で自分が解つてゐないのです。」

「ああ！　ぢやあなたはさうお考へですか！」とパヴエル・ペトロウイツチは言ひ掛けたが、不意に叫んだ。「おや、ピオートルが飛んでもないことをやつた！　御覽なさい、弟が馬車で馳けつけて來ますよ！」

バザロフは振り返つて三頭馬車にゐるニコライ・ペトロウイツチの蒼白の顏を見た。彼は馬車が止らない内に躍り出して兄の方に飛びついた。

「これやどうしたんです？」彼は興奮した聲を擧げた。「イエフゲニイ・ワシリイツチ。どうしたんですか、これは？」

「何でもないよ、」とパヴエル・ペトロウイツチは答へた。「何でもないのにお前を喫驚させたんだ。私

は一寸バザロフ君と喧嘩をしたので、その代價を少し拂はなきやならなかつたのさ。」

「でも原因は何ですか、本當に！」

「どう話したらいいかな？　バザロフ君はサア・ロバート・ピールに對して無禮な皮肉を言つたんだ。一寸急いで言ひ足さなきやならんが、この事件に罪のあるのは私だけで、バザロフ君は實に立派な態度を採られたよ。私が挑戰したのさ。」

「だがあなたは血まみれですよ。まあまあ！」

「ふん、お前は私の血管の中に水があると思つてゐたのかね？　だが、この血はたしかに私の利益になる。さうぢやないでせうか、先生？　私を二頭馬車に乘せて呉れないか、そして陰氣にならないで呉れ。明日はすつかりよくなるだらうよ。それだけだ、よろしい、やつてくれ給へ、馭者君！」

ニコライ・ペトロウイッチは馬車の後に歩いた。バザロフは先と同じところに立つてゐた。

「兄の世話をしていただくやうにお願ひしなきやなりませんが、」とニコライ・ペトロウイッチは言つた。「他の醫者を町から呼んで參りますまで。」

バザロフは默つて頷いた。パヴエル・ペトロウイッチは一時間の内にも巧みに足に繃帶されて床に橫たはつてゐた。家中の者が喫驚してゐた。フエニチカは氣の拔けたやうになり、ニコライ・ペトロウ

イッチはそつと揉手をしつづけてゐたが、パヴエル・ペトロウイッチは笑つたり冗談を言つたりしてゐた。殊にバザロフに對してさうだつた。彼は立派な白麻の夜のシャツと美しい朝の化粧服とトルコ帽とを着けて、日覆ひを下すことを許さなかつた。そして食事を愼まねばならないのを、おどけた調子で零してゐた。

けれども夜になつて來ると、熱が出始めて頭痛がした。醫者が町から到着した。（ニコライ・ペトロウイッチは兄の言ふことを聞きたがらず、バザロフも自分に何か聞かれたくないので一日中、自分の部屋に蟄居してゐた。その顏は黃色くて意地惡さうに見えた。そして病人のところへだけは行つたが、それも出來る限り早々に引き返して來た。二度ばかりフエニチカに會つたが、彼女は恐ろしさに身顫ひして彼を避けた。）新しい醫者は冷たい飮物を勸めたが、危險はないといふバザロフの診斷には同意した。ニコライ・ペトロウイッチは兄が偶然のことから一人で負傷したのだと言つた。それに對して醫者は「ふむ！」と答へたが、その手にそつと二十五留の銀貨を握らせると、彼は言つた。「さうおつしやるな。よくなることですよ、たしかにね。」

家中の者は皆寢もせず着物も着代へなかつた。ニコライ・ペトロウイッチは爪先立てて兄を見舞ひ、又爪先立てて歸つて來た。病人は居眠りしながら少し唸つて、フランス語でウクシエ、ブウ（おやすみ）

と言つたり、飲物を呉れと頼んだりした。ニコライ・ペトロウイッチはフェニチカに一度、彼のところへレモン水を持つて行かせた。パヴェル・ペトロウイッチは彼女をぢつと瞶めながら、それを一滴も殘さず飲み干した。曉方になつて彼は熱が高くなり少し精神が亂れた。初めパヴェル・ペトロウイッチはわけの解らない事を口走り、それから不意に眼を開いて、自分の病床の近くで心配さうに覗き込んでゐる弟を見ながら言つた。

「ニコライ、お前はさう思はないかい、フェニチカが何處かネリイに似てるとは？」

「ネリイつて何です、兄さん？」

「どうして訊くんだ？　公爵夫人Ｒ――さ。殊に顔の上の方が似てるよ。セ、ド、ラ、メエム、ファミイユ（同じ家族の者の意）。」

ニコライ・ペトロウイッチは答へなかつた。然し彼は人間の古い情熱の固執に心の裡で驚いてしまつた。「その古い情熱が表面に現れると、こんな風になるんだ。」と彼は考へた。

「ああ、俺はどんなにあの浮氣な奴を愛してゐるだらう！」パヴェル・ペトロウイチッは悲しさうに頭のうしろに兩手を組み合して唸つた。と暫くしてから呟いた。――「生意氣な成上り者なんかに觸れさせて溜るものか……。」

ニコライ・ペトロウイッチは溜息をしたばかりだつた。彼はこれ等の言葉が意味してゐる人間を推測しさへしなかつた。

バザロフは翌日の朝八時に、彼の前に現れた。もう荷造りを終つて、蛙や昆虫や鳥などは逃がしてしまつてゐた。

「私にお別れに見えたのですか？」ニコライ・ペトロウイッチは立ち上つて彼を迎へながら訊いた。

「ええさうです。」

「私はあなたを理解して充分に是認してゐます。言ふまでもなくあの哀れな兄に罪があるのです。で、そのために兄は罰せられました。兄は私に。あなたがああなさるより外に仕方がないやうにしたのだと話しました。私も、あなたはこの決鬪を避けることが出來なかつたのだらうと信じてゐます。それは……それは或程度まであなた方の御意見が殆んど常に反對であつたことを以て説明される。（ニコライ・ペトロウイッチは言葉が少し亂れ始めた。）兄は舊式の、激し易い、頑固な人間です。……これがこの位のことで終つたのは有りがたいことで。私は表向きにならぬやうに充分注意しました。」

「僕の住所を書き殘して參ります。何か騷ぎのある場合の用心に。」とバザロフは急に言つた。

「騷ぎなんか起らないやうにと思つてをりますよ、イエフゲニイ・ワシリイッチ。……私の家での御滯

在がこんなことに……こんな始末になつたことは非常に殘念でした。アーカディのことを思ふと尙更心苦しいのです……」

「アーカディには會へるだらうと思つてをります。」とバザロフは答へたが、彼には、如何なる種類の「說明」も「斷言」も我慢の出來ない感情を呼び起した。「會へない場合には、僕の代りに別れを告げて下さるやうに。僕の殘念なことも御察して下さい。」

「私も……」ニコライ・ペトロウイッチは答へた。然しバザロフはその言葉の終らない內に出て行つた。

バザロフの行くことを聞いた時、パヴエル・ペトロウイッチは會ひたいと言つて、彼と握手した。然しその時でも彼は矢張り氷のやうに冷たかつた。彼はフエニチカに別れを告げることが出來ないで、ただ、窓に凭れてゐる彼女と視線を交したきりだつた。彼女の顏が落膽してゐるやうなのを彼は見た。

「恐らく彼女は悲しくなるだらう、」と彼は自分自身に言つた……「然し誰に解るものか？ 彼女はどうにかやつて行くだらう、たしかに！」

けれどもピオートルは堪らなくなつて彼の肩につかまつて泣いた。バザロフが眼に無盡の淚がある

のなら、と言つて宥めるまではさうしてゐた。又ダニヤシヤは自分の感情を隱すために森の中まで逃げ込まないではゐられなかつた。

この災害凡ての發頭人は馬車に乘つて煙草を吹かした。そして三哩ばかり先の道の曲り角に來て、キルサノフの農地が、その新しい家と共に長い列をなして見えた時、彼は一寸唾を吐いて呟いた。「呪はれたでも貴族！」そして外套で身體をしつかりと包んだ。

パウエル・ペトロウイッチは直ぐに良くなつた。が、一週間位は床に就いてゐなくてはならなかつた。彼は化粧をするのに非常に苦しい思ひをして、凡ての物にコロン香水を匂はせてゐたが、兎に角彼の所謂「捕虜」をよく辛抱した。ニコライ・ペトロウイッチは何時も彼に新聞雜誌を讀んで聞かせ、フエニチカは前と同じく彼に仕へて、レモン水や肉汁や、ゆで卵子や茶などを持ち運んだ。だが、彼女は彼の部屋に這入る時、何時でもひそやかな恐怖に襲はれた。パヴエル・ペトロウイッチの意外な行爲は家中の者を驚かしたものだつたが、彼女はその誰よりも驚いてゐた。それに動じないでゐたのはプロコフイッチ一人だつた。彼は自分の若い頃、紳士たちが如何に決鬪したかといふことを話して但しそれは本當の紳士間だけで、あんな下司な奴にはその生意氣を懲らすために鞭を加へるのが常だつたと言つた。

フエニチカの良心が彼女を責めることは殆んどなかつたが、彼女は時々、この決鬪の眞の原因を考へて惱ましくなつた。そしてパヴエル・ペトロウイツチは變な眼——彼女は背を向けてゐる時でさへ、彼の瞳が自分の上にあるのを感ずる程、それ程に變な眼をして彼女を見るやうになつた。彼女は絶えぬ内心の動搖のために、だんだん痩せて來た。そしてさうなると例に依つて尙ほ更に魅力が增して來た。

或日——事件が朝のうちに起つた。——パヴエル・ペトロウイツチは大分良くなつたのを感じて寢臺から長椅子に移つた。ニコライ・ペトロウイツチは兄がよくなつたのに滿足して麥叩き場へ行つてゐた。フエニチカが茶を持つて來て、それを卓子に置き、そして退らうとしてゐた。と、パヴエル・ペトロウイツチは彼女を止めた。

「そんなに急いで何處へ行くの、フエドウシヤ・ニコラエヴナ？」と彼は話し掛けた。

「忙がしいのかね？」

「いえ……お茶を注がなきやなりませんの。」

「それはあんたでなくてもダニヤシヤがするだらう。少しこの可哀さうな病人の傍にお坐り。ついでに一寸話さなきならんことがあるから。」

フエニチカは安樂椅子の端に腰を卸して物を言はないでゐた。

「ねえ、」パヴエル・ペトロウイツチは口髭を引つ張りながら言つた。「私は前からあんたに訊いて見たいと思つてることがある。どうやら私を恐れてゐるやうだな」

「私が？」

「さうだ。あんたは決して私を見ない。まるで良心が安らかでないやうぢやないか。」

フエニチカは眞赤になつた。けれどもパヴエル・ペトロウイツチを見た。彼は少し變に見えたので、彼女の心臟は徐々に高まり出した。

「あんたの良心は安らかかね？」彼は彼女に訊いた。

「どうして安らかでなくちやいけないんでせう？」彼女は口籠つて答へた。

「何故か解らないよ！　それにあんたは誰に惡いことが出來るだらう？　私に？　さうでもないらしい。ではこの家の誰か他の者にだらうか？　さうも思へない。私の弟とだらうか？　然しあんたはあれを愛してゐるからね。さうぢやなかつたらうか？」

「愛してをります。」

「あんたの魂も、あんたの心も、凡てを捧げて？」

「私は魂の全部を捧げてニコライ・ペトロウイッナッチを愛してゐます。」

「本當に？　私を御覽、フェニチカ（この名で彼女を呼んだのはこれが最初だつた）噓を言ふのが大きな罪だといふことは知つてるだらう。」

「パヴェル・ペトロヴイッチ、私は噓を言つてるんぢやありません。ニコライ・ペトロウイッチを愛さない――それで生きてゐようとは思ひません。」

「ぢや誰かに彼を見代へることはないだらうね？」

「誰に見代へることなんか出來るでせう？」

「誰に！　うん、この間此處から立つて行つた人にはどうだね？」

フェニチカは立ち上つた。「まあ、パヴェル・ペトロウイッチ、何で私をおいぢめになるんですか。私があなたに何をいたしましまして？　どうしてそんなことをおつしやるのです？」

「フェニチカ、私は見たんだよ……」パヴェル・ペトロウイッチは悲しさうな聲で言つた。

「何を御覽になりまして？」

「うん、あすこ……阿亭の中で。」

フェニチカは髮の際根まで、耳朶まで眞赤になつた。

「どうしてあれが咎められることでせう？」彼女は努めて明瞭に言つた。

パヴェル・ペトロウイッチは身體を起した。「あんたは咎められるところはない？　少しも？」

「私はニコライ・ペトロウイッチを愛してをります。他の誰をも愛してはゐません。何時もあの方を愛してゐます。」フェニチカは急に力を籠めて言つたが、咽喉は歔欷のために破れるやうに見えた。「あなたが御覽になつたことに對しては、審判の恐ろしい日にも咎められることはない、咎められることはなかつたと申しませう。私は恩人のニコライ・ペトロウイッチにそんなことで背いたと人に疑はれるなら、直ぐに死ぬる方がましです。」

然し此處で彼女の聲は途絶え、同時に彼女はパヴェル・ペトロウイッチが彼女の手を摑み、そうして押しつけてゐるのを感じた……。彼女は彼を眺めた。そして石のやうになつた。彼は先よりも顏色が青くさへなつて、眼は輝き、殊に何よりも不思議なことに、一滴の大きな涙がその頰には傳つてゐた。

「フェニチカ！」と彼は妙な囁き聲で言つた。「彼を愛して、彼を愛しておやり！　彼を誰かに見代へるやうなことはしないでくれ！　他の誰の言ふことも聞かないでくれ！　自分が愛してゐて、而も愛されぬ位恐ろしい事があるだらうか！　哀れなニコライを決して離れないでおくれ！」

フェニチカの眼は乾き、恐怖は去つてしまつた程に、彼女の驚きは大きかつた。然し、パヴェル・ペ

トロウイッチが、パヴエル・ペトロウイッチその人が、彼女の手を傍に持つて行きながら、それに接吻もしないで穴の開くほど瞶めて、時々痙攣的な溜息のみを洩らすのを聞いた時、彼女の感じはどうであつたらうか……。

「ああ、何かこの人は困つてゐることがあるのではあるまいか？……」と彼女は思つた。

この瞬間、彼の衰へ切つた生は、内部に湧き起つた。

階段が忙がしく近づいて來る足音で、がたがたと鳴つた。……彼は彼女を押しやつて頭を枕に返した。扉が開いて、ニコライ・ペトロウイッチが愉快さうに、生き生きとして這入つて來た。ミチヤは父親と同じく生き生きとして血色がよくて、小さなシャツだけ着、父親の肩の上でばたばたとやりながら小さな素足の指先で彼の粗末な田舍の大きなボタンを摑まうとしてゐた。フエニチカはわけもなく彼に飛びかかつて、彼と自分の子とを一緒に抱き、顔を彼の肩に押し當てた。ニコライ・ペトロウイッチは喫驚した。つつましやかで生眞面目なフエニチカは第三者の前で彼を抱いたりすることはないのだつた。

「どうしたんだ？」と彼は言つて、兄を一寸見やりながら、ミチヤを彼女に渡した。

「氣分が惡いのぢやありませんか？」彼はパヴエル・ペトロウイッチに近寄つて訊ねた。

彼は白麻の手布に顔を埋めてゐた。「いや……少しも……却つていいよ。」

「長椅子に移るのは少し氣が早すぎますよ。お前は何處へ行くんだ？」ニコライ・ペトロウイッチはフエニチカを振り返つて聲を掛けた。が、彼女は既に扉を締めて外に出てゐた。

「私は私の小さい英雄をあなたに見せようと思つて連れて來たんですよ。伯父さんに會ひたがつて泣いてゐたんです。フエニチカは何故連れて行つてしまつたんだらう？　だが何が惡いことがありますか、あなた方の間に何かわけがあつたんですか。」

「弟！」とパヴエル・ペトロウイッチは改まつて言つた。

ニコライ・ペトロウイッチは喫驚した。彼は狼狽したが、何故だかは自分にも解らなかつた。

「弟、」とパヴエル・ペトロウイッチは繰り返した。「私の頼みを實行するといふ約束をして呉れないか。」

「どんな頼みです。おつしやつて下さい。」

「これは頗る重大なことだ。お前の生活の全幸福が、私に言はせれば、これに係つてゐる。私は今お前に言ひたいと思ふ事柄に就いて、此頃しきりと考へてゐたんだよ……。弟、お前の義務を果してくれ、誠實な寛大な人間の義務を果してくれ。お前——最も善良な人間であるお前の行つてゐる不名譽

な悪例を棄ててしまつてくれ！」

「どんなことですか、パヴェル？」

「フェニチカと結婚するがいい……。彼女はお前を愛してゐる。彼女はお前の伜の母親だ。」

ニコライ・ペトロウイッチは一歩退いて兩手を組合した。「さうおつしやるんですか、パヴェル。かうした結婚の最も有力な反對者だと私が始終思つてゐたあなたが。それをあなたがおつしやるんですか。あなたが正に私の義務だとお呼びになることを私がしなかつたのは、唯單にあなたに對する尊敬の念からなんですよ。」

「そんな場合に私を尊敬するのはよくないことだ。」と答へてパヴェル・ペトロウイッチは物憂げな微笑を洩らした。「私はバザロフが私を貴族氣取りだと言つて非難したのは正しいと考へ出したよ。いや、見榮や世間の噂などに拘泥しないやうにしようぢないか。吾々は昔の人間で、今は落ちぶれてゐるのだ。今こそあらゆる虚榮を棄てる時だ。今お前が言つたやうに、吾々は義務を果さう。さうすることに依つて幸福を受けよう。」

ニコライ・ペトロウイッチは兄を抱かうとして飛びついた。

「あなたは私の眼をすつかり開けて下すつた。私は非常にあなたを最も賢い親切な人だと思つてゐた

が本當だつた。それに今では、そればかりでなく、あなたが高潔なよく物の解つた品性をお持ちのこともよく解りました。」

「靜かに、靜かに。」とパヴェル・ペトロウイッチは遮つた。「そのよく物の解つた兄の足を痛めないでくれ、何しろこの兄は五十に手が屆きながら、陸軍少將みたいに決鬪したんだからな。よし、それでは事が極つた。フェニチカは私の……ベル・スウル(よき妹の意)になるんだ。」

「ねえパヴェル！　だがアーカデイは何と言ふでせうか。」

「アーカデイが？　彼は夢中になつて喜ぶよ。その事は安心したらいい。結婚は彼の主義には反するだらうが、彼の持つてゐる内心の平等感は滿足するだらう。で、結局、十九世紀に於て、階級の相違に何の意味があらう？。」

「ああ、パヴェル、パヴェル？　も一度接吻させて下さい。心配しないで、注意しますから。」

兄弟は互ひに抱き合つた。

「今のお前の氣持を彼女に知らせてやらなくてはなるまいが、どう思ふ？」とパヴェル・ペトロウイッチは訊いた。

「何故急ぐんです？」ニコライ・ペトロウイッチは答へた。「何かあなた方の間に話があつたんです

か？」

「話が私たちの間に？　クエル・イデエー！（どうしてそんなことが、の意）」

「それならこれでいいんです。何よりもあなたが良くならなきやならん。それまでには隨分時間があります。それを考へて、いろいろと……」

「でもお前の心は極つたんだらう？」

「勿論私の決心はつきました。そして心からあなたに御禮を申し上げます。これで失禮しますが、あなたは休んでゐらつしやらなきや……興奮なんかなすつてはいけませんよ……。然し又よく相談しませう。お眠みなさいましよ！」

「あのやうに私に感謝するのはどうだらう？」とパヴエル・ペトロウイッチは一人になると思つた。「まるであの男が自分自身に頼つてゐないやうだ。彼が結婚すると直ぐに私は出て行かう、何處か遠くへ――ドレスデンかフロオレンスへ、其處に住んで……」

パヴエル・ペトロウイッチはコロニユ香水で額を濕して眼を閉ぢた。彼の美しい痩せ衰へた頭は、その上に眩しい白晝の日が一杯に射して、死人のそれのやうに白い枕に載つてゐた。……そして事實彼は死人であつた。

二十五

ニコルスコエでは、カテイアとアーカデイとが庭の中の、高い秦皮樹の蔭の芝地に坐つてゐた。フイフイはその近くの地面に、例の愛犬家の間で「兎屈み」と稱する優雅な曲線を、そのしなやかな身體で描いて横たはつてゐた。

アーカデイもカテイアも默つてゐた。彼は手に半ば開いた本を持ち、彼女は籠の中から殘つてゐる麺麭の屑を摘み出して雀の小さな家族共に投げてゐた。雀の群は持前の脅かされた大膽さを以て彼女の足のまはりを跳ねたり囀つたりしてゐた。秦皮樹の葉の中に湧く幽かな微風は、ゆるやかに陽光の緑金色の斑點を道の上とフイフイの背の上とに上下に動かしてゐた。切目のない蔭の覆ひがアーカデイとカテイアとの上に落ちて、時々眩しい光線が彼女の髮に耀いた。二人共默つてゐたが、その默つてゐる容子と、一緒に腰を卸してゐる容子とは、心を許し合つた親しみを現してゐた。どちらも相手のことを考へてゐるやうにも見えなかつたが、而もその相手のゐることをひそかに悅んでゐた。二人の顏も以前とは違つてゐた。アーカデイは稍々靜かに、カテイアはより華やかに愛らしく見えた。

「この秦皮樹をロシア語でヤスノーと言ふのは非常にいい名だとは思ひませんか。」とアーカデイは言

ひ出した。「他の樹はこの樹のやうに空氣に對してすつきりとして輝かしい透明さ（ヤスナースチ）を持つてゐませんよ。」

カテイアは眼を擧げて上を見て、「さうですわね」と同意した。

「うん、綺麗な文句を使つてもこの女は非難しないな」とアーカデイは考へた。

「私はハイネを好きませんわ。」とカテイアはアーカデイの持つてゐる本の方に眼をやつて言つた。「あの詩人が笑つてる時も泣いてる時も。思想的になつて憂欝の時は好きですけれど。」

「僕は笑つてる時の彼が好きです。」アーカデイは言つた。

「それはあなたの中に殘つてゐる古い皮肉的傾向の遺物ですわ。」（「遺物！　若しバザロフが聞いたら？」とアーカデイは思つた。「一寸待つて下さい。私たちであなたを變へて差上げますわ。」

「誰が私を變へるんです？　あなたが？」

「誰つて――姉が、あなたが口論するのをお止しになつたポルフイリイ・プラトニイツチが。一昨日あなたが教會に連れてお行きになつた叔母さんが。」

「うん、僕は厭と言へなかつたんです！　アンナ・セルギエウナと言へば、あの人は多くの事でイエフゲニイに同意してらしたやうですね？」

「姉も當時はあの人の影響を受けてをりました、丁度あなたがさうだつたやうに。」

「僕がさうだつたやうにつて？　今では僕があの男の影響を振りはらつたといふことがお解りですか？」

カテイアは默つてゐた。

「僕には解つてゐるが、あなたはあの男を好きませんでしたね。」とアーカデイは續けて言つた。

「私にはあの方は何と言つていいか解りませんわ。」

「カテリナ・セルギエウナ。その答は聞く度に僕には信じられません。吾々にとつて誰でも、解らないといふやうな人間はありませんよ。それは單なる遁げ口上です。」

「はあ、では、かう申しませう、私は……あの方を好かないと言ふのは正確ではありませんけれど、あの方が私とは別種類の人、私もあの方とは別種類の者といふ氣がするんです……あなたもあの方とは違つてお出でですわ。」

「どうして？」

「どう申し上げたらいいか……さう、あの方は野獸ですわ。そしてあなたや私は家畜です。」

「僕も家畜？」

カテイアは頷いた。

アーカデイは耳を搔いて、「けれどもカテリナ・セルギエウナ。それは本當に侮辱だとは思ひませんか？」

「だつて、あなたは野獸になりたいんでせうか——」

「野獸ではない、强くして力に充ちた者です。」

「それはいい望みではございませんわ。……あの友だちの方は望みはしないで、持つてゐるんですわ。」

「ふん！　それで彼がアンナ・セルギエヴナに大影響を及ぼしたとお考へなんですか？」

「ええ。でも誰だつて長い間姉を壓してゐる事は出來ません。」とカテイアは低い聲で附け加へた。

「何故さう思ふんです？」

「姉は非常に誇りを持つてゐます。……その意味は姉は……自分の獨立を大變に値踏みしてゐます。」

「誰だつてそれは値踏みするでせう、」とアーカデイは言つたが「それが何になる？」といふ思ひが腦裡を掠めた。これはカテイアの頭にも湧いた疑問だつた。若い人々が親しくなつてゐると常に同じ考に躓くことのあるものである。

アーカデイは微笑して、そつと彼女の方に寄つて囁いた。「あなたは少しあの人を恐れてゐるんでせう。」

「誰を？」

「あの人を。」とアーカデイは意味あり氣に繰り返した。

「あなたはどう？」今度はカテイアが訊いた。

「僕もですよ、僕の言つたことを考へて御覽なさい。僕もさうなんです。」

カテイアは指で彼を脅しながら、

「ところが不思議に思んですけれど、姉は今のやうにあなたに親しくなつたことはございませんわね。あなたが初めに入らした時よりはずつとさうですもの。」

「本當ですか！」

「だつて、お氣づきになりませんか？　そして嬉しくはございませんか？」

アーカデイは考へ込んだ、

「どうしてアンナ・セルギエヴナによく思はれるやうになりましたかね？　あなたのお母さんの手紙を持つて來て上げたからでせうか？」

「それもあり、他にも理由がありますわ。それは言へませんけれど。」

「何故？」

「言へませんわ。」

「ああ、解りました、あなたは非常に頑固な人だ。」

「ええ、私はさうですわ。」

「而も觀察家だ。」

カテイアはアーカディを横目で見た。「多分さうでせう。それでお氣を惡くなすつたの？　何を考へてゐらつしやるの？」

「どうしてそんな風にあなたが觀察家にお成りかと不思議に思つてゐるんです。あなたはそんな臆病でつつましやかでゐて、誰をも遠方から見てゐる癖に。」

「私は大低一人で暮して參りました。さうすると人間に反省するやうになりますわ。だけど、私は誰をでも本當に遠方から眺めてゐるのでせうか？」

アーカディは滿足に充ちた眼差しをカテイアに投げた。

「御尤もです。」と彼は續けた。「然しあなたのやうな地位——あなたのやうな境遇といふ意味ですが——にゐる人々はその能力が屢々缺けてゐるものです。僕にとつてさうであるやうに、その人々にとつ

ても、眞理を摑むことがむつかしいのです。」

「でも御存知の通り私は金持ではありません。」

アーカディは喫驚して直ぐにはカテイアの意味が解らなかつた。「おや、勿論、財産は皆姉のものだ！」といふ考が咄嗟に思ひ浮んだ。その考は彼にとつて不快なものではなかつた。

「何て立派にそれをおつしやつたんでせう！」と彼は言つた。

「え？」

「あなたはそれを恥ぢもせず誇りもせずに立派に簡單におつしやつた。ついでながら、自分の貧しいことを知つて語る人は誰でもその感情に、何か特殊な或物、一種の誇りといつた風のものを常に持つてるに相違ないと僕は思ひますよ。」

「私は今までそんなことを覺えませんでした、姉のお蔭ですわね。私はたつた今、たまたま、それが話題になりましたから、私の地位を話したきりですわ。」

「成程、然し僕が今言つたその誇りをあなたが持つてることはお認めにならなければ。」

「例へて言ひますと？」

「例へば、あなたは——こんなことを訊くのを許して下さい、——金持の男と結婚したくはないでせ

う、え？」

「若し私がその人を非常に愛してゐたら……いえ、それでも私、結婚したくありませんわ。」

「そこですよ、御覧なさい！」とアーカデイは叫んで、一寸口を切つたが、附け足して、

「それでは何故その人と結婚したくないんです？」

「何故つて、俗諺にも釣り合はぬ緣は不幸のもととなりますから。」

「あなたは支配したいか、それとも恐らく……」

「いいえ！　どうしてそんなことが？　それどころか、私は服從しようとしてゐます、唯不平等は溜りませんけれど。自分自身を尊敬して而も服從すること、それは解ります、それは幸福です。けれども隷屬的生存……いえ、それは澤山ですわ。」

「それは澤山、」とアーカデイはカテイアの言葉を繰り返して、「さうです、さうです。あなたは何事につけても矢張りアンナ・セルギエヴナのお妹さんだ。姉さんと同じく獨立してゐるか、もつとつつましやかな人だ。だから、感情を、それがどんなに强く高尙なものであつても、第一に現すやうなことはなさらないでせう、屹度ね。」

「それで、どうだとおつしやるの？」カテイアは訊いた。

「あなたは妹さんと同じく賢くて、それ以上でないまでも、同等の性格を持つてゐらつしやる。」

「姉と比較なさらないで下さい、どうか。」とカテイアは慌しく口を入れた。「あなたは姉が美しくつて賢いことを忘れてゐらつしやるやうに見えます……そして、殊にあなたは、アーカデイ・ニコラエウイッチ、そんな事を、而もそんな生眞面目な顏をして、おつしやるものぢやありませんわ。」

「何のことでせうその、『殊にあなたは』といふのは——何で僕が冗談を言つてるとお思ひになるんだらう？」

「無論御冗談ですわ。」

「さうお思ひになるんですか？　然し若し僕が今言つてる事を確信してるのだつたら、どうです？　これでも充分に言ひ現せないと思つてるのだつたら？」

「私には解りませんわ。」

「本當に？　うん、解りました、僕はあなたが實際以上に觀察家であると考へ違ひをしてゐたんです。」

「どうして？」

アーカデイは返事をしないで向きを變へた。カテイアは籠の中の麵麭屑をいくらか探して雀に投げ

始めた。けれども彼女が手を餘り強く振つたので、雀はそれを拾はないで飛び去つてしまつた。

「カテリナ・セルギエウナ！」と急にアーカデイは言ひ出した。「あなたには何の結果も與へないことでせうが、まあ言はせて下さい。僕はあなたを姉さん以上に評價してゐるのみではなく、世界中の誰よりも重く見てるんですよ。」

彼は立ち上つて自分の唇から洩れた言葉に自ら驚いたもののやうに、足早に其處を去つてしまつた。

カテイアは兩手を籠と一緒に膝に下して、首を傾け、長い間アーカデイを見送つてゐた。次第に眞紅の色がぽつとその頬に染みて來た。然し唇は微笑を浮べなかつた。彼女の黑い瞳は困つたらしい色と、或他の、まだはつきりしない感情とを現してゐた。

「一人でゐるの？」

彼女はかういふアンナ・セルギエウナの聲を傍に聞いた。「アーカデイと一緒に庭に來たんだと思つてゐたよ。」

カテイアは徐々に眼を姉の方に擧げた。（優しく、念入りに裝つて、彼女は開いた日傘の先でフイフイの耳を撫つてゐた。）そして、ゆつくり答へた。

「ええ、一人ですわ。」

「それでは、」と彼女は微笑を見せて、「あの人は自分の部屋に歸つたんだわね。」

「ええ。」

「一緒に本を讀んでたの？」

「ええ。」

アンナ・セルギエヴナはカテイアの顎に手を掛けて顔を擧げさせた。

「喧嘩したんぢやないでせうね？」

「いいえ。」とカテイアは答へて靜かに姉の手から離れた。

「何てあつさりした返事でせう！　私はあの人が此處にゐると思つて、一緒に散歩に出掛けようと思つたのよ。あの人は何時も散歩しようと言ふんだから。お前の靴が町から届いてるから、行つてごらん。お前の古い靴が隨分ひどくなつてるのを、私は昨日やつと氣がついたもんだから。お前はそんなことは思はないし、それに、そんな可愛い小さな足をしてるんだもの！　手も綺麗だけれど……少し大きいわね。だから何よりもその小さな足を大切にしなきやいけませんよ。でもお前は見榮坊ぢやないわね。」

アンナ・セルギエヴナは美しい寛衣の輕い絹ずれの音をさせながら、小徑に沿つて行つてしまつた。

カテイアは草の上から立ち上り、ハイネを持つて其處を去つた。――けれども靴を見に行くのではなかつた。

「可愛い小さな足！」彼女は日光の熱に燃えてゐる手擦りの石階段を、ゆつくりと身輕に昇りながら考へた。「可愛い小さな足と言はれた……さう、その足にあの方が跪くやうになるわ。」

けれども忽ち羞恥の感情が湧いて、彼女は慌しく二階へ駈け上つた。

アーカデイは自分の部屋へ行かうとして廊下を通つてゐた。と、執事が追つかけて來てバザロフさんが彼の部屋にゐることを告げた。

「イエフゲニイが？」とアーカディは殆んど喫驚して呟いた。「何時頃來たんですか？」

「バザロフさんは只今御到着で、アンナ・セルギユウナには告げないで早速あなたにお目にかかりたいとのことでございます。」

「自宅に何か變事でもあつたかしら、そんなこともあるまいが。」と思つてアーカディは急いで階段を駈け上り、直ぐに扉を開けた。バザロフを見ると彼は忽ち安心した。然しもう少し經驗を積んだ者ならば恐らく、この意外の訪問客の沈んだ、然し元氣のいい頭に潛んでゐる內心の動搖の徵候を見逃しはしなかつただらう。彼は塵にまみれた外套を肩に掛け、帽子を冠つて窓側に腰を卸してゐた。アー

カディが騷がしい聲を立てて頸に飛びついた時も彼は立ち上りさへしなかつた。

「意外だつたね！　全くよく來て吳れた。どうかしたのかい？」と彼は言つて自分でも喜んでゐると思ひ、又自分の喜んでゐるのを見せたいとも考へて部屋を騷がしく駈け廻つた。「家の方は萬事無事だらうね。皆達者か？」

「萬事無事ではある、が、皆達者ではないよ。」とバザロフは言つた。「喋つてゐないで麥酒を取り寄せて吳れないか。そして僕の言ふことを聽き給へ」簡單だが頗る強い調子で「一切を話すからね。」

アーカディが靜かになつたので、バザロフはパヴエル・ペトロウイッチとの決鬪を詳しく話した。アーカディは非常に驚いて、悲しくさへなつたが、それを顏に現すのは不必要であると考へたので、伯父の負傷が實際に重くないのかどうかを聞いたきりだつた。そしてそれは最も興味あることながら醫學的見地からではないといふ返事を聞いて、彼は無理笑ひをして見せた。が、內心では傷つけられた氣持と、言はば羞恥の氣持とを二つながら感じたのだつた。

「さうだ、君、」とバザロフは說明した。「封建時代の人間と暮せばどうなるか、君は解つてるだらう。君も封建時代の人間に生れ變つて騎士的の試合にでも加はつて見給へ。うん、それで僕は親父の家に歸るよ。」バザロフは話を切つた。「それで僕が途中で此處に寄つたのは……この事をすつかり話すため

だと言ふべきだらう。若し僕が無用の噓を下らないことだと思つてゐなかつたらね。いや、僕が此處へ寄つたのは――その理由は悪魔でなきや解らん。畑から赤大根を引き拔くやうに、自分の首筋を摑んで、自分自身を引き拔くことは、人間にとつて時にいいことだよ。僕が近頃やつてるのはそれだ。……が、僕は自分で植えつけて置いた畑で、見棄てようとするものを今一度見たいと思つたのさ。」

「その言葉は僕に關したことぢやなからうね。」とアーカディは少し胸に應へて言つた。「君は僕を見棄てようと言ふんぢやゐるまいね？」

バザロフは強い、殆んど突き徹すやうな瞳を彼に向けた。

「それがそんなに悲しいのかい？　それは君が先刻僕を見棄てたものと思へるよ。それ程君は生々して元氣がいい……アンナ・セルギエウナとの事件は屹度成功してるんだね。」

「アンナ・セルギエウナとの事件といふのはどういふ意味だい？」

「だつてさ。君は彼女のために町から此處へ來たんぢやないか、え、お坊つちやん？　ついでだから一訊くが、日曜學校はどうなつてるね？　君は彼女に戀してないといふ氣かい？　それとも既に打ち解ける狀態までに進涉したのかい？」

「イエフゲニイ、僕は始終君には腹藏なく接してるよ。誓ふことが出來る。君は誤解をしてるんだ。」

「ふん！　それは別の話さ。」とバザロフは低い調子で言つた。「然し君は氣にするには當らないよ、それは僕とは全然無關係の問題だからね。感傷家は言ふだらう『吾々の路は今や別れかけてゐるのを感じる』と。が、僕は唯お互ひに疲れてると言ふきりだ。」

「イエフゲニイ……」

「ねえ、これには大して悪いこともないよ。この人生の中にはこれよりももつと疲れることがある。で、今さよならを言ふ方がいいと考へるが、さうぢやなからうか？　僕は、カルウガの知事夫人に宛てたゴーゴルの告白を讀んだ時のやうに、曾て此處へ來て以來、嘔吐したいやうな感情を覺えてるんだ。ところで、馬を外して置くやうに話すのを忘れた。」

「それや餘りぢやないか！」

「何故？」

「僕自身のことは何も言ひたくない。然しそれはアンナ・セルギエウナに對してこの上ない失敬に當るだらう。彼女は屹度君に會ひたいと思つてるだらうに。」

「ああ、君は誤解してる。」

「ところが誤解してゐないさ、たしかに。」とアーカディは答へた。「どうしてそんな風を裝つてるん

だ？　そんなら、君は彼女のために此處に來たんぢやないのか？」

「まあさうだ。が、どつちにしろ君は誤解してる。」

然しアーカディの言つたのは本當で、アンナ・セルギエウナはバザロフに會ひたいと言つて執事を呼びに寄越した。バザロフは彼女の處に行く前に着物を着代へた。彼は容易く取り出せるやうに新しい着物の一揃ひを荷物の中に持つてゐた。

オディンツオーフ夫人は、曾て彼が思ひがけなく彼女に對する戀を打ち明けた部屋ではなく客間の方へ案內した。彼女は丁寧に指先を差し出したが、顏は自然に緊張した感じを現してゐた。

「アンナ・セルギエウナ、」とバザロフは慌てて言つた。「先づ第一にあなたは御安心なさらなきやなりません。あなたの前には、ずつと前に正氣に返つて自分の馬鹿げた行を他人にも忘れて貰ひたいと望んでゐる哀れな男がをります。僕はずつと此處を去るつもりですよ。そして僕はおとなしい人間ではありませんが、あなたが嫌忌の氣持を以て僕を記憶してゐらつしやるその觀念を消して行くことは兎に角嬉しいことです。」

アンナ・セルギエヴナは今高山の頂上に辿り着いた人のやうなほつとした溜息を洩らした。そして彼女の顏は微笑に依つて明るくなつた。彼女は又バザロフに手を差し出して彼の握手に報いた。

「過去は過去といたしませう、」と彼女は言つた。「私はさうしようと思つてゐましたの。良心から言はせると、あの時ふざけたり何かして私が惡いのでしたは。つまり以前のやうなお友達となりませう。あれは夢でした。さうぢやないでせうか？　だから誰が夢を覺えてゐるものですか？」

「誰が覺えてゐるものですか？……それに愛は……御存知の通り全く想像以上の感情ですからね。」

「本當に？　さうお聞きするのは大變嬉しうございます。」

こんな風にアンナ・セルギエウナは話し、又こんな風にバザロフは話した。彼等は二人共眞實を話してゐると想つた。それが眞實か、全くの眞實がこの言葉の中に見出されたのだらうか？　彼等には解らなかつたし、況して作者には解らないことである。然し會話は、彼等が互ひに信じ合つてゐるもののやうに進んで行つた。

アンナ・セルギエウナは、他にもいろいろと訊いたが、キルサノフ家では彼が何をしてゐたかといふことを訊いた。彼はパヴエル・ペトロウイッチとの決鬪に就いて話さうとしたが、彼女が、自分に興味を持たせるためにそんなことを話すのだと思ふかも知れないと考へて止してしまつた。そして始終仕事をしてゐたと答へた。

「それで私は、」とアンナ・セルギエヴナは言ひ出した。「わけが解らないんでんけれど、初めは氣が滅

入つて、外國へ行く計畫まで立てましたが、まあね！……その氣がなくなると、あなたのお友だちのアーカデイ・ニコライッチが來ましたので、又昔流儀に戻つて本役をつとめるやうになりましたの。」

「どんな役です、それは？」

「叔母、後見人、母親といつた風の――何と呼んでもいい役なんです。ついでですが、私にはあなたとアーカデイ・ニコライッチと親しいのが全く腑に落ちませんでしたよ。私、あの人はどちらかと言へば詰らない人だと思つてゐましたの。が、今は前よりも解つて來ました。あの人の賢いことも……そしてあの人は若い、若い……それは大きなことですよ……あなたや私とは違ひましてね、イエフゲニイ・ワシリイッチ？」

「奴は矢張りあなたと一緒だとおどおどしますか？」とバザロフは訊いた。

「さあ……」アンナ・セルギエウナは言ひ掛けて一寸間を置いた。「今では少し打ち解けて參りました。私とも話します。以前には何時も避けるやうにしてゐましたわね。尤も、私もあの人の仲間に入らうとしなかつたんですけれど。あの人は今カテイアとは仲がよくなつてゐますよ。」

バザロフは苛立たしさを感じた。

「女は嘘をつかないではゐられないのだ、無論！」と彼は考へた。

「あなたを彼が避けるやうにしてゐたとおつしやいますが、」と彼は冷たい微笑を浮べて聲高に言つた。「あなたを愛してゐたことは多分あなたによく解つてゐるでせうね？」

「え！　あの人も？」

アンナ・セルギエウナの唇はかう云つた。

「あの人も、」バザロフは負けたやうに頭を下げて同じことを言つた。「あなたがそのことを知らないなんて譯があるだらうか？　僕は今何か新しいことをお話しましたかしら？」

アンナ・セルギエウナは伏眼になつて、

「あなたは間違へてゐらつしやいますよ、イエフゲニイ・ワシリイッチ。」

「僕はさう思はない。然し多分こんなことは言はないで置くべきだつたでせう。」

バザロフはかう答へて内心、「あなたもこれからは嘘を言はないでくれ」と自分に言つた。

「何故さう思はないんですか？　でも、私はこれで見てもあなたが一瞬の印象に意味を置き過ぎてゐらつしやるのだと思ひます。誇張なさりたいんではないかと疑ふ氣になりますわ。」

「そのことはもう澤山ぢやありませんか、アンナ・セルギエウナ。」

「まあ、何故？」と彼女は訊き返した。けれども自分から話頭を變へた。彼女は話をして、凡てが忘

れ去られたものと思つてはゐたが、それでもバイロフに對して氣輕にはなれなかつた。極めて簡單な言葉を交したり冗談を言つたりしながら、而も微かな恐怖の顫へを感じるのだつた。汽船に乘つてゐる人々は陸地にゐるもののやうにのん氣に笑つたり話したりしてゐるが、一寸した故障が起るか、普通以外の何か些たたる徴候が現れるかすると、直ちに皆の顏に際立つた警戒の色が現れて、不斷の危險に對する不斷の意識が示されるものである。この場合が丁度こんな風だつた。

アンナ・セルギイヴナとバザロフとの會話は長く續かなかつた。彼女は思案に沈みがちになつて、うはの空の返事をして、遂に廣間に行つて公爵夫人やカテイアに會はうとすすめた。「それにしてもアーカデイ・ニコライッチは？」と彼女は訊いた。彼が一時間以上も姿を見せないといふので、彼女は使をやつて探させた。彼は直ぐには見つからなかつた。彼は庭の繁みの中に姿を隱して、腕を組んだ手を支へながら瞑想に耽つてゐたのだつた。それは深い眞面目な瞑想ではあつたが悲しくはなかつた。彼はアンナ・セルギユウナがキリロフと二人きりでゐるのを知つても以前のやうな嫉妬を感じなかつた。否反對に彼の顏はだんだんに輝いた。驚くと共に喜び、而も何事かを決心したらしかつた。

二十六

故オデインツォーフ夫人は新し好きではなかつたが、或範圍内の美術を認めてゐた。それで庭園の中の温室と池との間に、ギリシヤ寺院風の建物をロシア煉瓦で建ててゐた。この寺院或は美術館の背後の暗い壁に沿うて、オデインツォーフが外國へ注文して取り寄せた、彫刻を入れる六つの壁龕があつた。この彫像はそれぞれに孤獨、沈默、瞑想、憂鬱、謙遜、慧智を表示してゐた。その内の一つ、指を唇に當ててゐる沈默の女神は、送つて寄越されて納められたその日に百姓の子がその鼻を壞してしまつた。そして近所の左官が「前のよりも二倍も三倍も立派な」新しい鼻を作らうと企てたけれども、オデインツォーフはそれを除くやうに言ひつけた。で、その女神像は今でも納屋の叩き場の隅に見られて、長年其處に立つてゐるので、百姓女の迷信的恐怖の基になつてゐた。その建物の前面はずつと前から濃い樹の茂みになつて、柱の破風だけが、その緣の上に聳えてゐるのが見えてゐた。建物の中は日中でも冷々としてゐた。アンナ・セルギエヴナは其處で前に蛇を見てから來るのを好かなかつたが、カテイアはよく來て、壁龕の下の廣い石造の腰掛に坐つた。彼女は此處で、この蔭と冷氣との中で、讀書したり仕事したり、或は言ふまでもなく吾々の誰もが經驗するところのあの全く平和な氣持に浸つたりするのだつた。その魅力は、吾々の周圍や内部に永久に流れてゐる生命の廣大な流れに默つて聽き入りながら半ば無意識でゐる、その狀態に存してゐる。

バザロフが着いた翌日もカテイアはその氣に入りの石に腰を卸してゐた。そして傍には又アーカデイがゐた。彼はこの「堂」に一緒に來て呉れるやうにと彼女に頼んだのだつた。

晝食までにはまだ一時間あつた。霧の深い朝は既に蒸し暑い晝になつてゐた。アーカデイの顔は前日の表情をそのままで、カテイアの方は何かに氣を取られてゐるやうに見えた。アンナ・セルギエウナは朝の茶を濟ますと直ぐに自分の部屋に彼女を呼んで、何時もカテイアの氣持を少し惡くさせる例の抱擁を先づしてから、次にアーカデイとの振舞に今少し氣をつけるやうに、殊に二人きりの話を避けるやうに、叔母や家族中の者の注意を惹くことのないやうに、と忠告したのだつた。それはかりではなく、つい前の晩でさへアンナ・セルギエウナは平生の容子とは違つてゐた。そしてカテイア自身も自分に何か過失があるやうに意識してのん氣ではゐられなかつた。彼女はアーカデイの頼みを聞き入れた時に、これが最後だと自分自身に言つたのだつた。

「カテリナ・セルギエヴナ、」と彼は恥づかしい氣輕さとでも言ふやうな調子を以て始めた。「僕が幸にもあなたと一つ部屋の下に住むやうになつてから、お互ひにいろんなことを話し合ひました。然しまだ一つの、極めて重大な……僕にとつてはです、一つの問題に今日まで觸れることをしませんでした。あなたは昨日僕が變つたと言ひましたね、」と言つて彼はカテイアのいぶかしさうな眼差しを見詰めた

り避けたりしながら、「僕はたしかにひどく變りました。それは誰よりもあなたがよく知つてゐらつしやる――全くあなたのお蔭で變つたんですからね。」

「私が？……私に？……」とカテイアは言つた。

「僕は今此處へ來た時のやうな自惚屋の子供ではありません。」とアーカデイは續けた。「二十三歳になつたのが何の効もなくはありませんでした。以前のやうに僕は有用な人間になりたいと思つてゐますし、眞理のために自分の全力を捧げようとも思つてゐます。然し最早以前と同じ處に理想を求めやうとはしないのです。理想自身が僕に接近して來ました……もつと手近なところに。今日まで僕は僕自身が解らなかつた、自分自身に實力以上の仕事を課してゐました……。僕の眼はやつと開きました、或一つの感情のお蔭で。……餘りはつきりとは言つてゐませんが、あなたには解つて貰へるでせうね。」

カテイアは答へなかつた。が、アーカデイは見るのを止めてしまつた。

「僕はかう思ひますよ、」と彼は、今度は前よりも興奮した聲で話し出した。頭上では、樺の葉の中で鶸が遠慮なく歌を唄つてゐた、――

「或人々に打ち明けるのは凡て人間の義務です……その或人々と言ふのは……實際、自分に近い人な

んです。それで僕は……決心しました。……」

然し此處でアーカディの雄辯は絕えた。彼は緜口を失つて口訥り暫くは默つてゐるより仕方なかつた。カテイアは相變らず眼を擧げなかつた。彼女は、彼がどんなところへ導いて行くのか解らないので何物かを待ち設けてゐるやうな風があつた。

「あなたを吃驚させるだらうとは豫め思ひました、」アーカディは又漸くの思ひで自分を落ち着けながら「殊にこの感情が或意味で……或意味で……あなたに關係してるんですから。覺えてお出でゞせうか、あなたは昨日僕に眞面目が缺けてゐると非難なすつた。」アーカディは、沼の中に落ちて一步每に深みに沈んで行くことを自分で知りながらも、出來る限り早くそれを橫切らうとの望みを以て急ぐ人のやうな調子で續けた。「その非難は、その非難に慣しなくなつても、靑年に落ちがかることがよくあるものです。で、僕がもつと自信を持つてゐたなら……」

アーカディは弱り切つて「さあ、助けて吳れ！　助けて吳れ！」と心中で思つた。然しカテイアは前の通り顏を向けもしなかつた。

「若し望めるなら……」

「若しあなたのおつしやることを確かだと感じることが出來ましたなら、」といふアンナ・セルギエウ

ナのはつきりした聲がその時聞えて來た。

アーカディは直ぐに靜かになつたがカテイアは顏色を變へた。この堂を隱してゐる灌木の茂みの傍を小道が走つてゐて、アンナ・セルギエウナはバザロフに連れられてその道を步いてゐた。カテイアとアーカディとにはその姿は見えなかつたが、その一語一語、絹ずれの音、その呼吸さへも聞えるのだつた。彼等は五六步行つてから故意とさうしたやうに、丁度この堂の眞向うに立ち止つた。

「ねえ、あなたも私も間違つてゐたんです、」とアンナ・セルギエウナは續けて言つた。「私たちはどちらも最初の靑春を失ひました。殊に私はさうです。私たちは人生を見て來て疲れてゐます。私たちは――何故知らない風をなさるんですか？――利口です。初めはお互ひに興味があり好奇心も抱いてゐました。……それから……」

「それから僕は氣が拔けました。」とバザロフは口を入れた。

「それが私たちの誤解の原因でないことは御存知でせう。けれども私たちが互ひに要求を持たなかつたといふ事、それが大切な點でした。餘りに……何と言つたらいいでせう……餘りに似たところが私たちには多過ぎたんです。そのことが直ぐには解りませんでしたの。ところがアーカディは……」

「あなたはあの男が必要なんですか？」とバザロフは訊いた。

「まあ何ておつしやるの、イエフゲニイ・ワシリイツチ。あなたはあの人が私を何とか思つてるとおつしやいましたわね。そして私も好かれてゐるやうに始終思ひます。私もあの人の叔母さんになれるかも知れないといふことは知つてゐますが、以前よりもあの人のことを考へるやうになつたことも正直に申し上げたいのです。あゝした若々しい感情には、一種特別の魅力がありましてね……」

「さうした場合には蠱惑といふのが最も普通の言ひ方でせう。」とバザロフは遮つた。不機嫌の溢れ出てゐるのが、彼のしつかりした、けれども息詰る聲の中に聞きとられた。「アーカデイは昨日僕に對して何だか變でしたよ。あなたのことも妹さんのことも話しませんでした……これは重大な徴候ですね。」

「カテイアとは兄妹のやうですよ。」アンナ・セルギエヴナは説明した。「私はあの人のさういふ點が好きですの。けれども多分そんなに親しくなさるのを放擲つて置くべきではなかつたのでせう。」

「その考は……姉としてのあなたの感情から掻き立てられたんですか？」バザロフは眠さうに言つた。

「無論ですとも……。けれども何故こんなに立ち止つてゐたんでせうか？　行かうぢやありませんか。何て變な話をしたんでせうね。こんな事をあなたとお話しようとは思ひも染めませんでした。御存知の通り、私はあなたを恐れてをります……そして同時に信頼してゐます。何故つて本當は、あなたは

いい方なんですもの。」

「第一に僕は少しもよくはありませんし。第二に僕はあなたに對する意義を凡て失つてしまひました。それにあなたは僕をよい人間だとおつしやる。……それは死骸の頭上に花飾りを置くやうなものですね。」

「イエフゲニイ・ワシリイツチ。私たちは責任がないんですわね……。」アンナ・セルギエウナは始めた。然しさつと風が吹いて來て、木葉を搖り、彼女の言葉を奪ひ去つてしまつた。

「無論あなたは御自由です……。」バザロフは暫く沈默してゐた後から言つた。何事もはつきりとは聞えなくなつた。その足音も消えてしまつて……何も彼もが、しんと靜まり返つた。

アーカデイはカテイアを振り返つた。彼女は同じ場所に腰を掛けてゐたが、顔は相變らず低く垂れてゐた。

「カテリナ・セルギエウナ、」と彼は顫聲で言ひながら兩手をしつかと握り占めた。「僕はあなたを永久に變らず愛します。あなた以外の誰をも愛しません。僕はこのことをあなたに話して、僕に對するあなたの御意見をお聞きしたい、あなたの御手を求めたいと思ひました。僕は金持でもなく、どんな犠牲をも避けはいたしません。……返事をして下さらないんですか？　僕を信じて下さらないんですか？

僕が輕はずみなことを言つてると思つてらつしやるんですか？　が、この二三日のことを思ひ出して下さい！　たしかにずつと前からあなたは他の凡てのことが――解りましたが、他の凡てのことが消えて跡かたも殘つてゐないことを御存知の筈ですよ。僕を見て下さい。一言答へて下さい……僕はあなたを……あなたを愛します……僕を信じて下さい！」

カテイアは艶やかしい眞面目な顏色でアーカデイをちらと見やつた。そしてかなりの間躊躇した後、かすかな微笑を浮べて言つた。

「ええ。」

アーカデイは石の腰掛から飛び上つた。「ええですつて！　ええとおつしやつたんですね、カテリナ・セルギエウナ！　どういふ意味ですか？　僕があなたを愛するといふこと、あなたが僕を信ずるといふこと、それだけの意味ですか？　それとも……それとも……これ以上僕には言へない……」

「ええ。」カテイアは同じことを繰り返した。今度はその意味が彼に解つた。彼は彼女の大きな美しい手を掴み、喜びのために呼吸を切らしながら、それを自分の胸に押し當てた。彼は立ち止つてゐるのも漸くの思ひだつた。そして唯「カテイア、カテイア……」とだけ繰り返してゐた。その間にカテイアは罪のない涙を滂して、その涙の中で優しく微笑した。戀人の眼の中にかうした涙を見た者でなければ、羞恥と感謝とで氣を失ふばかりになつて人間が地上に於て如何に幸福であり得るものか、理解し得ないのである。

翌日、朝早くアンナ・セルギエヴナはバザロフを自分の居間に呼び寄せた。そして作り笑ひをしながら彼に折り疊まれた一枚の書簡紙を手渡した。それはアーカデイからで、妹に結婚の申込をしたのだつた。

バザロフは素早くその手紙を通讀した。彼は忽ちに胸に燃え立つた嫌惡の感情を示すまいとして漸く自分を制した。

「こんなことになつたか。」と彼は言つた。「それにあなたはつい昨日まで彼がカテリナ・セルギエウナを兄妹として愛してゐると思つてゐらしたんですね。かうなると、どうなさるおつもりです？」

「どうしたらいいでせう？」とアンナ・セルギエウナは矢張り微笑みながら訊いた。

「うん、僕は思ひますよ、」バザロフは今愉快では決してない何かを感じてゐたし、且つ彼女に比すれば笑はない質の人間ではあつたけれど、同じやうに微笑みながら答へた。「若い者を祝つておやりになる必要がありますね、どの點から見ても結構な夫婦ですよ。キルサノフの位置も先づよし、それに一人息子で、親父は好々爺だから、故障を言ふこともありますまい。」

オディンツォーフ夫人は部屋を行つたり來たりしてゐた。顏色が赤くなつたり青くなつたりした。

「さうお考へですか。では私は差し支へないんですから……私はカティアのために喜びます……アーカディ・ニコライッチのためにも。無論私はあの人のお父さんの御返事を待ちませう。あの人をやるつもりです。けれど昨日私たち二人が老人だとお話したのが旨く當りましたわね……どうして私これに氣がつかなかつたらう？　喫驚してしまひますわ！」

かう言つてアンナ・セルギエウナは又笑つた。そして忽ち顏を反けてしまつた。

「若い者は恐ろしく賢くなりました。」とバザロフは言つて自分も笑つた。「さやうなら、」と彼は暫く沈默してゐて後に言つた。「この事件を最も滿足すべき結論に導いて下さるやうに希望いたします。僕は遙かにそれを喜びませう。」

オディンツォーフ夫人は直ぐに彼に向つた。

「お立ちになるおつもり？　今度は何故お滯在なさらないんですか？　逗留なさいまし……あなたとお話するのは面白い……丁度崖の上を歩いてるやうで、初めは躊躇するのを覺えますが、進むに從つて元氣が出て參りますわ。逗留してゐらつしゃいまし。」

「有りがたう、アンナ・セルギエウナ。それに僕の會話の手腕を賞めて下すつたんですね。然し、僕は

自分の領域でない場所に餘り長くぐづついてゐたと思ひます。飛魚は空中でも暫くは身を保つことが出來ますが、直きに又水の中にもぐり込まなきやなりません。だから僕自身の世界で仕事をするのを許して下さい。」

オディンツォーフ夫人はバザロフを眺めた。彼の青い顏は苦笑で引き釣つてゐた。

「この人は私に戀した！」と彼女は考へた。そして彼女は彼を哀れに感じ、同情の籠つた手を差し出した。

けれども彼は亦彼女の氣持を了解した。

「いや、」と彼は言つた。「僕は哀れな者です。が、餘り慈悲を受けたことはありません。さやうなら。御機嫌よう。」

「これがお目にかかる最後ぢやございませんでせうね。」アンナ・セルギエウナは無意識に身振りをして言つた。

「どんなことがあらうとも、又お目にかかりませう！」

バザロフは答へて御辭儀をして部屋を出て行つた。

「ぢや君は巣を作らうと思つてるんだね？」と、その日バザロフはアーカディに、床に屈んで荷造り

をしながら言つた。「うん、それは何よりだ。然しあんなに嘘を言ふ必要もなかつたらうにな。僕は君から全く別の方面の何かを期待してゐた。けれども恐らくそれは君自身を喫驚させただらうが。」

「君と別れた時には全くこんなことにならうとは思つてゐなかつたんだ。」とアーカデイは答へた。「然し君も何故、何よりだなんて言つて、僕が君の結婚觀を知らないもののやうに嘘を言ふんだらう？」

「ああ君、」とバザロフは言つた。「何を言ふんだ！　君は僕が何をしてるか解るだらう。箱の中に空虛があるやうだ、僕はその空虛に乾草を詰めてゐる。吾々の生活の箱も正にさうさ。空虛のままにして置くよりも何かを詰めやうとしてゐる。どうか腹を立てないでくれ、勿論君は覺えてるだらう、僕が始終カテリナ・ニコラエウナに就いて抱いてゐた意見を。若い婦人の多くは單に溜息を賢くすることが出來るといふ理由で賢いと言はれてゐる。が、君のカテリナは自分自身を持つてゐるよ。實際君なんかあの親指で抑へつけられてしまふだらう――屹度さ。尤もさうあるべきことではあるがね。彼は箱の蓋を閉めて床から立ち上つた。「さあ改めて言ふ、さやうならだ。お互ひに欺き合つても詰らないからね。――別れる方がいいんだ。そのことは君自身も氣付いてるだらう。……君は旨くやつたよ。君は吾々の苦い亂暴な淋しい生存には適さぬやうに出來てるんだ。君には突撃がなく憎惡がない。けれども青春の勇氣と熖とがある。君のやうな人間、君のやうな紳士は洗錬された服從か洗錬された憤

怒以上に出ない。下らないことさ。君等は戰はうとはしない。――その癖自分では勇氣ある連中と思つてるんだが――僕等は戰はうと思ふ。さうだ！　吾々の塵埃は君の眼にも飛び込むだらうし吾々の泥は君にもはねかかるだらう。が、君は吾々の水平線には上らないのだ。君は無意識に君自身を讃美してる、君自身を欺かうとしてる。ところが吾々にはそれが溜らない、――吾々はもつと違つた何物かを欲してるんだ！　吾々は他の人々を打ち碎かうとしてるんだ！　君は立派な人間さ。けれども甘い、のんきな氣取り屋で、僕の祖父が好きな言草ではないが、ヴオラ、ツウだよ。」

「君は永久に僕と別れる氣かい、イエフゲニイ、」とアーカデイは悲しさうに言つた。「僕に言ふことはそれだけなのか？」

バザロフは頭のうしろを搔いて、「さうだ、アーカデイ。さうだよ。君に言ふことは他にもある。がそれは言ひたくない。何故つてそいつはセンチメンタリズムだからね、――つまり不快だからね。それで君は出來るだけ早く結婚して、巢を作り、滿足するだけ子供を儲けることさ。君や僕よりももつといい時代に子供は生れるんだ。――ああ！　馬の用意が出來たらしいな。時間が來た！　もう皆に暇乞ひはしたし……何だい？　抱擁か？」

アーカデイは自分のこれまでの指導者であり友達であつた男の首に飛びついた。そして涙が眼から

流れた。

「それも若いからだ!」とバザロフは冷やかに言つた。「然し僕はカテリナ・セルギエウナに望みをかけてゐる。直ぐに彼女が君を慰めるやうになるだらうよ! さようなら、君。」

彼はかう言つた時もう馬車に乘つてゐた。そして厩の屋根に並んでとまつてゐる雌雄の鳥を指して附け加へた。「あれは君たちのためだ! あれに從ひ給へ。」

「その意味は?」アーカディは訊いた。

「え? 君はそんなに博物學に暗いかね、それとも鳥は最も尊敬すべき家族的鳥類だつてことを忘れたのかね? 君たちへの手本だ!……さよなら!」

馬車は軌つてごとごとと走り去つた。

バザロフの言葉は本當だつた。その晩カテイアと話してゐる間に、アーカデイは全くこれまでの指導者のことを忘れてしまつた。彼は既に彼女の指導に從ひ始めたのだつた。カテイアはそれに氣がついても驚きはしなかつた。彼はその翌日マリーノへ行つてニコライ・ペトロウイツチに會ふことになつてゐた。アンナ・セルギエウナは若い者を束縛しやうとはしないで、ただ、禮儀上から餘り永く彼等を二人きりにはさせなかつた。彼女は寛大にして公爵夫人に彼等の邪魔をさせないやうにした。公爵

夫人はこの結婚申込を聞いて恐ろしい狂氣じみた狀態になつてゐた。アンナ・セルギエウナは初め、彼等の幸福が寧ろ彼女自身に辛い思ひとなりはしないかと虞れてゐたが、それは全く反對の結果になつた。二人を見ることが辛くないばかりでなく却つて彼女に興味を感ぜしめ、遂には彼女の心を和らげて呉れた。アンナ・セルギエウナはこれに對して喜びと悲しみとを同時に感じた。「バザロフの言つたのは本當だつた、」と彼女は考へた。「あれは好奇心だつた、好奇心以外の何物でもなかつた。氣輕な戀そして利己主義……」

「子供さん、どう思ひます、戀は純然たる想像上の感情ですか?」と彼女は高い聲で叫んだ。

然しカテイアにしてもアーカデイにしても彼女の言葉を理解しさへしなかつた。彼等は彼女の前ではおどおどしてゐた。一寸耳にした會話の一片にも彼等に心を惱ました。だがアンナ・セルギエウナは直ぐに彼等の心を落ちつかせた。そしてそれは彼女にとつて困難なことではなかつた。――彼女は彼女自身の心を落ちつけてゐたのだつた。

二十七

バザロフの老父母は息子が全く思ひ掛けなくも歸つて來たので一層喜んだ。アリナ・ウラシユウナ

は非常に興奮して家中をあちこちと驅けずり廻つてゐたので、ワシリイ・イワノウイッチは彼女のことを雌の鷓鴣のやうだと言つた。彼女の縮んだ上着の短い尾は、實際、彼女に何處か鳥らしい風采を與へた。彼自身は唸つたり、煙管の琥珀色の吸口を噛んだり、指で頭を掴んで、それがわかるかどうかを試みるやうな風に頭を振り廻して見たりするのみだつた。

「六週間たつぷりのつもりで歸つて來ました。」とバザロフは言つた。「僕は仕事をしやうと思ふんですから、今度は邪魔しないで下さい。」

「邪魔だと言ふのなら、私の顏はすつかり忘れてしまつていいよ！」とワシリイ・イワノウイッチは答へた。

彼は約束を守つた。息子を前のやうに自分の書齋に入れてから、彼は殆んど姿を隱し、妻にも餘計な優しさを示さないやうにさせた。彼は彼女に言つた「エニユーシャが初めて來た時には、私等が少しうるさくしたんだよ。今度はもつと氣をつけなきやいけんな。」

アリナ・ウラシエウナは夫に同意した。然し彼女は只食事の時だけ息子に會つたので、それは僅かの償ひだつた。そして今では彼に話し掛けるのをひどく恐れてゐた。

「エニユシエンカ、」と時に彼女は言ふのだつた、――そして彼が周圍を見る間もなく、いらいらと編

物袋の總をいぢりながら呟くのだ、

「もういいんだよ、いいんだよ。私は一寸――」

さうして置いて彼女はワシリイ・イワノウイッチの處へ行つて頰に手を當てながら相談するのだつた。

「ねえ、今日の晝飯に、――玉蔥の汁と甜菜の汁と、エニユーシャはどちらを好くでせうね？おわかりになりませんか？」

「でも何故あれに尋ねないんだい？」

「でも、私をうるさく思ふでせうから！」

然しバザロフは自分で閉ぢ籠めるのを間もなく止してしまつた。仕事の熱が消えて、物憂い倦怠、或は漠然とした不安に囚はれた。不思議な退屈さが彼のあらゆる動作に現れ始めた。そのしつかりした強い歩き振りまでが變つて、一人の散歩を止し、人のゐる處を求めるやうになつた。彼は客間で茶を飲んだりワシリイ・イワノウイッチと一緒に菜園をぶらつきながら默つて彼と一緒に煙草を喫つたりした。一度は敎父アレキセイのことを訊いたことさへあつた。ワシリイ・イワノウイッチは初めはこの變化を喜んだが、その喜びは長續きしなかつた。

「エニューシャは心を壞してゐる。」と彼はこつそり妻に囁いた。「あれが不滿に思つてるとか怒つてるとか言ふのぢやない、――それなら何でもないのさ。あれはみじめで悲しみに充たされてる――それや恐ろしいことだ。何時も默りこくつてゐる。私たちにがみがみ言つて呉れればいいのに。あれはだんだんに痩せて血の氣もなくなつた。」

「どうしませう、どうしませう！」と老いた母は囁いた。「あれの首に護符をかけてやりたいけれど、無論承知しませんでせうね。」

ワシリイ・イワノウイッチは幾度も極く遠慮がちに、仕事のことや健康のことやアーカディのことなどをバザロフに尋ねた。……が、バザロフの返事は氣のない、いゝ加減のものだつた。そして一度は父親が會話をだんだんに或事に導かうとしてゐるのに氣付いて、苛々しく言つた。

「どうしてあなたは僕の周圍を爪先で歩くやうになさるんです？　それは以前のやり方よりも尙惡いことです。」

「うん、うん、どうもしやうと思つてゐたんぢやないよ！」と哀れなワシリイ・イワノウイッチは周章てて言つた。それで彼の外交的な探りも效果がなかつた。彼は或日息子の共鳴を呼び起さうと思つて、農奴解放の近づいたことに關して、時勢の進歩を話し出した。が、バザロフは無頓着に答へた。

「昨日僕が垣根のとこを歩いてゐたら、此處の百姓の子供たちが昔の唄でなく今の流行唄を呶鳴つてゐた。進歩といふのはそんなものです。」

或時バザロフは村に出て、例の嘲弄するやうな調子で或百姓と話してゐた。「さあお前の人生觀を話して呉れないか、兄弟。ロシアの未來の力凡てはお前たちの掌中にある、歷史上の新らしい時期がお前たちの手で始められ――お前たちが吾々の眞の國語と法律とを與へて呉れる、と皆が言つてるぜ。」

百姓は返事をしないか、それとも「成程、やつて見ませう……何故つて、あなた、たしかに……」といふ風なことをやつと言ふだけだつた。

「お前たちの世界といふのを說明して呉れないか。」とバザロフは口を入れた。「三匹の魚の上に載つてるといふあの世界かい？」

「それや旦那、三匹の魚の上に載つてるのは地球でがす。」百姓はうやうやしい單純な唄の文句のやうな調子で優しく言ふのだつた。「俺等の、つまり世界の上に神樣の御心が働いてをりますのでがす。それであなた方は俺等の旦那になつて御座らつしやるんだから、神樣の掟はきびしい程、百姓のためには結構なことでがす。」

或日バザロフはこんな答を默つて聽いてゐた後に、輕蔑的に肩を縮めて立ち去つた。百姓がゆつく

りと家の方へ歸つてゐると、何を話してゐたんだ？」と中年の澁面をした今一人の百姓が訊いた。この男は遠く自分の戸口から、彼とバザロフとの話すのを見てゐたのだつたつた。「年貢の滯りかな？」

「年貢の滯り、いんやさうぢやねえ。」と初めの百姓は答へたが、その聲には先刻のうやうやしい唄ふやうな調子は跡形もなく、却つて嘲るやうな粗暴さがあつた。「彼奴は何や彼やと喋りをつた。舌を延ばさうといふ寸法だ。旦那にや違いねえが、何を知つとるかの？」

「何にも知つとるわけがねえよ！」今一人の方はかう答へた。二人は帽子を後に引き帶を下げて、自分たちの仕事や貧乏に就いて話し續けた。輕蔑的に肩を縮めたバザロフ、パヴエル・ペトロウイツチと議論した時に自慢したのが本當だとすると百姓たちと話す方法を知つてゐる筈のバザロフ、そのバザロフは唯自己尊敬のみしてゐて、百姓たちの眼に自分が道化者のやうなものに見られてゐることに全然氣もつかなかつたのである。

が、彼は漸く自分に適した仕事を見つけた。或日ワシリイ・イワノウイツチは彼の前で負傷した百姓の足に繃帶してゐた。然し老人の手は顫へてゐた。で、繃帶を旨くすることが出來なかつた。そこで息子は手傳つた。それから時々この仕事を手傳ひ出したが、然し同時に彼は彼自身のすすめる治療法をも、それを急いで採用する父親をも常に冷笑してゐた。バザロフの嘲弄は少しもワシリイ・イワ

ノウイッチの心を亂しはしなかつた。それは却つて彼の慰籍になつた。彼は二本の指で寬衣の腹のところを抑へ、パイプを口にしながら嬉しさうにバザロフの言葉に耳を傾けるのが常だつた。そして彼の毒舌が烈しくなる程上機嫌の父親は益々興がつて、黑い齒を悉く見せて笑ふのだつた。彼は息子の言葉を、時にはそのまま、時には本來の意味を拔いて口眞似することさへあつた。例へば彼は「第一重要の問題ではない！」といふ文句を、節もなく理由もなく數日間繰り返してゐた。それは單に息子が、彼が朝の禮拜に行つてることを聞いてこんな文句を言つたといふだけの譯だつた。

「有りがたい！」彼は憂欝に打ち勝つたよ！」と彼は妻に囁いた。「今日あれがどんな風にしたか、それや素晴らしいもんだ！」

それればかりではなく、かうした助手を持つてゐると考へると、彼は夢中になる程嬉しくて心は誇りで一杯になつた。

「さうだ、さうだ、」と彼は男の外套を着て角狀の帽子を冠つた何處かの百姓女に、グラアル油一瓶と白臈藥一箱とを手渡しながら言つた。「倅が逗留してゐる間はお前さんたちは有りがたいと思はなきやなりませんぞ。一番科學的な、一番新しいやり方で直して貰へるんぢやから。わかつたかな？フランスの天子のナポレオンにだつて、これよりもよい醫者はないのぢや。」

身體中が何だか變なそうな氣がすると訴へて來たその百姓女は（然しかういふ言葉の正しい意味は彼女自身でも説明出來なかつた）ただ頭を丁寧に下げて內懷中をさぐつてゐるきりだつた。そこには四個の卵が手拭の端に結びつけてあつた。

バザロフは或時、反物の行商人の齒を拔くことさへした。その齒は普通の種類のものであつたが、ワシリイ・イワノウイッチは珍品として保存し、それを敎父アレキセイに見せる時には絶えずかう繰り返した。「まあ御覽なさい。何といふ齒根でせう！　イエフゲニイの力がどんなに強いか！　行商人は空に飛び上つたやうでした。それが樫の木だつたにしろ根こぎになつたでせうな！」

「至極頼もしいことですな！」敎父アレキセイは何と返事をしていいか、どうしてこの有頂天になつてゐる老人から免れたらいいか解らないので、やつとかう言つた。

或日一人の百姓が隣村から窒扶斯にかかつてゐる弟をワシリイ・イワノウイッチの處へ連れて來た。藁床に寢かせられたこの不幸な男は死にかけて、身體は黑い斑點に一杯包まれ大分前から意識を失つてゐた。ワシリイ・イワノウイッチは誰も今少し早く醫者の診療を求めるやうにしなかつたことを殘念だと言つて、もう恢復の見込みがないと宣告した。そしてその通りこの百姓は再び家に歸らない內荷車の中で死んだ。

その事があつてから三日目に、バザロフは父親の部屋に這入つて來て腐蝕劑はないかと訊いた。

「あるよ。何に使ふんだね？」

「少し入るんで、その……傷口を燒くためです。」

「誰の？」

「僕自身のです。」

「え、お前自身の？　どうしてだ？どんな傷口だ？　何處にある？」

「此處ですよ、指の上。今日僕は、例の窒扶斯の百姓が來ましたね、あの村へ行つたんです。何か理由があるんでせうが皆があの屍體を解剖しやうとしてるところでした。僕は解剖の實驗は久しくやつておきませんでしたから――」

「それで？」

「それで土地の醫者に賴んで、僕がそいつを解剖したんです。」

ワシリイ・イワノウイッチは忽ち顏色を變へて、物をも言はず、書齋に驅けつけて直ぐ片手に腐蝕劑を持つて歸つて來た。バザロフはそれを受け取つて行かうとした。

「後生だから」とワシリイ・イワノウイッチは言つた。「それは私にさせてくれ、」

バザロフは微笑した。「何て熱心なお醫者さんだらう！」

「お願ひだ、笑はないでお呉れ。指を見せて。傷口は大きくない。痛いかな？」

「もつと押して下さい。何でもないから。」

ワシリイ・イワノウイツチは手を止めた。「お前はどう思ふ、イエフゲニイ、烙鐵で燒く方がよくはあるまいか？」

「それはもつと早くでなきや。腐蝕劑でも今となつてはもう駄目です。感染したのだとすると手おくれですね。」

「どうして……手おくれ……」ワシリイ・イワノウイツチは殆んど言葉もはつきり言へなかつた。

「さう考へずにはゐられませんよ！　四時間以上も經つてるんだから。」

ワシリイ・イワノウイツチは傷口を少し餘計に燒いた。

「だが、土地の醫者は腐蝕劑を少しも持つてゐなかつたのかい？」

「ええ。」

「まあ、どうしたことだ？　醫者ともあらうものが、こんな必要品を持つてゐないなんてな！」

「あの醫者の抱針こそ見物でしたよ。」バザロフは部屋を出掛けにかう言つた。

その晩は晩くまで、そして翌日は終日、ワシリイ・イワノウイツチは息子の部屋に行ける口實をどんなことでも拵へた。そして、傷口のことは話さなかつたけれども――否、寧ろ何よりもそれに關係のないやうな話題に就いて話さうとさへ努めてゐたが――しつつこく息子の顏を覗き込んで、遂にはバザロフが我慢がし切れなくなり、出て行つて呉れるやうにと嚇してしまつた位に、おどおどとその容子を見守つてゐた。ワシリイ・イワノウイツチは彼を惱まさないやうにする約束をした。殊にアリナ・ウラシエヴナが、勿論秘密にしてゐるにも係はらず、どうして息子が眠らなかつたか、何が息子の身の上に起つたか、などと言つて彼を惱まし始めてゐたからだつた。二日間程、そつと注意して見てゐる息子の容子が望ましくなかつたけれど、兎に角、彼は自分を抑へてゐた。……が、三日目の晩食の時、もう彼は辛抱し切れなくなつた。バザロフはうなだれたまま、一皿にも手をつけなかつた。

「何故食べない、イエフゲニイ？」彼は極く氣輕な調子で訊いた。「この料理は仲々旨くできてると思ふよ。」

「何にも食べたくないから食べないんです。」

「食慾がないかね？　頭はどうだ？」と彼はためらひがちに附け加へた。「頭痛がするんぢやないか？」

「ええ、無論、頭痛がします。」

アリナ・ウラシエヴナは立ち上つて喫驚してゐた。

「まあ怒らないでくれ、イエフゲニイ、」とワシリイ・イワノウイツチは續けた。「脈を見せてくれないか？」

バザロフは立ち上つた。「脈なんか見ないでもわかつてゐます。熱があるんですよ。」

「寒氣でもするか？」

「ええ、寒氣もあります。行つて眠みませうよ。菩提樹の花を煎じて下さい。風邪を引いたに相違ないから。」

「たしかにさうだ。昨夜お前は咳をしてゐたからな。」アリナ・ウラシエヴナは言つた。

「風邪を引いたんだ。」

バザロフは同じことを繰り返して出て行つた。

アリナ・ウラシエヴナは菩提樹の花を煎じるのに忙がしい思ひをした。ワシリイ・イワノウイツチは隣りの部屋に這入つて、深い絶望の裡に髮をつかんでゐた。

バザロフはその日それきり起きて來なかつた。そして一夜中を、重苦しい半意識狀態で過した。午前四時、彼は漸く眼を開いて、自分の傍に屈んでゐる父親の青白い顏を、ラムプの光りの中に認め、

出て行つて吳れるやうにと言つた。老人は濟まないと詫びながら、出て行つたが、又爪先立ちでそつと引き返し、戶棚の陰に半ば隱れながら、しつこく息子の容子を瞶めてゐた。アリナ・ウラシエヴナも寢床へ行かず、書齋の扉を少し開け放したままにして、エニユーシヤがどんな風に呼吸をしてるかを聞きに、又ワシリイ・イワノウイツチを見にやつて來た。彼女には彼の動かない屈んだ背中しか見えなかつたが、それでも多少の氣休めになるのだつた。朝になつてバザロフは起きやうとした。彼は眩暈を覺えて、鼻からは出血し始めた。で、彼は又橫になつた。ワシリイ・イワノウイツチは默つてその容子を見てゐた。アリナ・ウラシエヴナは彼のところへ行つて氣分はどうかと訊いた。

「少しはいい。」と答へたきり彼は壁の方に向いてしまつた。ワシリイ・イワノウイツチは兩手で妻に手眞似をした。彼女は泣くまいとして唇を嚙みしめながら出て行つた。家全體が急に暗くなつたやうで、皆の顏に陰欝が漂つてゐた。不思議な靜けさがそこにはあつた。鋭い聲の雄鷄は、何故そんな取扱ひを受けなければならないかも知らずに、庭から村へと移されてしまつた。バザロフは矢張り寢たまま壁の方を向いてゐた。ワシリイ・イワノウイツチはいろんな質問をしようと試みたが、それはバザロフを疲れさせた。で、老人は腕椅子に身じろぎもせず腰を卸して、ただ時々指の關節を鳴らすだけだつた。彼は數分の間庭に出て彫像のやうに立つた。恰も口にすることの出來ない困惑に壓倒され

てゐるもののやうだつた。（驚愕の表情はその間も決して去らなかつた。）そして又息子のところに引き返して妻の質問を避けやうとしてゐた。彼女はたうとう彼の腕をつかみ、熱心に、殆んど威嚇するやうな調子で「あれは何處が惡いのです？」と言つた。と、彼は我に返つて、返事をする代りに無理に微笑して見せやうとした。然し彼自身でも恐ろしくなつたことに、微笑は出來ないで、その代りに大笑ひの發作とでも言ふべきものに囚はれた自分自身を見出した。

彼は夜明けになつて醫者を迎へにやつた。彼はその事を息子に告げなければならないと思つた。彼が立腹するに相違ないと氣づかはれた。バザロフは突然長椅子の上で轉がりながら、澱んだ固定した瞳を父に注ぎながら飲物がほしいと云つた。

ワシリイ・イワノウイッチは水を少し與へた。その時額に觸れて見た。それは火のやうに熱かつた。

「お父さん、」とバザロフは、ゆつくりした眠さうな聲で言ひ出した。「僕は惡くなつて行きます。感染したんです。近々の内に僕を葬つて下さらなきやなりますまい。」

ワシリイ・イワノウィッチは足を狙ひ打ちにされたやうにうしろによろめいた。

「イエフゲニイ！」彼は口籠つた。「何といふのだ！……神よ、慈悲をたれ給へ！　何、お前は風邪を引いたんだよ！」

「いや！」バザロフは遮つた。「醫者といふものはそんなことを言ふのを許されませんよ。感染したといふあらゆる徵候があるんです。あなたにも解つてゐる。」

「何處に徵候がある……感染したといふ……イエフゲニイ？　……ああ、どうしやう！」

「これは何です？」と、バザロフはシャツの袖をめくり、腕に赤い不吉な斑點が生じてゐるのを父に見せて言つた。

ワシリイ・イワノウイッチは恐ろしさに顏が戰いてゐた。

「たとひ、」と漸く彼は言つた。「たとひ……何か、そんな風の……感染したやうな何か……」

「膿血症ですよ。」息子は口を入れて。

「うん、うん……傳染性の何か……」

「膿血症です。」バザロフは鋭くはつきりと繰り返した。「あなたは本をお忘れになりましたか！」

「うん、――どうでもいい……どちらにしても私が直すから！」

「さあ、それはいい加減なことです。然しそれは肝要なことぢやない。僕はこんなに早く死なうとは思つてゐなかつた。本當のことを言へば、それは實に不愉快なことですね。あなたもお母さんも、强い宗敎的信念を利用なさらなきや いけません。今がそれを試す時ですよ。」と言つて彼は少し水を飲み

干した。

「僕は一つお願ひしたいことがあるんです、……頭が言ふことを聞くうちにです。明日か明後日はもう駄目になりますからね。今でも自分の思つてることをはつきり言ひ現してるかどうかは解らない。ぢつと寢てゐると、赤犬が始終僕の周圍を駈け廻つてゐる、あなたは僕が山鶉ででもあるやうに、その犬を僕にけしかけてゐる。まるで醉つぱらつてるやうです。解りますか？」

「たしかに、イエフゲニイ、はつきりお前のいふことは解るよ。」

「尚結構です。醫者を迎へにやつたとおつしやいましたね。それはあなた御自身を慰めるためになすつたこと……僕をも慰めて下さい、使をやつて下さい……」

「アーカディ・ニコライッチの處へか？」と老人は言つた。

「アーカディ・ニコライッチつて？」とバザロフは解らなかつたやうに言つた。「あ、さうか！　あの仔鷄か！　いや、彼奴はうつちやつといて下さい。彼奴は今では烏になつちまひました。喫驚なさるな、まだ譫言ぢやありませんよ。使はオディンツオーフ夫人、アンナ・セルギエウナの處へです。財産家の立派な婦人です、御存知ですか？（ワシリイ・イワノウイッチは頷いた。）イエフゲニイ・バザロフが宜しく言つた、今死にかけてゐると傳へて下さい。よござんすか？」

「よろしい、承知したよ……だが、お前が死ぬなんてことがあるだらうか、イエフゲニイ！……まあ考へて御覽！　それぢや何處に神樣の審判があるだらう？」

「そんなことは僕には解りません。兎に角、使だけやつて下さい。」

「直ぐにやらうよ。私が自分で手紙を書かう。」

「いいえ、何故です？　僕が宜しく言つたといふのです。それ以上何も言ふ必要は入りません。さあ、僕は犬のところへ歸らう。妙だな！　死に對して考を集中したいと思つても何にも出て來ない。斑點のやうなものが見える……それきりだ。」

彼は苦しさうに又壁の方に向いた。その間にワシリイ・イワノウイッチは書齋を出て妻の寢室まで漸くの骨折で辿り着き、ただ聖像の前に跪きながら頭を垂れるばかりだつた。

「お祈り、アリナ。皆のためにお祈り！」と彼は呻いた。「息子が死にかけてゐるんだ。」

醫者が、腐蝕劑を持つてゐなかつた、その田舍の醫者が來て、病人を見、治療法を根氣よく續けるやうにと勸めた。さうすれば回復の場合がないでもないと言つた。

「あなたは僕のやうな狀態で極樂へ行かなかつた人間を見たことが一度でもおありですか？」とバザロフは尋ねて、不意に長椅子の傍の重い卓子の脚を掴み、それを廻して押しやつた。「力がある、力が

ある。」と彼は呟いた。「凡てがまだ殘つてゐる。これに俺は死ななきやならん！　老人は少くとも生命から見離される時がある。然し俺は……よし、行つて死の反證をしよう。死がお前を反證する、そしてそれきりだ！　其處で泣いてるのは誰？」少し間を置いて彼は附け加へた。――「お母さんか？　可哀さうに！　これからは誰に旨い甜菜の汁を食べさせやう？　あなたも、ワシリイ・イワノウイッチ、啜り泣いてゐますね。おや、基督敎があなたに役に立たないのなら哲學者にお成んなさい。ストア派でも何でもいい。何故哲學者だつたことを、あなたは誇りとなさらなかつたんです？」

「私を哲學者に！」ワシリイ・イワノウイッチは泣いた。淚が惜氣もなく頰を傳つて流れた。

バザロフは刻々に惡くなつた。病氣の進行は外科的害毒の常として急速だつた。彼はまだ意識を失つてはゐなかつた。そして自分に言はれる事は理解した。彼はまだ悶搔いてゐた。「正氣を失ひたくない。」と彼は拳を握り占めて呟いた。「一切が何といふ下らないことだらう！」そして又直ぐに嗚咽つた。「八から十を引いて見ろ、何が殘るか？」

ワシリイ・イワノウイッチは憑かれた者のやうに駈け廻つて、あれこれと治療法を言ひ出したが、結局、息子の足を包んでやるのが落ちだつた。「濕布をしよう……吐瀉劑を……胃に芥子を塗らう……出

血法がいいか。」彼は漸くの思ひでこんなことを呟くのだつた。彼が居殘つて呉れるやうに賴んだその醫者は、彼の意見に贊成して、レモン水を飮ませるやうに命じた。そして自分自身のためには、煙草と、そして「暖くて力のつくもの」――つまりブランデーとをくれと言つた。アリナ・ウラシエウナは扉近くの低い腰掛に坐つて、時々祈禱に出掛けるきりだつた。四五日前に、鏡が手から辷り落ちて壞れたことがあつたのを、彼女は常に不吉の前兆だと考へてゐた。アンフイスシュカも彼女に何一つ言ふことが出來なかつた。テイモフエイッチはオデインッオーフ夫人のところへ行つてゐた。

その夜はバザロフにとつて惡く過ぎた。……彼は高熱に苦しめられてゐた。曉方になつて少しは輕くなつた。彼はアリナ・ウラシエウナに髮を梳つて呉れるやうにと賴んで、彼女の手に接吻し、茶を二杯飮んだ。ワシリイ・イワノウイッチは少し元氣づいた。

「ありがたい！　峠が來てる。峠が近い！」と彼は叫び續けた。

「そこを考へて御覽なさい！」とバザロフは言つた。「言葉は調法だ！　それを見付け、峠と言つて安心してゐる。人間が言葉を如何に信ずるか、驚くべきものだ。例へば、馬鹿だと言はれたなら、毆られなくとも怒るのだ。賢い奴だと言はれたら、金を拂はないで行つても喜ぶのだ。」

バザロフのこの短い言葉は、昔の反抗を思ひ出させたので、ワシリイ・イワノウイッチを大いに動

かした。

「ブラヴォ！　よく言つた、よしよし！」と彼は拍手するばかりに叫んだ。

　バザロフは物憂げに微笑した。

「それならどうお考へなんです。峠が過ぎたんですか、近づいたんですか？」

「お前は良くなつた、さう私は見るんだよ、それで嬉しいのさ。」ワシリイ・イワノウイッチは答へた。

「成程、それば結構です。喜ぶことは悪くない。で、あの人には、覺えてゐますか？　使をやつて下すつたでせうね」

「たしかにやつたよ。」

　快方に赴くのは長續きしなかつた。病氣はその攻撃力を復活して來た。ワシリイ・イワノウイッチはバザロフの傍に坐つてゐた。老人は何か特別の惱ましさに苦しめられてゐるらしかつた。彼は幾度も口を開かうとまでして——而もそれが出來なかつた。

「イエフゲニイ！」と彼は遂に言つた。「伜、おい、伜！」

　この言ひ慣れない呼び方はバザロフに效果を及ぼした。彼は少し頭を擡げた。そして明らかに、彼に蔽ひかかる忘却の重荷と戰はうとしながら、はつきり口を利いた。

「何ですか、お父さん？」

「イエフゲニイ、」とワシリイ・イワノウイッチは言つてバザロフの前に跪いたが、息子は眼を閉ぢてゐたので、それは見えなかつた。「イエフゲニイ、お前はもう良くなつたよ。今にすつかり良くなるだらう。だがこの時を利用して、お母さんと私を安心させてくれ、基督教徒の義務をつくしてくれ！　こんなことをお前に言ふのは私にとつてどういふ意味か、それは恐ろしいことだ。だが、もつと恐ろしいことは……永久にイエフゲニイ、少し考へて御覽、その……」

　老人の聲は途絶えた。息子の眼は矢張り閉ぢてゐたが、その顏には奇妙な表情の閃くのが見えた。

「厭とは申しませんよ、それがあなた方をいくらか安心させることなら。」と遂にバザロフは言つた。

「然し急ぐ必要もないやうに思ひます。あなた御自身で僕がよくなるとおつしやつた。」

「おおさうだよ、イエフゲニイ、たしかによくなる。然し皆神樣の手にあることだから、人間にはどうとも言へぬ。それで義務をつくすのは……」

「いや、もう少し僕は待ちませう。」とバザロフは遮つた。「僕は峠の來たといふあなたの御考に同意します。それがたとひ間違つてゐるとしても、うむ！　御存知の通り無意識の人間にも聖餐を供しますよ。」

「イエフゲニイ、お願ひだ。」
「もう少し待ちませう。それに今は眠りたいんですから、邪魔しないで下さい。」彼は頭を枕に當てた。
　老人は立ち上つて腕椅子に身體を埋め、髯を握りながら、指をくはへ始めた……。
　田舍の荒野では際立つて聞える、あの彈機つきの輕快な馬車の響が、突然彼の耳を打つた。輕い車輪がだんだん近づいて來る。今は馬の嘶聲さへ聞くことが出來た。……ワシリイ・イワノウイッチは飛び上つて小窓に駈け出した。この小さな家の中庭に、馬具を飾つた四頭の馬を先に立てて二人乘の馬車が這入つて來た。どうしたわけかを考へもせずに彼は夢中の喜びを覺えて階段の方に駈け出した。制服の馬丁が馬車の扉を開き、丁度、黑い面紗と黑い外套を着た一人の貴婦人が出やうとしてゐた。
「私はオディンツオーフでございます、」と彼女は言つた、「イエフゲニイ・ワシリイツチはまだ御存命でせうか？　あなたはお父さんでゐらつしやいますか？　私は醫者をつれて參りました。」
「ありがたうございます！」とワシリイ・イワノウイッチは叫んで、彼女の手を掴み取り、それを痙攣的に自分の脣に押し當てた。その間に醫者はアンナ・セルギエウナに導かれて、鹿爪らしく馬車から降りて來た彼は眼鏡を掛けた小男で。ドイツ人らしい風貌をしてゐた。

「まだ生きてをります、イエフゲニイはまだ生きてをります。かうなつたら助かるでございませう！家内、家内！……天使がお出でになつたぞ……」
「何でございますか。」客間から老婦人が口吃りながら走り出た。そして何のこととも解らず、廊下でアンナ・セルギウナの足下に伏し、狂人のやうに彼女の服に接吻し出した。
「何をなさるんでせう！」とアンナ・セルギユヴナは拒んだ。けれどもアリナ・ウラシエウナは彼女に注意しなかつた。ワシリイ・イワノウイッチもその間にただ「天使！　天使！」と繰り返してゐるきりだつた。
「wo ist Der Kranke？（病人は何處にゐられます？）」と醫者は遂に我慢し切れないで言つた。
　ワシリイ・イワノウイッチは彼に言つた。「此處です、此處です、こちらへ入らして下さい、大先生。」と彼は自分の昔を思ひながら附け加へた。
「はあ！」とドイツ人は澁面作つて苦笑しながら、はつきり言つた。
　ワシリイ・イワノウイッチは彼を書齋に招じ入れた。「アンナ・セルギエウナ・オディンツオーフ夫人からのお醫者だよ。」と彼は息子の耳許に屈んで言つた。「夫人も此處にゐらつしやるよ。」
　バザロフは不意に眼を開いた。「何ですつて？」

「アンナ・セルギエヴナが入らしたんだよ。それに、お前のために、この方、お醫者を連れて來られた。」

バザロフは周圍を見廻した。「夫人が此處にゐらつしやるつて…・お目にかかりたい。」

「今會へるよ、イエフゲニイ。だが始めにお醫者と少し話さなきやならん。シドル・シドリツリ(これはこの地方の醫者の名である)が歸つてからの病氣の經過をすつかり話して、少し相談するとしよう。」

バザロフはドイツ人をちらと見やつた。「うん早く話して下さい、ラテン語だけはいけません。jam moritur(もう駄目)位の意味は解ります。」

Der Herr scheins des Deutschen machtig zu sein(この方はドイツ語もお上手らしいと)この、エスキユラピウス(羅馬の醫神)の新しい弟子はワシリイ・イワノウイッチに話しかけた。

「Ich(私は)…・gabe(與へ)……私はロシア語で話す方がいいですな。」と老人は言つた。

「ああ、成程! それが宜しいでせう……たしかに……」そして相談が始まつた。

半時間の後にアンナ・セルギエヴナはワシリイ・イワノウイッチに案内されて這入つて來た。醫者は際を見て彼女に、患者の回復は迚も見込みがないと囁いた。

彼女はバザロフを眺めた。……そして戸口にぢつと立ち止つた。彼女は、ぼんやりした眼で彼女を瞶めるバザロフの日に燒けた同時に死人のやうな顏に非常に打たれた。彼女はただ驚きを、冷たい、

息詰るやうな驚きを覺えた。彼を自分が本當に愛してゐたなら、そんな風に感じなかつただらうといふ思ひが、不意に彼女の腦裏をかすめた。

「有りがたう、」と彼は苦しさうに言つた。「入らして下さらうとは思ひませんでした。お慈悲ですね。で、お約束したやうに、又お目にかかれました。」

「アンナ・セルギエウナはそれや御親切になすつて下すつた、」とワシリイ・イワノウイッチは言ひ出した…・。

「お父さん、二人きりにして下さい。アンナ・セルギエウナ、今はそれを許して下さるでせう?」

頭を動かして彼は自分の横になつたまま動けない身體といふことを示した。

ワシリイ・イワノウイッチは出て行つた。

「うん、ありがたう、」とバザロフは繰り返した。「これは立派なお振舞です、言はば、君主は死にかけた者を訪問なさるといふところです。」

「イエフゲニイ・ワシリエッチ、私は……」

「ああ、アンナ・セルギエナ、本當のことを話させて下さい。何も彼も終りになりました。僕は車輪の

下にあるやうなものです。今は將來を考へても何もなりやしない。死は古いたはむれですが、誰にも新しく見舞つて來る。それだけなら、僕は恐ろしくない……。然し其處に、無感覺の狀態がやつて來る。それでおしまひです！」彼は力なげに手を振つた。「うん、何を言はなきやならなかつたか……僕はあなたを戀しました。そのことには以前だつて何の意味もありやしない、今だつて同じことです。戀は一の形骸で、既に僕自身の形骸が破壞されてゐる。あなたがどんなに愛らしいか、それを言ふ方がいい！　そして此處にあなたは立つて、そんなに美しく……」

アンナ・セルギエウナは我知らず身顫ひをした。

「氣にかけないで下さい。心配なさいますな……。其處に坐つてゐらつしやい……傍に寄つてはいけませんよ、この病氣はうつりますからね。」

アンナ・セルギエウナは素早く部屋を横切つて、バザロフの寢てゐる長椅子の傍の腕椅子に腰を卸した。

「お偉い！」と彼は呟いた。「ああ、何て近く、何て若く、何て生々として、何て清いんだらう……この部屋の中にあつて！……では、さやうなら！　長生きをなすつて下さい、それが何よりのことです。そしてお若い間に思ひ切つてやつて下さい。御覽の通り、何といふ慘めな狀でせう」蟲が半ば潰されて、而もまだうごめいてゐるのです。それから僕は考へる。僕は實に多くの物を破壞しました、僕は死にたくない、それに何故死なければならないか！　解決すべき問題が澤山ありました。そして僕は巨人でした。而も今、巨人のためのあらゆる問題は、如何に立派に死ぬべきかといふことです。これは誰に對しても同じなんだけれども……氣にしないで下さい、未練なことはしないつもりです。」

バザロフは無言になつた。そして手でコップを探し始めた。アンナ・セルギエウナは飲物を與へたが、手袋を脱がず、呼吸を臆病らしく引いてゐた。

「あなたは僕をお忘れになるでせう。」と彼は又始めた。「死人は生きてゐる者の友ではありません。僕の父は、ロシアが如何なる人間を失ひつつあるかといふことをあなたに話すでせう……下らないことです。けれども老人には逆はないで下さい。玩具はどんなものでも子供を樂しませますからね……。母にも親切にしてやつて下さい。あんな風の人たちは、晝間、蠟燭を點けて探したつて、あなた方の世界には見出せませんよ。僕はロシアのために必要な人間でした……いや、僕はたしかに必要でなかつたのです。では、誰が必要なのか？　靴屋も必要だし、仕立屋も必要だし、屠殺人も……吾々に肉を供給すると……屠殺人も……一寸待つて下さい、話が亂れて來ましたね……其處に森がある……」

バザロフは手を眉に當てた。

アンナ・セルギエウナは彼の上に屈んで「イエフゲニイ、私は此處にゐますよ……」

彼は急に手を振つて身體を擡げた。

「さやうなら、」と彼は不意の力を籠めて言つた。眼は最後の光で輝いてゐた。「さよなら……お聞き下さい……あの時、僕は接吻しなかつたんですよ……消えかかるランプは吹いて、そして消して下さい……」

アンナ・セルギエウナは彼の額に唇を當てた。

「もう澤山です！」彼は呟いて枕に頭を落した。「さあ……眞暗だ……」

アンナ・セルギエウナは靜かに出て行つた。

「ようございますか？」ワシリイ・イワノウイッチは小聲で彼女に訊いた。

「お休みになりました。」と彼女は漸く聞きとれる位の聲で答へた。バザロフは眼を覺ますことがなかつた。夕方になつて全然昏睡狀態に入り、その翌日死んだのだつた。叔父アレキセイが彼に最後の宗教儀式を行つた。彼等が最後の塗油式をして、その聖油が彼の胸に觸れた時、一方の眼が開いた。それは恰も祭服の牧師や、煙の立ち昇る香爐や、聖像の前の燈火などを見てゐるやうだつた。恐怖の戰きに似た或物が死人の引き釣つた顔に現れた。遂に最後の呼吸を引き取つた時に、家中には皆の泣聲

が起つて、ワシリイ・イワノウイッチは狂氣じみた發作に囚はれた。

「俺は謀反すると言ふんだ。」彼は顔を眞赤にし歪めて、何者かを脅すやうに拳を空に振りながら、嗄れた聲で呶鳴り散らした。「だから俺は謀反する、謀反する！」

然しアリナ・ウラシエウナは涙に暮れて、彼の首に縋りつき、そして二人で顔を合したまま倒れた。

「御一緒にね、」とアンフイスシュカは後に女中部屋で話した。「お晝の小羊のやうに、お痛はしい二人はうなだれてお出でだつた……。」

けれども晝の暑さが過ぎ、夕方が來、夜が來る。すると又懐しい隱れ家へ歸る。其處には疲れたもの、重荷を負つた者のために、快い眠りがあるのだつた。

二十八

六ケ月は經過した。眞白な冬が來た。冴へた霜の冷たい靜けさ、厚く積つて音立てる雪、樹々の紅い霜、青い綠玉の空、煙突の上の煙の帶、つと開ける瞬間に戸口から流れ出る蒸氣の息、寒さに打たれた鮮やかな顔、こごえた馬の駈足、——さうしたものと一緒に冬は來た。一月は終りかけて、夕暮の寒さは靜かな空氣の中でも益々烈しく、蒼白い日沒は慌しく消えて行つた。マリーノの家の窓には

赤々と灯が點いてゐた。プロコフイッチは黑のフロックコオトを着、白の手袋を穿め、特別念入りに七人の卓子を用意してゐた。一週程前に、小さな村の教會で、二組の結婚式が靜かに殆んど見物人もなしに擧げられたのだつた。――アーカデイとカテイァ。ニコライ・ペトロウイッチとフェニチカとだつた。そして今日はニコライ・ペトロウイッチが所用あつてモスコウへ行く兄のために訣別の宴を張るのだつた。アンナ・セルギエウナは若い夫婦のために非常に立派な贈物をしてから、式が終ると直〻に此處に來てゐた。

二十八

正三時に皆は卓子に就いた。カテイアも席に坐らせられた。彼と一緒に光つた錦の帽子を冠つた乳母が現れた。パヴエル・ペトロウイツチはカテイアとフェニチカとの間に席を取つた。「夫たち」はめいめいに妻の横に坐つた。これ等の人々は最近になつて變つてゐた。皆前よりも强くなり風采も良くなつた。ただパヴエル・ペトロウイッチだけは前よりも瘦せて、それがその際立つた風貌に餘計に優美な、「トルコの皇帝」のやうな風を添へた。……フェニチカも變つてゐた。彼女は新しい絹の寬衣を着て、髮に巾廣の天鵞絨の髮飾りをつけ、首に金の鎖を捲きながら、自分自身に對しても周圍の凡てに對しても敬意を拂つたやうな詫びるやうな不動の姿勢をして坐つてゐた。そして「御免下さい、皆は私にございませんの。」と言つてゐるやうな微笑を浮べてゐた。彼女ばかりでなく――皆も微笑して

ゐた。皆が詫びるやうに見えた。皆が少し氣拙く、少し悲しく、而も實際は幸福だつた。彼等は無技巧の喜劇のやうなものを申し合して稽古してゐるかのやうに、ユーモアのある注意を籠めて互ひを助け合つてゐた。カテイアは皆の中で一番落ちついてゐた。彼女は安心してゐるやうに周圍を眺めた。ニコライ・ペトロウイッチがもう彼女を非常に愛してゐることはよく見えてゐた。宴の終りに彼は立ち上つて片手にコップを持ち、パヴエル・ペトロウイツチの方を向いた。

「あなたはお立ちになる……あなたはお立ちになりますね、兄さん。」と彼は言ひ出した。「長くはない、たしかに。然し私は述べずにはゐられません……吾々が何を……私がどんなに……吾々がどんなに……うん、何よりも困つたことに、どう述べていいか解らない。アーカディ、お前立つてくれ。」

「いや、お父さん、僕は何にも考へてゐませんから。」

「私が何か考へて來たやうなことを言ふね。まあ、兄さん、これだけ申し上げます、あなたを抱擁させて下さい。御幸福を祈ります。そして出來るだけ早く歸つて來て下さい。」

パヴエル・ペトロウエッチは皆と接吻した。勿論カテイアを除きはしなかつた。フェニチカの番には彼女の手に接吻したが、彼女はまだ都合よく手を差し出すことを學んでゐなかつた。それから彼は

又充たされたコップを干して、深い吐息をつきながら言つた。

「皆さん、幸福でゐらつしやい！　さやうなら！」最後のさやうならを英語で言つたが、それは誰の氣にも留められなかつたけれども、一同は感動した。

「バザロフの記憶のために。」と、カテイアは夫とコップを合せる時に低く呟いた。アーカディはそれに應じて彼女の手を暖く握つた。然し彼はこの乾盃の言葉を聲高に言ひ出さうとはしなかつた。

これが結末である。さう見えないであらうか？　多分讀者の中には、此處に紹介した人物の各々が現在何をしてゐるかを知りたいと思ふ者もあらう。その人々のために作者は用意してゐる。

アンナ・セルギエウナは近頃、戀愛からではなく、實際方面から、ロシアの未來の指導者の一人と結婚した。それは賢明な法律家で、強い實利的觀念と強い意志と著しい雄辯とを持つた、而も――まだ、若く善良な、氷のやうな冷靜な人である。彼等は共に最大の調和の中に生活してゐるから、將來は多分完全な幸福……恐らく愛の生活に達するだらう。K公爵夫人は死んでしまつて、その命日は忘れられた。キルサノフ父子はマリーノに住み、その財産は回復しつつある。アーカディは土地の整理を熱心にして、今では「農場」から立派な收入があがつて來る。ニコライ・ペトロウイッチは農奴解放實行の委員の一人にされて全力を傾けて働いた。彼は常に其の地方を驅け廻つて、長い演說をし

た。（彼は農奴が事物を理解するやうにならなければならぬ、つまり彼等は同じ言葉を繰り返して說くことに依つて靜肅な狀態に導かねばならぬといふ意見を持してゐた。）而も、本當のことを言へば、彼は、解放（これをフランス語のやうに發音する）に就いて流行から或は憂鬱から語るところの洗錬された紳士にも完全な滿足を與へず、と言つて、無遠慮に「呪はれた解放」と罵る無教育な紳士にも矢張り滿足を與へなかつた。彼は双方に對して餘りに氣が弱いのである。カテリナ・セルギエウナは子供、小ニコライを產み、カテイアは面白さうに驅け廻つたり流暢にお喋りなしたりする。フエニチカ・フエドオシヤ・ニコラエウナは夫とミテイアとの世話をして誰よりも義理の娘たるカテイアを尊敬した。カテイアがピアノを彈いてゐると、彼女は喜んで終日その傍で過した。ピオートルに就いて一口言ふ。彼は愚かさと勿體ぶりとで全く石のやうになつた。然し彼も結婚して花嫁と一緒に持參金を貰つた。この花嫁は町の植木屋の娘で、前にただ時計を持つてゐないといふだけの理由で二人の立派な求婚者を拒絕した女だつた。幸にしてピオートルは時計を持つてゐたばかりか、山羊皮を一足持つてゐた。

ドレスデンにあるブリュウルの高臺で、二時から四時の間――散步に最も賑かな時間――に、五十位の、白髮の、痛風に苦しんでゐるらしいが、然し美しい、立派な服裝をした、而も長い間上流社會

にゐたとに依つてのみ得られるところの特殊の風采をした一人の男に出會ふことがある。これがパブエル・ペトロウイツチである。彼はモスクワから健康のために外國に出掛け、ドレスデンに居を定めた。そこで彼は主として英國人とロシア人と交つてゐる。英國人とは簡單に、殆んど控目に、だが威厳を以て振舞ふ。彼等は彼をうるさく思つたが、所謂「完全な紳士」なので尊敬してゐる。ロシア人に對しては、それよりも自由に氣輕に振舞つて、癇癪を起したり自分自身や彼等を嘲しつたりした。然しそんなことは彼に依つて非常に上品に、ふさはしくされるのである。彼はスラヴ贔負の意見を持つてゐたが、これはよく知られてゐる通り、上流社會に於ては「極く珍しい」ことと認められてゐる。彼はロシア語では何も讀まない。然し机の上には、百姓の襞のある靴の形をした銀の灰皿が載かれてある。彼はロンアの旅行者から度々面會を求められるので、例のコトヴィ・イリイッチ・コリアジンも一度その堂々とした訪問振りを見せたことがあつた。一方土地の人々には彼は餘り會はなかつたが、彼等から頗る尊敬されてゐた。誰も「キルサノフ男爵閣下」位宮廷禮拜堂や劇場の切符を得る者はゐなかつた。彼は凡てのことを出來るだけ善良な態度でして、相變らず世間に何か小さな反響を與へてゐた。彼が昔社交界の大獅子だつたことは決して無駄ではなかつた。――然し人生は彼にとつて重荷だつた……彼自身が豫想したよりも重荷だつた。ロシア教會内で、一方の壁に身を凭せて、物思ひに沈み、長い間身じろぎもせず、悲しさうに唇を閉ぢてゐるかと思ふと、不意に我に返つて、殆んど眼に留らないやうに十字を切り始める――その姿を一瞥さへすれば、それがよく解るのである。

クヽシン夫人も外國へ行つた。彼女はハイデルベルヒにゐて、今は自然科學でゐるのでなく建築を學んでゐる。彼女の言ふところに依ると、その方面で新しい法則を發見したさうである。彼女は矢張り學生、殊にロシア人で自然科學や化學を研究してゐる若い學生と親しくしてゐる。ハイデルベルヒに澤山集まつてゐるこれ等の學生は、初めは事物に就いての意見の健全なことを以て素朴なドイツの教授連を驚かし、後には、その同じ教授連を、全然の無能と絶對の怠惰とを以て驚かすのである。酸素と窒素との區別も知らない癖に懐疑と自惚とに充たされてゐる、かうした二三の若い化學者と交際しながらシトニコフもペテルスブルグをさまよつてゐる。偉大にならうと心掛けながら、又彼の信念に於ては、バザロフの「事業」を續けてゐる。最近誰かが彼を攻撃したといふ話がある。然し彼はその男を辯駁したといふ。名も知れない小さな論文で、名も知れない小さな雜誌で、彼は、その彼を攻撃した男は卑怯者であると暗示した。これを彼は皮肉だと言ふ。彼の父は前と同じく彼を苛めるが、妻は彼を馬鹿として……同時に文學者として認めてゐる。

ロシアの墟末の一隅に、小さな村の墓地がある。殆んど凡てのロシアの墓地がさうであるやうに、これも慘めな光景を見せてゐる。これを圍んだ溝は古から雜草に蔽はれ、灰色の木造の十字架は倒れて嘗ては塗られた破風の下に朽ちてゐる。石の臺は誰かが背後から押しやつたかのやうに位置を變へ、二三の裸木が淡い陰影を投げて、羊は墓碑の間をさまよふ……。然しそれ等の中に、人にも觸れられず、野獸にも踏まれず、わづかに小鳥がその上に止つて夜明けに鳴くものが一つある。鐵柵がその周圍を繞つて、二本の若い樅樹が兩方の端に植ゑられてゐる。イエフゲニイ・バザロフは此處に埋められてゐるのだつた。餘り遠くはない小さな村から、よく二人の弱々しい老人が詣る――二人は夫妻であつた。互ひに助け合つて重い足取りで彼等は此處に來て、柵の前に伏し、跪いたまま何時までも痛ましく泣き嘆き、さうして、その下に彼等の息子が永眠してゐる無言の石を瞶める。二人は短い言葉を取り交し、石の塵を拂ひ、樅の樹の枝を眞直にして、再び祈り、此處から離れ得ない。此處にゐれば彼等は息子に、息子の記憶に、一層近づく氣がするのである……。彼等の祈り、彼等の涙は無駄なものであり得やうか？　この愛、神聖な身を捧げる愛が無力であり得やうか？　ああ、否！　墓の下に隱れた者のこころが如何に狂猛的で、罪深く、且つ反抗的であつたらうとも、その上に茂つた花は、その邪氣なき眼を以て吾々を滑らかに覗く。それはただに永遠の平和を語るのみではなく、「冷やかな

る」自然のあの大きな平和を語つてゐる、同時に永遠の調和と、永久の生命とを語つてゐる。

――了――

その前夜

牧一也訳

その前夜

一

一八五三年の夏の或る烈暑の日に、クンツオウオから遠くないモスクワ河の堤防の或る高い菩提樹のかげに二人の青年が草の上に横になつてゐた。一人は殆ど二十三かと見へる背の高い色の淺黑い、いくらかねぢけた鼻ではあるが、鼻筋のよく通つた額の廣い男だが、大きな口を僅かにほほゑませて、小さな灰色の目を半分とぢて臥しながら思ひに耽つて遠方を凝視してゐる。もう一人の靑年は腹んぼいになつて、美麗な縮れ上つてゐる毛の頭に兩手をあてゝゐるが、これも矢張り遠方を眺めてゐる。彼はもう一人の男よりも三つの年上であるが、一見すれば非常に若いのだ。口髭が恰度生えたばかりで腭にはまだ薄ぼけたうぶげがもぢやもぢや生えてゐる。さうしてこの小作りな威勢の好い丸顔にも平和な蒼色の目にも、可愛らしい突き出た脣にも、眞白な小さな手にも委く子供らしい美しさと、持のいい柔和があつた。落度のない健康と若さから來る幸福な快活――無邪氣と自負とやりばなしの魅力――彼のあらゆるものが、それを暗示してゐた。彼は目を一つ閃めかすにも、笑ひ顏をするにも頭を傾けるのにも、總て立派な兒になつてゐる子供の風態を失はない。彼はブルースのやうに縫ひ立ての だぶだぶした白い上衣を着て青色の巾を細い喉にぐるぐる巻いて、使ひ込んだ古ぼけた麥藁帽を傍の

草の上に投げ出してゐたのであつた。

彼に比較すればもう一人の男は年上に見えるが、その角張つた顔では、彼も幸福に自分を樂んでゐるとは思ふことさへ出來なかつた。彼の臥してゐるさまは非常にだらしがない。尻すぼりの大きな頭が、その長い首に不體裁にくつついてゐる。その手の體裁もだらしがないし、黑の短い上衣を身狹に着けてゐるその身體も不體裁だし、蟋蟀の後脚のやうに膝を立てゝゐるその長い足も醜いのだ。で、それにも拘らないで、彼が教育のある人間であることは、認識しない譯には行かなかつた。その不體裁の身體全體に、どこか生れのいゝ風態があり〳〵とそなはつてゐるし、その額は平凡で多少滑稽味はないでもないが、それでもどこかに親切な考へ深いところがある。彼の名はアンドレイ・ペトロヰッチ・ベルセネフといつた。もう一人の髪の美しい青年はパウエル・ヤコウリッチ・シュービンと云つた。

「君はなぜ僕みたいに腹んばにならないの？」

と、シュービンが初めた。

「かうやつてゐるといゝぜ。兩方の踵を跳ねあげて打つつけてごらん。もつといいぜ。——ね。鼻の下に草があるだらう。景色を見るのが、つまらなくなつたら、草の葉を歩いてゐる甲蟲を見ることが

出來るし、動き廻はる蟻も見えるんだ。その方がよつぽどいいんだ。君のそれは擬古典主義の體裁だぜ。だが、どういふ風に見たつて踊りつ子が厚紙の岩によりかゝつてゐるときの恰好だからな。君はいま休むべき立派な權利をもつてゐることを忘却しちやいけないぜ。これは全くふざけごとぢやないんだ。君、御寛大にあれだ。總ての努力を止めるんだ。さうして、君の疲勞した四脚を休ましめよだ。」

シュービンはこのことをなかば退屈まぎれに、半ば馬鹿氣たやうに鼻聲で話し續けた。（あまやかし子といふものは、砂糖漬をもつて來てくれるこれの友人には、かういふやうに話すものだ。）で、彼はこの答へも待たないで、殊更に言葉を續けるのである。

「蟻だとか、甲蟲とか、委く有益な蟲類においてはね僕をもつとも驚かすものは、何等の驚くほどのまじめにあるのだ。彼等が、あのすばらしい調子でいつたりきたりするのを見たまへ。彼等は非常に大變のことのやうにやつてゐるからな——、君、人間は創造の主だ。最も上の存在物だ。その人間が彼等を瞶めてゐたつて、彼等方では見向きもしなんだ。君、ねえ、創造の主の主人の鼻に蚊蚋がとまつて、それを食ひ物にするではないか。このくらひけしからんことはない。それにだね、一面から云へば彼等の生活はどうして僕等の生活よりもげびてゐるんだ？　僕等が自分の生活をきびしく保存する

ことは不可能だ？　ねえ、君、哲學者！　この問題を解決してくれないか、どうして沈默してゐるのだ？　おい？」

「どうしたい？」

ベルセネフは身を起してさう云つた。

「どうしたつて！　君の友人がもつと深刻の思想を君に提してゐるのに、君はそれを聞かうとしないではないか。」

「僕は景色にうつとりとしてゐるんだ。見たまへ、野原が日の光に照り輝いてゐるではないか。」

ベルセネフは多少口籠つて云つた。

「多少は氣持のいゝ色が出てゐるね。」とシユービンが云ふ。

「自然はうまい。それは實際のだ。」

ベルセネフは頭を動かして、

「君は僕なんぞよりも自然に對して非常に熱心であつていゝ事だが。君は美術家だなんだから、その方面の専問家ではないか。」

「いゝや、僕はその傾向の人間ではない。」

シユービンは帽子をま深くかぶつて答へた。

「肉體が僕の専問だよ。僕の仕事は肉體にある。身體や肩や足や腕の形を創るのが、僕の仕事だが、斯樣に景色には定まつたと云ふものが少しもないが。たゞ廣く擴がつてゐるばかりぢや……取れると思ふなら手にとつて見るがいゝ。」

「けれどもここにも美があるではないか。」

ベルセネフは云つた。——「時にだね、君のあの浮彫の仕事はすんでしまつたのかい？」

「どつちの方かね？」

「子供と山羊の奴だよ。」

「だめだ。だめだ。だめだ。」

シユービンは怕氣で叫んだ。——「僕はあの古代の本當の物を見てから、自分のつまらないものをぶちこはしてしまつた。君は自然を指して『ここにも美があるんだ』つて云ふが、むろんここにだつて美はあるんだ。君の鼻にだつて美はあるんだ。けれども總ての種類の美を手に掛けて見ることは出來ない。むかしの人間はさう云ふことはしなかつた。むかしの人間の創作には、どこか別の處から、美からくだつて來てゐるんだ。——かならず天からでも來たんだらう。全世界が彼等のものだつた。が、

僕等の手のとどくだけの處はこんなに廣大ぢやないのだ。僕等の腕は短かい。僕等はちやうど小さい水溜に釣針を投げて、それをぢつと見てゐるやうなものだ。うまく魚が引つかゝれば、勿論、その方がいゝが、ひつかゝらなくても――」

シユーピンは舌をぺらと出した。

「よせよ、よせよ。」とベルセネフは云つた。

「それはパラドックスだ。君は美に關する共鳴がなければ美に接觸してそれに關する愛が起らなければ君の作品にだつて美は出て來ない。美しい景色、美しい音樂、これらが君の心に觸れなければ、畢竟、君が、それに共鳴しなければ――」

「あゝ、君は堅固の共鳴論者だ！」

シユーピンは自分が創造したこの新しい稱號を微笑しながらさう云つたが、ベルセネフは考へに傾つてゐた。

「いゝや、君、」とシユーピンは續けた。

「君は科學的な男だ。哲學者だ。モスクワ大學を三番で卒業したんだ。君と議論するのは、おそろしい。殊に僕のやうに學問なしの人間はねえ。しかし僕は君にさう云ひたい。――僕の藝術を除外して

は僕の愛してゐるたゞ一つの美は女にある……娘にあるつて。勿論、これはこのごろのことだ。」

彼は仰いて兩手を頭の下で組んだ。

短い間が沈默の中に過ぎ去つた。日さかりの靜けさが、眠るやうに炎えてゐる野におりてゐた。

「女と云へばね。」シユーピンがまた云つた。「スタホフの態度を一向聞かないが、どうしたんだらう！君モスクワであの人に會つたか？。」

「いゝや。」

「あのおぢいさんもすつかりだめになつたね。終日、アウグスチナ・クリスチアノウナの處へ行つて、一緒に坐つてゐるのだから。もし死ぬぐらゐ退屈してゐる癖に、まだ腰を降してやがる。二人がおたがひに顔を瞶めてゐる樣子つたらない……あれを見ると、文字通り胸が惡くなる。人間と云ふものは奇妙な動物だ。けれども、あの男にはあのアウグスチナが必要だ。が、僕にあの女の顔ほどいやなものはない。あひるのやうな顔だ！ このあひだ僕はダンタンの筆致で、あの女のカリケチユアを書いたんだが、可成、上手に出來た。君に見せてやらう。」

「それでエレーナ・ニコラエヴナの胸像。」とベルセネフはきいた。

「あれは上手に進んでゐるか？」